藤並地区遺跡

—県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

二〇一二年三月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

— 県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2012 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

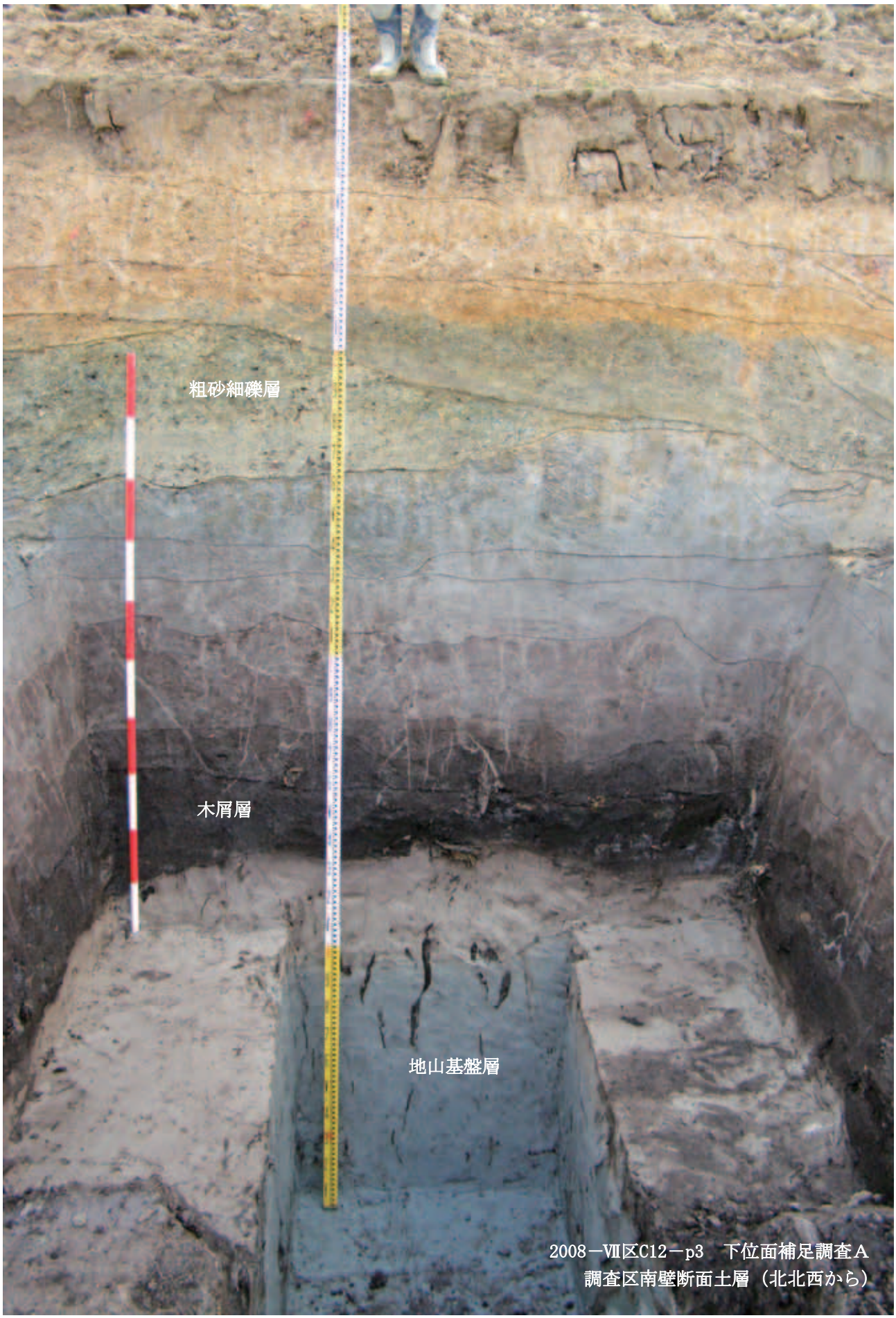
― 県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

2012年３月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

1　藤並地区遺跡　航空写真（1989 年 6 月撮影）

2　航空写真（手前は、2007－Ⅲ区：東から）



2008－Ⅶ区C12－p3　下位面補足調査Ａ
調査区南壁断面土層（北北西から）

序

有田川町は和歌山県の中部に位置し、高野山に源を発する有田川が町域の中央部を西に蛇行しながら流れています。藤並地区遺跡は、この有田川の南側に位置しています。

藤並地区遺跡は、これまで海南湯浅道路及び湯浅御坊道路建設工事に伴う大規模な発掘調査によって、後期旧石器時代から中世にいたる数多くの遺構・遺物が発見されています。また、地元で良質な粘土が採掘できることから、遺跡内とその周辺部には奈良時代の須恵器や瓦を生産した窯跡が多く存在します。このような発掘調査事例の増加に伴い考古学的な手法による当該地域の歴史の解明が期待されているところです。

この度、当文化財センターでは、県道吉備金屋線道路改良工事に伴い平成18年度から同20年度にかけて発掘調査を実施しました。小規模な調査ではありましたが、後期旧石器時代の生活に関連する遺構・遺物を始め、奈良時代から室町時代にかけて断続的に続く人々の営みの痕跡を発見し、往時の当地域の景観の変遷の一端を明らかにすることができました。

平成23年度に出土遺物等整理作業を実施し、このたびその成果をまとめた発掘調査報告書を刊行することができました。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成24年３月

公益財団法人　和歌山県文化財センター
理事長　　森　　郁　夫

例 言

1　本書は、和歌山県有田郡有田川町土生・明王寺・水尻に所在する藤並地区遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、県道吉備金屋線道路改良工事に先立つもので、平成18年度から同20年度に藤並地区遺跡の発掘調査業務を行い、同23年度に出土遺物等整理業務を実施した。

3　発掘調査は、和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山文化財センターが、出土遺物等整理業務は、公益財団法人和歌山県文化財センターが和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。

4　現地調査及び調査報告書の刊行に際し、有田川町教育委員会をはじめ、関係機関および地元の方々からご助言・ご協力を得た。

5　本書は、各発掘調査・出土遺物等整理業務担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。

6　図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。

7　発掘調査及び調査報告書の作成にあたっては、次の諸氏から多大なご協力・ご教示を賜った。

川口修実（有田川町教育委員会）、北野隆亮（財団法人和歌山市都市整備公社）、中原正光（元 海南市立海南高等学校）、中屋志津男（元 和歌山県立青陵高等学校）

8　発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

9　本書に掲載した出土遺物は、各堆積遺物包含層・検出遺構の性格を推し量る必要のあるものを任意に抽出したもので、全ての出土遺物を網羅するものではない。

10　発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調　査　組　織

事 務 局	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成23年度
事 務 局 長	熊崎　訓自	松田長次郎専務理事	松田長次郎専務理事	田中　洋次
				酒部　三依
事務局次長		山本　新平		山本　高照
管 理 課 長	西本　悦子	山本　新平	酒部　三依	山本　高照
埋蔵文化財課				
埋蔵文化財課長	渋谷　高秀	村田　　弘	村田　　弘	村田　　弘
発掘調査業務担当				
文化財専門員	冨加見泰彦	山本　高照		
埋蔵文化財課主任技師	土井　孝之	土井　孝之	土井　孝之	
				岩井　顕彦
出土遺物整理業務担当				土井　孝之

凡　例

1　発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター　発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006 年 4 月）に準拠して行った。

2　遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。

3　遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.+）表示である。

4　発掘調査及び整理作業で使用した調査コードと調査地区は、以下のとおりである。

　　０６−２１・０３２　（2006年度−旧吉備町・藤並地区遺跡）　Ⅰ区〜Ⅲ区

　　０７−２１・０３２　（2007年度−旧吉備町・藤並地区遺跡）　Ⅰ区〜Ⅲ区

　　０８−２１・０３２　（2008年度−旧吉備町・藤並地区遺跡）　Ⅰ区〜Ⅶ区

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。

5　地区割の詳細については、本文の第Ⅱ章第２節に記述する。

6　遺構番号と出土遺物登録番号は、当センター「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006 年 4 月）に準拠して、各年度の調査区毎に算用数字の 1 からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類（遺構の性格）を付した。但し、2008－Ⅲ区と 2008－Ⅶ区は、同一遺構が繋がるため同一遺構番号を使用した場合もある。また、各調査区には当該年度の西暦年を冠して記述する。

　　例：　2006－Ⅰ区 52 石列状遺構、2007－Ⅲ区 1 溝、2008－Ⅲ区 1 粘土採掘坑

7　本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、撹乱でケバの表現を各々変えている。

ケバ表現

8　本書に掲載した遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。但し、古代から中世の土器類に 201 から、旧石器・縄文時代の石器・弥生土器・その他の石器・石製品・銭貨に 301 から付したものは写真図版のみである。

9　遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器類は１／３、旧石器・打製石器類は３／４、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。

10　調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2000 年版）を使用した。

土層名で 2 種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本 文 目 次

第Ⅰ章　藤並地区遺跡の歴史的環境 …… 1

第１節　遺跡の地理的環境 …… 1

第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 1

第３節　調査の経緯と経過（既往の調査） …… 5

第Ⅱ章　発掘調査・出土遺物整理の方法 …… 8

第１節　調査現場の記録作業 …… 8

1　写真撮影作業 …… 8

2　実測図作成作業 …… 8

3　航空写真撮影・基準点測量 …… 8

第２節　調査地の位置と地区割 …… 9

第３節　出土遺物等資料の整理 …… 12

1　出土遺物応急整理 …… 12

2　出土遺物等整理業務 …… 12

第Ⅲ章　各年度の調査成果と出土遺物 …… 14

第１節　第１次調査（2006 年度） …… 14

1　調査の概要 …… 14

2　2006－Ⅰ区 …… 14

3　2006－Ⅱ区 …… 16

4　2006－Ⅲ区 …… 18

5　小結 …… 19

第２節　第２次調査（2007 年度） …… 20

1　調査の概要 …… 20

2　2007－Ⅰ区 …… 20

3　2007－Ⅱ区 …… 21

4　2007－Ⅲ区 …… 22

5　小結 …… 25

第３節　第３・４次調査（2008 年度） …… 26

1　調査の概要 …… 26

2　2008－Ⅰ区 …… 27

3　2008－Ⅳ区 …… 28

4　2008－Ⅵ区 …… 28

5　2008－Ⅱ区 …… 30

6　2008－Ⅴ区 …… 31

7　2008－Ⅲ区 …… 31

8　2008－Ⅶ区 …… 33

9　小結 …… 35

第Ⅳ章　総括 …… 37

調査遺構図面 …… 38

出土遺物実測図 …… 54

出土遺物一覧 …… 62

報告書抄録

写真図版遺構・遺物

挿図目次

図１　有田川町西端部(旧吉備町)の地形と地質…… 1
図２　藤並地区遺跡と周辺の遺跡…… 2
図３　既往の調査地点位置図…… 7
図４　調査範囲と地区割(100m区画) …… 10
図５　調査位置と区画割(４m区画)…… 11
図６　2006－Ⅰ・Ⅱ区　調査遺構全体図 …… 38
図７　2006－Ⅱ区　基本土層　調査区北壁断面土層　38
図８　2006－Ⅱ区　基本土層　調査区南壁断面土層　38
図９　2006－Ⅰ区　51谷状落ちの基本土層
土層畔断面土層…… 38
図10　2006－Ⅰ区　52石列状遺構実測図 …… 39
図11　2006－Ⅰ区　52石列状遺構断面土層図 …… 39
図12　2006－Ⅰ区　53粘土採掘土坑実測図 …… 39
図13　2006－Ⅲ区　調査遺構全体図 …… 40
図14　2006－Ⅲ区　基本土層　調査区東壁断面土層　40
図15　2006－Ⅲ区　各土坑実測図 …… 40
図16　2007－Ⅰ区　調査遺構全体図 …… 41
図17　2007－Ⅰ区　基本土層　調査区北壁断面土層　41
図18　2007－Ⅰ区　23土坑調査区西壁断面土層 …… 41
図19　2007－Ⅰ区　13土坑実測図 …… 41
図20　2007－Ⅱ区　調査遺構全体図 …… 42
図21　2007－Ⅱ区　基本土層　調査区西壁断面土層　42
図22　2007－Ⅱ区　５土坑実測図 …… 42
図23　2007－Ⅱ区　11土坑実測図 …… 42
図24　2007－Ⅱ区　18噴砂と中世小溝の関係
調査区西壁断面土層…… 42
図25　2007－Ⅲ区　調査遺構全体図 …… 43
図26　2007－Ⅲ区　基本土層　調査区南西壁断面土層 43
図27　2007－Ⅲ区　１溝断面土層図 …… 43
図28　2007－Ⅲ区　６土坑実測図 …… 44
図29　2008－Ⅰ区　調査遺構全体図 …… 45
図30　2008－Ⅰ区　基本土層　調査区北東壁断面土層 45
図31　2008－Ⅳ区　調査遺構全体図 …… 46
図32　2008－Ⅳ区　基本土層　調査区北壁断面土層　46
図33　2008－Ⅵ区　調査遺構全体図 …… 47
図34　2008－Ⅵ区　基本土層　調査区南東壁断面土層 47
図35　2008－Ⅵ区　11土坑実測図 …… 47
図36　2008－Ⅵ区　１溝断面土層図 …… 48
図37　2008－Ⅱ区　調査遺構全体図 …… 49
図38　2008－Ⅱ区　第３層系包含層下面遺構 …… 49
図39　2008－Ⅱ区　基本土層　調査区北壁断面土層　49
図40　2008－Ⅱ区　掘立柱建物１実測図 …… 50
図41　2008－Ⅲ・Ⅶ区上位面
調査遺構全体図…… 51・52
図42　2008－Ⅶ区　基本土層
調査区南壁断面土層…… 51・52
図43　2008－Ⅲ区　４土坑実測図 …… 51・52
図45　2008－Ⅶ区下位面　101土坑実測図…… 51・52
図45　2008－Ⅶ区下位面　調査遺構全体図 …… 53
図46　出土遺物実測図１…… 54
図47　出土遺物実測図２…… 55
図48　出土遺物実測図３…… 56
図49　出土遺物実測図４…… 57
図50　出土遺物実測図５…… 58
図51　出土遺物実測図６…… 59

表目次

表１　藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧…… 3
表２　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表 …… 9
表３　各地区出土遺物数量…… 60
表４　各地区出土遺物接合関係一覧…… 61

写真目次

写真１　土生池遺跡出土ナイフ形石器…… 4
写真２　田殿尾中遺跡出土弥生土器…… 4
写真３　旧吉備中学校校庭遺跡第１次調査
全景(北から)…… 4
写真４　旧吉備中学校校庭遺跡第４次調査
竪穴建物20・22(南西から) …… 4
写真５　天満1号墳(泣沢女の古墳)石室(南から) …… 5
写真６　天満Ⅰ遺跡中世墓出土和鏡…… 5
写真７　藤並地区遺跡1991年度M地区出土旧石器 …… 5
写真８　藤並地区遺跡1991年度J地区検出
掘立柱建物…… 6
写真９　2006－Ⅰ区　調査遺構全景と湯浅御坊道路
(北北東上空から)…… 6
写真10　2007－Ⅲ区　１溝掘削状況(南東から) …… 6
写真11　有田川町2007年度調査出土香炉蓋 …… 7
写真12　2008－Ⅱ区東側　遺構位置全体図作成
(北寄り西から)…… 8
写真13　2008－Ⅲ区　航空写真撮影 …… 8
写真14　出土遺物台帳登録(応急整理)…… 12
写真15　2008－Ⅲ区下位面　粗砂細礫洗浄作業
(応急整理)…… 12
写真16　2008－Ⅶ区下位面　粗砂細礫からの旧石器遺物
の抽出(応急整理)…… 12
写真17　出土遺物(土器)への登録コード注記…… 13
写真18　遺物の接合…… 13
写真19　遺物充填材による補強・復元 …… 13
写真20　出土遺物の実測図作成…… 13
写真21　遺物実測図トレース作成…… 13
写真22　実測遺物台帳登録データ入力…… 13
写真23　2006－Ⅰ区E11－f22　調査区東壁断面土層
(西から)…… 15
写真24　2006－Ⅰ区E11－f23　53粘土採掘
土坑掘削状況(北西から)…… 15
写真25　2006－Ⅰ区　52石列状遺構掘削状況
(北北西から)…… 16
写真26　2006－Ⅰ区　E11－h・i22　51谷状落ち
土壌採取状況(北東から)…… 16
写真27　2006－Ⅱ区E12－n9　調査区南壁断面土層
(北から)…… 17
写真28　2006－Ⅱ区E12－15
18土坑南西－北東断面土層(南東から) …… 17
写真29　2006－Ⅲ区北半E13－m23　調査区東壁断面土層

(西から)…… 18
写真30　2006－Ⅲ区北半E14－m1　11土坑断面土
(南東から)…… 18
写真31　2006－Ⅲ区南半　小溝群(北東から)　…… 19
写真32　2007－Ⅰ区北半E13－x・y1
調査区北壁断面土層(南から)…… 20
写真33　2007－Ⅰ区南半E13－y7　１土坑調査区西壁
断面土層(東南東から)…… 21
写真34　2007－Ⅱ区E13－o6　５土坑検出状況
(北北東から)…… 22
写真35　2007－Ⅱ区E13－p7　18噴砂調査区西壁
断面土層(東から)…… 22
写真36　2007－Ⅲ区　調査区南西壁断面土層
(南東から)…… 23
写真37　2007－Ⅲ区C12－g1　２井戸東西断面土層
(南から)…… 23
写真38　2007－Ⅲ区　1溝－5井戸間の断面土層
(東南東から)…… 23
写真39　2007－Ⅲ区　1溝遺物出土状況(南南東から)　24
写真40　2007－Ⅲ区C11－k25・C12－k1　６土坑
(北東から)…… 24
写真41　2007－Ⅲ区C11－k25・C12－k1　４土坑
(北から)…… 24
写真42　2007－Ⅲ区　６土坑出土の石器剥片　…… 25
写真43　2008－Ⅰ区西側西　水田区画(南西から)　… 27
写真44　2008－Ⅳ区F12－d6　調査区北壁断面土層
(南南東から)…… 28
写真45　2008－Ⅳ区E12－x7・F12－a7　小溝群
(西から)…… 28
写真46　2008－Ⅵ区南西半F12－p15
１溝調査区南東壁断面土層(西から)…… 29
写真47　2008－Ⅱ区東側E12－n・m19・20　10遺構
(北から)…… 31
写真48　2008－Ⅲ区C11－n24・25　４土坑検出状況
(北から)…… 32
写真49　2008－Ⅲ区　１－３粘土採掘坑(東北東から) 32
写真50　2008－Ⅶ区下位面C12－r3・4　101土坑
検出状況(南寄り西から)…… 34
写真51　県文化遺産課確認調査30トレンチ調査区
南壁断面土層(北から)…… 35
写真52　2008－Ⅳ区　道路工事掘削部分
西壁断面土層(東から)…… 35

写真図版目次

写真図版１　2006－Ⅰ区 検出遺構
1　2006－Ⅰ区　調査遺構全景(北東上空から)
2　2006－Ⅰ区　調査遺構全景(南西から)
3　2006－Ⅰ区　粘土採掘土坑群と51谷状落ち肩部(東北東から)
写真図版２　2006－Ⅰ区 検出遺構
1　2006－Ⅰ区　51谷状落ち断面土層全景(東南東から)
2　2006－Ⅰ区　51谷状落ち北半部断面土層細部(東南東から)
3　2006－Ⅰ区E11－h・i22
51谷状落ち断面土層細部(北東から)
写真図版３　2006－Ⅰ区 検出遺構
1　2006－Ⅰ区　52石列状遺構(南南東から)
2　2006－Ⅰ区E11－g19
52石列状遺構の断面状況(南南東から)
3　2006－Ⅰ区E11－g19
52石列状遺構に関係する遺物出土状況(西南西から)
写真図版４　2006－Ⅰ区 検出遺構
1　2006－Ⅰ区E11－f23　粘土採掘土坑群の状況(東北東から)
2　2006－Ⅰ区E11－f23
53粘土採掘土坑東西断面土層(南南東から)
3　2006－Ⅰ区E11－h25
調査区南東壁第6層系踏み込み遺構の遺物出土状況(北西から)
写真図版５　2006－Ⅱ区 検出遺構
1　2006－Ⅱ区　調査遺構全景(真上から:右側が北)
2　2006－Ⅱ区　調査遺構全景(北東から)
3　2006－Ⅱ区　土坑群の掘削状況(西南西から)
写真図版６　2006－Ⅱ区 検出遺構
1　2006－Ⅱ区E12－o5・6　６土坑東西断面土層(南から)
2　2006－Ⅱ区E12－i1　調査区北壁断面土層細部(南から)
3　2006－Ⅱ区E12－q5　鉄砲弾出土状況細部(南南西から)
写真図版７　2006－Ⅲ区 検出遺構
1　2006－Ⅲ区北半　調査遺構全景(真上から:右側が北)
2　2006－Ⅲ区北半　調査遺構全景(南から)
3　2006－Ⅲ区北半　土坑群掘削状況(南東から)
写真図版８　2006－Ⅲ区 検出遺構
1　2006－Ⅲ区南半　調査遺構全景(真上から:左側が北)
2　2006－Ⅲ区南半　調査遺構検出状況:小溝群(北北東から)
3　2006－Ⅲ区南半　地震による液状化の砂脈(北北西から)
写真図版９　2007－Ⅰ区 検出遺構
1　2007－Ⅰ区北半　調査遺構全景(真上から:右側が北)
2　2007－Ⅰ区北半　調査遺構全景(南から)
3　2007－Ⅰ区北半E13－x・y・6・7　土坑群(東から)
写真図版10　2007－Ⅰ区 検出遺構
1　2007－Ⅰ区北半E13－y7
１土坑調査区西壁断面土層(東から)
2　2007－Ⅰ区北半E13－x・y1　調査区北壁断面土層(南から)
3　2007－Ⅰ区南半　調査遺構全景(北上空から)
写真図版11　2007－Ⅰ区 検出遺構
1　2007－Ⅰ区南半　調査遺構全景(南から)
2　2007－Ⅰ区南半E13－x9・10　13土坑東西断面土層(北から)
3　2007－Ⅰ区南半E13－y7
23土坑断面土層:調査区西壁(東から)
写真図版12　2007－Ⅱ区 検出遺構
1　2007－Ⅱ区　調査遺構全景(北上空から)
2　2007－Ⅱ区　調査遺構全景(南から)
3　2007－Ⅱ区　土坑群東西断面土層(北北東から)
写真図版13　2007－Ⅱ区 検出遺構
1　2007－Ⅱ区E13－o6　５土坑東西断面土層(北北東から)
2　2007－Ⅱ区E13－o・p6・7
19・18噴砂の砂脈検出状況(北東から)
3　2007－Ⅱ区E13－p7
18噴砂と中世小溝の関係細部:調査区西壁断面土層(東から)
写真図版14　2007－Ⅲ区 検出遺構
1　2007－Ⅲ区　調査遺構全景(真上から:下側が北)
2　2007－Ⅲ区　調査遺構全景(東から)
3　2007－Ⅲ区　１溝完掘状況と６土坑検出状況(北西から)
写真図版15　2007－Ⅲ区 検出遺構
1　2007－Ⅲ区C12－j1・2　１溝断面土層(北西から)

２　2007－Ⅲ区C12－g1
柱穴群断面土層:調査区北東壁(西南西から)
３　2007－Ⅲ区C11－k25
５井戸掘削状況と調査区北壁断面土層(南東から)

写真図版16　2007－Ⅲ区 検出遺構
１　2007－Ⅲ区C11－k25･C12－k1
６土坑掘削状況(北北東から)
２　2007－Ⅲ区C11－k25･C12－k1
６土坑断面土層(北北東から)
３　2007－Ⅲ区C12－j1　３土坑(東から)
４　2007－Ⅲ区C12－j1　３土坑南北断面土層(東から)

写真図版17　2008－Ⅰ･Ⅳ区 検出遺構
１　2008－Ⅰ区･Ⅳ区
調査遺構全景デジタルモザイク(真上から:上側が北)
２　2008－Ⅰ区西側西　水田区画検出状況(南南西から)
３　2008－Ⅰ区西側東　水田踏み込み検出状況(東から)

写真図版18　2008－Ⅰ区 検出遺構
１　2008－Ⅰ区東側東　水田踏み込み検出状況(東北東から)
２　2008－Ⅰ区東側東F12－e7　水田踏み込み検出状況細部(東北東から)
３　2008－Ⅰ区西側東　調査区北東壁断面土層細部(南西から)

写真図版19　2008－Ⅳ区 検出遺構
１　2008－Ⅳ区　調査遺構全景(真上から:上側が北)
２　2008－Ⅳ区　水田面掘下げ状況(西北西から)
３　2008－Ⅳ区東側　調査遺構全景(北から)

写真図版20　2008－Ⅵ区 検出遺構
１　2008－Ⅵ区南西半･南西端　調査遺構全景(北上空から)
２　2008－Ⅵ区南西半　１溝全景(西南西から)
３　2008－Ⅵ区南西端　調査遺構全景(南南西から)

写真図版21　2008－Ⅵ区 検出遺構
１　2008－Ⅵ区北東半　遺構検出状況全景(南西から)
２　2008－Ⅵ区北東半F12－o13
11土坑掘削状況･南北断面土層(北寄り西から)
３　2008－Ⅵ区北東半F12－n13･o14　調査区南東壁断面土層(北西から)

写真図版22　2008－Ⅱ区 検出遺構
１　2008－Ⅱ区東側　調査遺構全景(北から)
２　2008－Ⅱ区東側E12－m19周辺　第３層下面遺構(西から)
３　2008－Ⅱ区東側E12－m19
包含層第３層内遺物出土状況(北から)

写真図版23　2008－Ⅱ区 検出遺構
１　2008－Ⅱ区西側　調査遺構全景(東上空から:右側が北)
２　2008－Ⅱ区西側　調査遺構全景(北から)
３　2008－Ⅱ区西側E12－o･p17～19　掘立柱建物１(東から)

写真図版24　2008－Ⅱ区 検出遺構
１　2008－Ⅱ区西側E12－o17　掘立柱建物１
33柱穴南北断面土層(西から)
２　2008－Ⅱ区西側E12－o･p22　21土坑(南南西から)
３　2008－Ⅱ区西側E12－q22･23
補足調査　調査区西壁断面土層(東から)

写真図版25　2008－Ⅲ区　検出遺構
１　2008－Ⅲ区　調査遺構全景(真上から:手前右下が北)
２　2008－Ⅲ区　調査遺構全景(西南西から)
３　2008－Ⅲ区　調査遺構全景(東北東から)

写真図版26　2008－Ⅲ区　検出遺構
１　2008－Ⅲ区東半　土坑群･落ち遺構全景(西南西から)
２　2008－Ⅲ区C12－t1　10土坑(東北東から)
３　2008－Ⅲ区C12－s･t2　補足調査
21土坑調査区南壁断面土層(北北西から)

写真図版27　2008－Ⅶ区上位面　検出遺構
１　2008－Ⅶ区上位面　調査遺構全景(東北東から)
２　2008－Ⅶ区上位面東半部　土坑群･落ち遺構全景(西から)
３　2008－Ⅶ区上位面東半部　調査遺構全景(西南西から)

写真図版28　2008－Ⅶ区上位面　検出遺構
１　2008－Ⅶ区上位面
８落ち･８落ち埋土掘削後の遺構(東北東から)
２　2008－Ⅶ区上位面C12－s2･3周辺
20･49･50土坑･51柱穴(北北西から)
３　2008－Ⅶ区上位面C12－o･p1　56･57･58土坑(北北西から)

写真図版29　2008－Ⅶ区下位面　検出遺構
１　2008－Ⅶ区下位面
調査遺構全景(真上から:手前が北北西)
２　2008－Ⅶ区下位面　粗砂細礫層下面遺構全景(東北東から)
３　2008－Ⅶ区下位面C12－r3･4　101土坑(南寄り西から)

写真図版30　2008－Ⅶ区下位面　検出遺構
１　2008－Ⅶ区下位面　調査区北壁断面土層(南南西から)
２　2008－Ⅶ区下位面　調査区南壁断面土層
調査区東端から10～20m(西北西から)
３　2008－Ⅶ区下位面　調査区南壁断面土層
調査区東端から20～35m(西北西から)

写真図版31　2008－Ⅶ区下位面　補足調査
１　2008－Ⅶ区下位面C12－p3　補足調査A
調査区南壁断面土層(北北西から)
２　2008－Ⅶ区下位面C12－s･t4　補足調査B
調査区南壁断面土層(北北西から)

写真図版32　出土遺物１
写真図版33　出土遺物２
写真図版34　出土遺物３
写真図版35　出土遺物４
写真図版36　出土遺物５
写真図版37　出土遺物６
写真図版38　出土遺物７
写真図版39　出土遺物８
写真図版40　出土遺物９

第Ⅰ章　藤並地区遺跡の歴史的環境

第1節　遺跡の地理的環境

藤並地区遺跡（図２の32）は、和歌山県有田郡有田川町（旧吉備町・旧金屋町・旧清水町）土生・明王寺・水尻に所在し、有田川河口から約10㎞遡った左岸に位置する。有田川町の内、旧吉備町域は、紀の川下流域を中心に広がる和歌山市・海南市の南に位置し、これらとは長嶺山脈を介して接しており、有田川流域ではもっとも安定した平野部が広がる地域である。

旧吉備町付近の地形は、有田川右岸では片岩を主体とする三波川変成帯からなる山地地形が河川近くまで迫ってきており、河成段丘も発達しない。一方、藤並地区遺跡が所在する有田川左岸は、中世代白亜紀の地層からなる緩やかな傾斜を示す山地地形が広がり、その間に小河川により形成された小規模な開析谷が多く存在する。さらに、山地北斜面では浸食作用による河成段丘面が形成され、その下位には堆積作用による氾濫原および沖積平野部が発達する。旧石器時代には山地地形上に、縄文時代には段丘上に、弥生時代以降には主として沖積平野部と段丘上に各々の時代の集落遺跡が展開している。

藤並地区遺跡は沖積平野部の南西端に立地しつつも、雲雀山からの派生丘陵や土生山・水晶山・神楽山などの標高60～130mほどの山地地形に囲まれている。そのため、標高20m付近に位置するにも関わらず、盆地状の湿地に近い条件下に位置している。

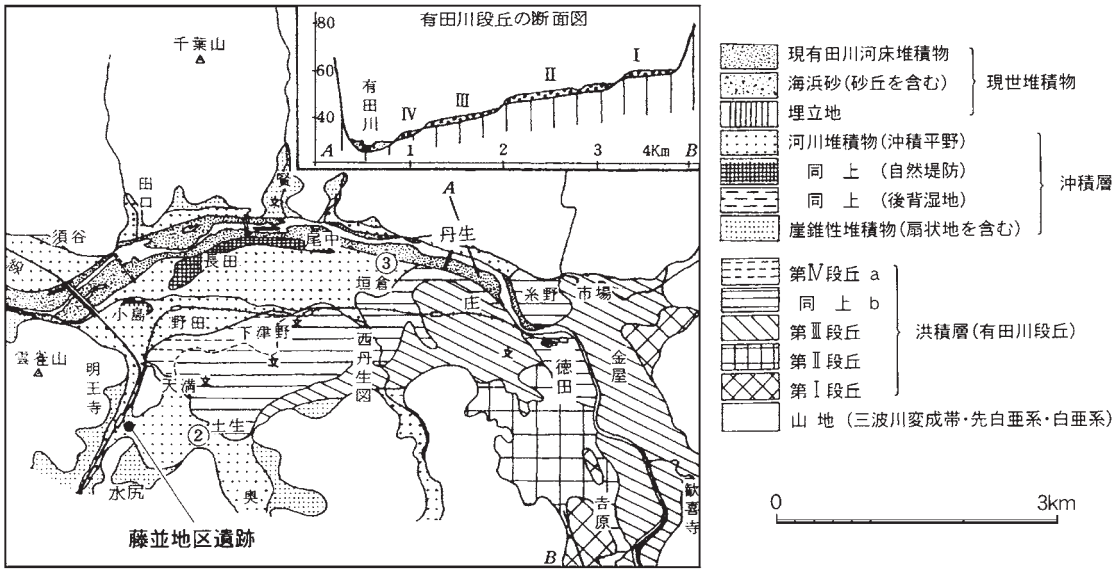


図１　有田川町西端部（旧吉備町域）の地形と地質

第2節　遺跡周辺の歴史的環境

藤並地区遺跡（図２の 32、以下、「図２」を省略）が所在する有田川下流域は、旧石器時代の遺跡を皮切りに遺跡の分布が比較的密に認められる地域である。付近には沖積平野と河成段丘が発達し、有田川流域では最も広い平野が広がっており、この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡は多く、縦長剥片を創出するための頁岩製石核を出土した野田地区遺跡（38）、サヌ

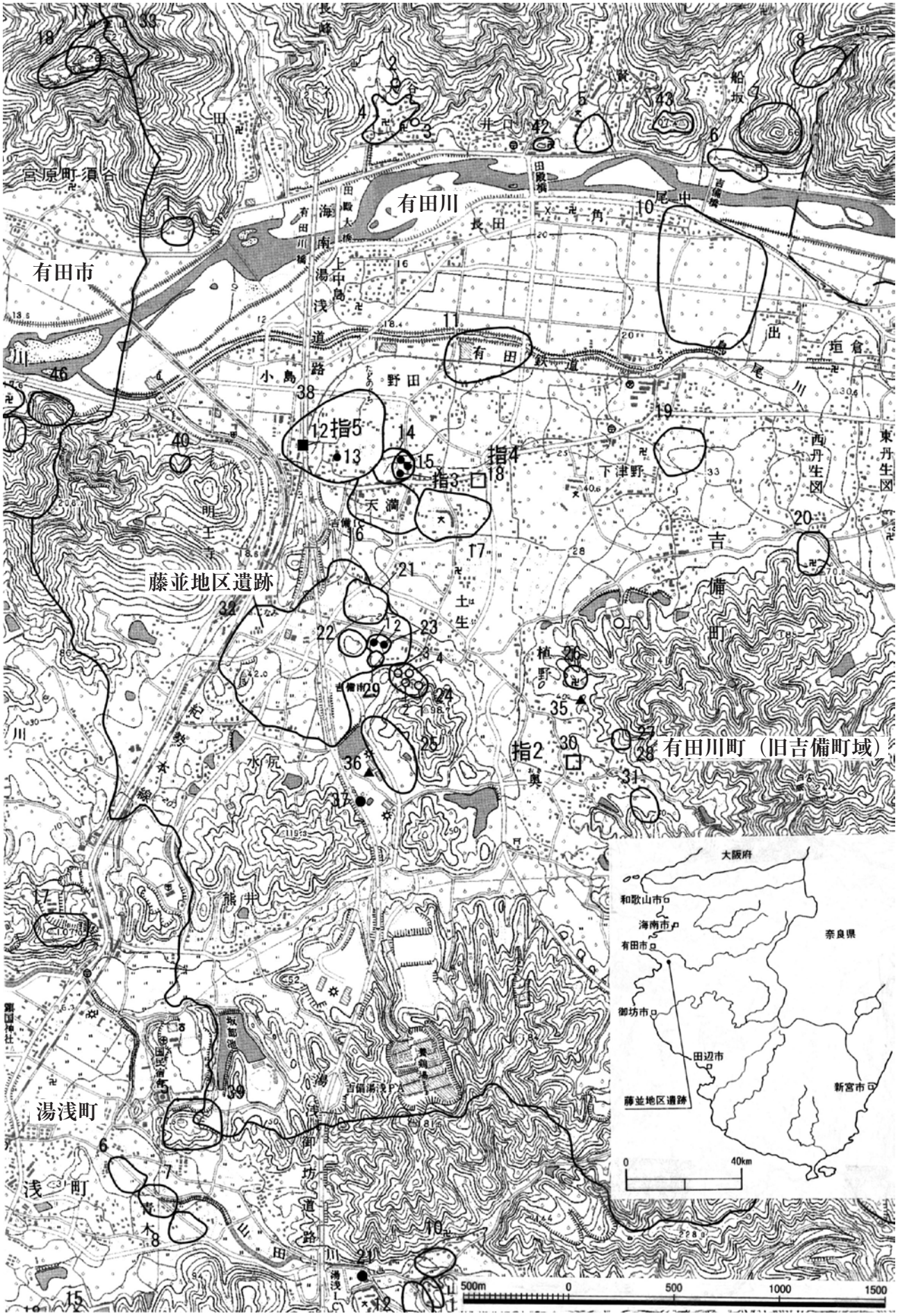


図２　藤並地区遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

表１　藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
有田川町(旧吉備町域)						
1	田殿廃寺跡	田口	寺院跡	奈良	丘陵裾	瓦
2	大谷古墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	須恵器
3	大谷２号墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	円墳、鉄刀
4	築那印跡	大谷	寺院跡	平安～室町	扇状地	土師器、須恵器、瓦器、仏像瓦、文字瓦、石塔
5	賢遺跡	賢	散布地	奈良	扇状地	
6	夏瀬の森遺跡	出	散布地	弥生	山麓	弥生土器
7	夏瀬の森祭祀遺跡	出	祭祀跡	弥生	丘陵頂	神奈備形の山岩、弥生土器
8	最勝寺跡	出	寺院跡	平安～室町	丘陵	瓦、瓦器、石塔
10	田殿尾中遺跡	尾中	集落跡	弥生～室町	沖積平野	竪穴建物、環濠、水田跡、弥生土器、石器、瓦器
11	旧吉備中学校校庭遺跡	下津野	集落跡	弥生～鎌倉	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、鋳造遺構、弥生土器、石器、小型青銅鏡、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器
12	野田の宝篋印塔	野田	石塔	南北朝	河岸段丘	貞和二年銘、県史跡
13	観音寺跡	野田	寺院跡	平安～室町	河岸段丘	布目瓦、瓦器
14	藤並遺跡	天満	散布地	古墳	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、柵列、土師器、須恵器
15	天満古墳群	天満	古墳群	古墳	河岸段丘	
15の-1	天満１号墳 （泣沢女の古墳）	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、須恵器、耳環、刀子、ガラス玉、銙帯、人骨、県史跡
15の-2	天満２号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
15の-3	天満３号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
16	天満Ⅰ遺跡	天満	集落跡	縄文～室町	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、土坑墓、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、和鏡(花文散双鳥鏡)、椀状鉄製品、刀子
17	天満Ⅱ遺跡	天満	散布地	古墳、鎌倉	河岸段丘	土師器、瓦器
18	宗祇法師屋敷跡	下津野	旧宅		河岸段丘	碑、古井戸、県史跡
19	藤並城跡	下津野	城跡	鎌倉～室町	河岸段丘	濠、土塁
20	石ケ谷遺跡	西丹生図	集落跡	古墳～室町	丘陵裾	掘立柱建物、井戸、土坑墓、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦
21	羽釜古窯跡	土生	窯跡	中世	河岸段丘	瓦器
22	城山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡３基、須恵器、瓦
23	地蔵山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡２基、須恵器、瓦(奈良～平安時代)
24	風呂の谷窯跡群	土生	窯跡	奈良～平安	丘陵裾	窯跡４基、須恵器、瓦(奈良時代)
25	土生池遺跡	土生	散布地	旧石器、平安	山麓	ナイフ形石器、削器、掻器、石核、土師器、黒色土器
26	長楽寺跡	植野	寺院跡	平安～鎌倉	山麓	礎石建物、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨
27	八幡神社板碑	奥	碑	室町	丘陵裾	
28	八幡神社宝篋印塔	奥	石塔	室町	丘陵裾	
29	地蔵山遺跡	土生	散布地	平安	河岸段丘	
30	奥の宝塔及び宝篋印塔	奥	石塔	南北朝	河岸段丘	宝塔(文中三年銘)、宝篋印塔(文中二年銘)、県史跡
31	奥Ⅰ遺跡	奥	散布地	平安	丘陵裾	瓦器
32	**藤並地区遺跡**	**土生 明王寺 水尻**	**散布地**	**旧石器～鎌倉**	**河岸段丘**	**掘立柱建物、土坑墓群、ナイフ形石器、有舌尖頭器、土師器、須恵器、陶棺、布目瓦、円面硯、瓦器、国産陶器、山茶椀、輸入陶磁器、板碑**
33	岩室城跡	田口	城跡	中世	山頂	湯浅氏・畠山氏の城、天正13年落城、二の丸・三の丸の平坦部が残存
35	奥Ⅱ遺跡	奥	出土地	縄文	丘陵	有舌尖頭器
36	土生池南岸遺跡	土生	出土地	古墳	丘陵	須恵器甕
37	土生池須恵器窯跡	土生	窯跡	奈良	丘陵	須恵器(坏、坏蓋、高坏、壺、甕、水煙形製品)
38	野田地区遺跡	野田	寺院跡ほか	旧石器～中世	河岸段丘、氾濫原	竪穴建物、掘立柱建物、宝篋印塔、大溝、石核、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、建築材、梯子、木器、柿経、下駄など
39	湯浅城跡	熊井	城跡	中世	丘陵端	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
40	小島遺跡	小島	散布地	弥生、室町	丘陵	弥生土器、石塔
42	崎山屋敷跡	井口	館跡	鎌倉	丘陵	
43	勝真山館跡	賢・船坂	館跡	中世	山頂	
有田市						
17	岩室城跡	宮原町須谷	城跡	中世	山頂	有田川町33に同じ
18	岩室遺跡	宮原町須谷	散布地	弥生	丘陵	弥生土器
22	糸我地蔵堂遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
39	雲雀山遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	山腹	弥生土器
46	城跡	地蔵堂	城跡	中世	丘陵	
湯浅町						
5	湯浅城跡	青木	城跡	中世	丘陵	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
6	青木Ⅰ遺跡	青木	散布地	室町	河岸段丘	瓦器
7	青木Ⅱ遺跡	青木	散布地	弥生	河岸段丘	弥生土器、土師器
8	青木Ⅲ遺跡	青木	散布地	古墳	河岸段丘	須恵器(長頸壺)
10	山田北山遺跡	山田	散布地	室町	丘陵裾	鉄槍、瓦器、明銭
11	山田廃寺	山田	寺院跡	平安	丘陵裾	蓮華文軒丸瓦
12	山田堂山遺跡	山田	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
15	青木火葬墓	青木	墳墓	奈良	山腹	蔵骨器、和同開珎、帯金具、木炭
17	広保山城跡	吉川	城跡	平安	山頂	曲輪、空濠、湯浅宗重築城
21	帝の跡	山田	館跡	中世	河岸段丘	

遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』
2007年３月31日発行を一部改変・補筆

カイト製のナイフ形石器を出土した鷹巣池遺跡（旧吉備町徳田）、また、これまでの発掘調査で土生池遺跡（25）・藤並地区遺跡からはナイフ形石器（写真1）や掻器･削器などが多数発見されている。その他、藤並地区遺跡からは、有舌尖頭器・石鏃・矢柄研磨器や縄文時代草創期の土器片が出土している。

縄文時代は、陸地側に近い島嶼や河成段丘上に分布し、前期末から晩期までの時期の縄文土器が確認される。主要な遺跡としては、中期初頭の標識遺跡である鷹島遺跡（有田郡広川町）や地ノ島遺跡（有田市初島町）などがあげられ、付近には中期の土器片と石棒が発見された野田地区遺跡、後期中葉の北白川上層式併行の土器や耳栓などが発見された糸野遺跡（旧金屋町糸野）などが所在する。

弥生時代には、平野部に環濠集落である田殿尾中遺跡（10）（写真2）が存在する。数次にわたる調査により、弥生時代中期には拠点的な集落であったことが明らかになっている。集落は中期中葉に形成され始め、後期前半の空白ののち後期後半から古墳時代初頭まで展開する。田殿尾中遺跡に空白が認められる後期前半には、当遺跡から有田川河口にかけての丘陵上に遺物が散布しており、野井奥の谷遺跡（有田市千田）・星尾山遺跡（有田市星尾）などの高地性集落が展開していたと考えられる。天満Ⅰ遺跡において、少量ながらも弥生時代前期・中期の土器の出土も見逃せないところである。また、2005（平成17）年度以後、複数次の調査において旧吉備中学校校庭遺跡（11）（写真3・4）では、方形周溝墓を伴う弥生時代中期後葉から後期末に継続する集落が調査されている。

古墳時代は、田殿尾中遺跡で前期の方形竪穴建物が6棟、野田地区遺跡で溝2条が検出され、集落の様相が徐々に解明されつつある。また、野田地区遺跡の南西に隣接する段丘上では、天満Ⅰ・Ⅱ遺跡（16・17）や藤並遺跡（14）おいて古墳時代の遺物の散布が確認されていたが、天満Ⅰ遺跡において2000（平成12）年度の調査で弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物1棟が、2003（平成15）年

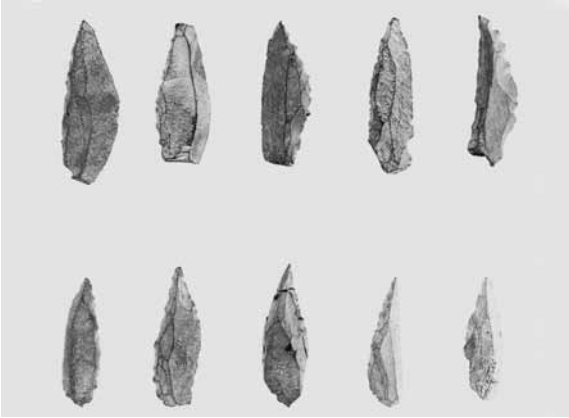


写真1　土生池遺跡出土のナイフ形石器

写真2　田殿尾中遺跡出土の弥生土器

写真3　旧吉備中学校校庭遺跡第1次調査　全景（北から）

写真4　旧吉備中学校校庭遺跡第4次調査
竪穴建物20・22（南西から）

度の調査で古墳時代中期の竪穴建物１棟が検出され段丘上の集落が確認されている。古墳は、有田川流域の丘陵上および海岸部に築造され、中期古墳を一部含むものの後期古墳が主体である。付近では、藤並神社境内に天満古墳群（15）が形成されている。天満１号墳（泣沢女の古墳）（写真５）は、直径 22 ～ 24 mの円墳で、内部主体は玄室前道がつく巨石使用の両袖式横穴式石室である。石室内からは銅芯金板張耳環や土器類のほか歯が出土した。これらの遺物から７世紀中葉に築造され、被葬者に 12 歳の女性が含まれる公算が大きいと考えられている。天満１号墳は、古墳時代では県内でも珍しい巨石積みの石室をもつ古墳で、発掘調査され復元整備されている。

写真５　天満１号墳（泣沢女の古墳）石室（南から）

写真６　天満Ⅰ遺跡中世墓出土和鏡

また、古代の須恵器を焼成した窯跡も多く土生池須恵器窯跡（37）などが明らかにされており、歴史時代においては川原寺式軒丸瓦・重弧文軒平瓦が採集された田殿廃寺しか知られておらず、官衙遺跡や寺院跡などの様相はよく分かっていない。しかし旧吉備町大字土生・水尻では窯業に適した良質な粘土が採掘され、城山窯跡群（22）・地蔵山窯跡群（23）・風呂の谷窯跡群（24）などでは奈良時代から平安時代までの古代紀伊国でも最大級の須恵器･瓦窯跡群が展開する。中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満Ⅰ遺跡で和鏡（写真６）や刀子を副葬した土葬墓が見つかっている。

このように、藤並地区遺跡の周辺部は、原始・古代より有田地方の中心的な地域であったと言える。

第3節　調査の経緯と経過（既往の調査）（図3～5）

藤並地区遺跡は、1980（昭和 55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる有田インターチェンジから国道 42 号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われた。その結果を受けて、本格的な調査が必要と判断された野田地区遺跡および藤並地区遺跡の範囲において、1980（昭和 55）年度から 1981（昭和 56）年度にかけて調査が実施された。

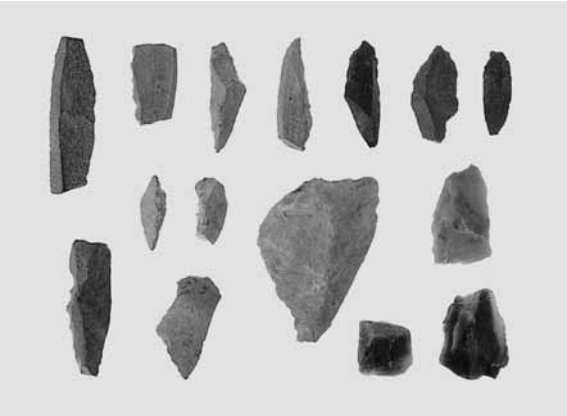


写真７　藤並地区遺跡 1991 年度 M 地区出土旧石器

次いで、近畿中枢部から紀南への円滑な物資の輸送・観光資源の活性化などに伴う交通網の整備を意図した一般国道 42 号湯浅御坊道路（写真９）の建設工事に先立ち、1989（平成元）年度から 1993（平

成5）年度までの5箇年わたり試掘調査を含めた発掘調査が実施されている（写真7・8）。

今回の調査の対象となった「県道吉備金屋線」は、有田郡有田川町を横断する国道42号と国道424号を連絡し、阪和自動車道（高速自動車道近畿自動車道松原那智勝浦線）の有田インターチェンジへのアクセス道路ともなっている。現状では、「県道吉備金屋線」は交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となるバイパス路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために2車線道路として整備することになった。

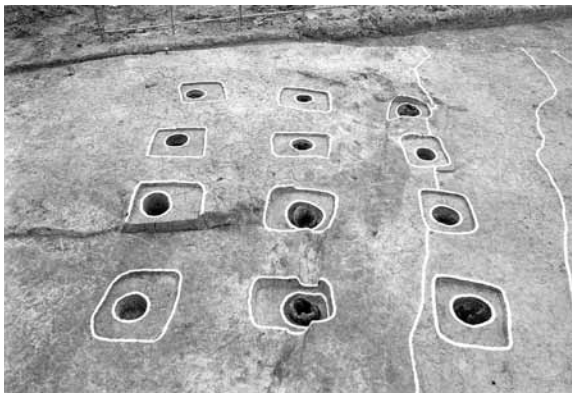


写真8　藤並地区遺跡1991年度J地区
検出掘立柱建物

このような中、当地には藤並地区遺跡が所在するため、その取扱いについて和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課とする）と和歌山県有田振興局建設部（以下、県建設部とする）との協議がなされた。その結果、一般国道42号湯浅御坊道路の隣接地においては、既往の調査成果を鑑みて本調査を実施する運びとなった。また、少し離れた範囲においては随時、県文化遺産課が確認調査を行い、その結果を受けて遺跡の取扱いについて協議がなされた。なお、2007（平成19）年度、及び2008（平成20）年度の調査に先立って行われた県文化遺産課と県建設部との協議では、既往の調査成果から随時「本発掘調査を要しない範囲」の設定が成された。

これらの経過の中で、2006（平成18）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北端（2006－Ⅰ区・Ⅱ区）（写真9）ないしは北半部（2006－Ⅲ区）に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計1,807㎡について実施した。何れも、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東側に位置する。調査では、鎌倉～室町時代の粘土採掘土坑・谷状落ち・石列状遺構・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による噴砂を確認した。

写真9　2006－Ⅰ区　調査遺構全景と湯浅御坊道路
（北北東上空から）

出土遺物の大半は、鎌倉時代の土器類で占められるが、旧石器時代の石器剥片、縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器・瓦、室町時代の土器類なども少量ある。鎌倉・室町時代の遺物には、砥石・鉄滓各数点、鉄砲弾1点がある。

2007（平成19）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（2007－Ⅰ区・Ⅱ区）ないしは北東部（2007－Ⅲ区）（写真10）に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計608㎡について実施した。調査では、平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土坑・

写真10　2007－Ⅲ区　1溝掘削状況（南東から）

井戸・溝・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、2006（平成 18）年度と同様に地震による液状化の噴砂を確認した。

出土遺物の大半は、平安時代末～鎌倉時代の土器類で占められる。その他、2007（平成 19）年度の調査時に旧石器時代と考えた土坑に伴って硬質頁岩製の剥片石器・石器剥片が、平安時代末～鎌倉時代の遺物に混じって奈良時代の須恵器・瓦、砥石などがある。

2008（平成 20）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区）ないしは北東端（Ⅲ・Ⅶ区）に該当し、一般国道 42 号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東西両側に位置する。このことから 2007（平成 19）年度と同様に旧石器時代、並びに奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の一端や北東端での遺跡の在り方がが解明されるところであった。当該年度の調査は、７地区合計 2,237 ㎡について実施した。

写真 11　有田川町 2007 年度調査出土香炉蓋

なお、2008（平成 20）年度の調査に先立って、2007（平成 19）年度に有田川町教育委員会により 2006－Ⅲ区の南側において調査が実施されている（町１区・町２区）。

調査は、阪和自動車道の４車線化事業に伴う町道拡幅工事に先立ち実施されたものである。調査では、弥生時代前期の可能性が考えられる自然流路、奈良時代から平安時代の溝１条、中世の水田区画などが検出された。奈良時代から平安時代の溝からは、須恵器の坏・甕・香炉蓋（写真 11）、丸瓦・平瓦、陶棺などが出土している。この内、須恵器の香炉蓋は、鈕の形状が塔の相輪形を呈している点が特徴である。

図３　既往の調査地点位置図（1：8,000）

第Ⅱ章　発掘調査・出土遺物整理の方法

第1節　調査現場の記録作業

藤並地区遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1　写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（6×7判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小判カメラ（35㎜判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小型デジタルカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、速攻性に優れた小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。これは、従来の小判カメラ35㎜判でのカラーネガフィルムの代替で、メモ記録としては非常に有効な手段である。

2　実測図作成作業（写真12）

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（縮尺＝1／100）・全体の遺構平面実測図（縮尺＝1／20 or 1／50）・個別遺構や遺物の出土状況図（縮尺＝1／10 or 1／20）・個別遺構の断面土層図（縮尺＝1／20）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺＝1／20）などを記録として作成した。

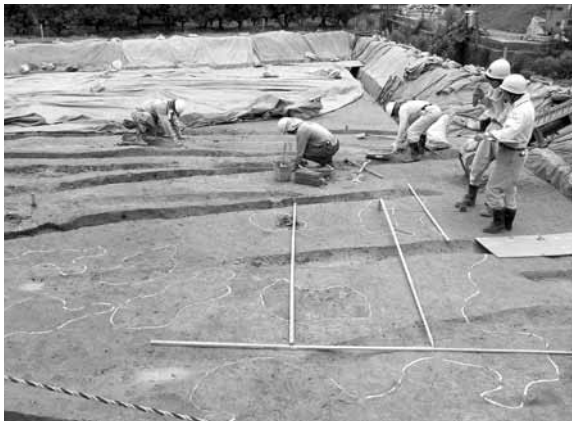


写真12　2008－Ⅱ区東側　遺構位置全体図作成
（北寄り西から）

3　航空写真撮影・基準点測量（図5、写真13）

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げ等のため、2006（平成18）年度に設置した3級基準点（藤並－1・藤並－2・藤並－3・藤並－4）から国土座標第Ⅵ系（世界測地系）により各年度各地区内に4級基準点の設置を実施した。併せて、4級基準点には水準測量も行っている。

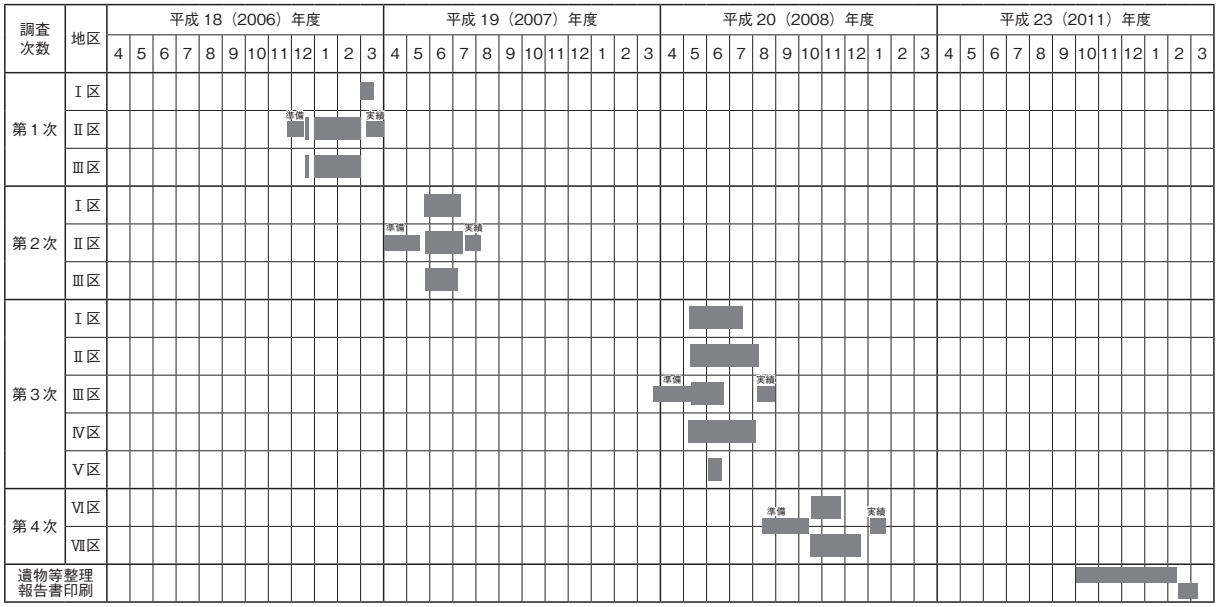
発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリで調査地全体の航空写真撮影を行った。

航空写真撮影及び基準点の設置は、2006－Ⅰ～Ⅲ区を「藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」と「藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で株式会社　共和に、2007－Ⅰ～Ⅲ区を「平成19年度　藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」で株式会社　共和に、「平成19年度　藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で和歌山航測株式会社に、2008－Ⅰ～Ⅳ区を「平成20年　藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影・基準点測量」で株式会社サンヨーナイスコーポレーションに、2008－Ⅵ・Ⅶ区を「平成20年　藤並地区遺跡発掘調査（その2）に伴う航空写真撮影・基準点測量」でワコウコンサルタント株式会社に業務委託して実施した。

写真13　2008－Ⅲ区　航空写真撮影

今次の調査では、確認調査の結果、遺構密度が低いと判断されたため航空写真測量は実施していない。

表２　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表



第2節　調査地の位置と地区割（図4・5）

調査の地区割は、和歌山県内全域を同一条件で統一したものがないため、和歌山県文化財センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006 年 4 月）に準拠して、今回の一連の調査に供するものを 2006（平成 18）年度に作成した。但し、同一地域において複数パターンの地区割を作成すると将来的に煩雑になると判断されたため、藤並地区遺跡の北側で 2006（平成 18）年度の上半期に調査を実施した野田地区遺跡の区画割を延長させて使用している。

調査地の地区割は、既往の調査および今後の調査に共通して使用できるように旧吉備町発行の縮尺 1／2, 500 の「吉備町都市計画図」№. 10・№. 14（旧日本測地系により、昭和 54 年測量・平成 6 年修正：アジア航測株式会社調整）を基本として、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に変換した図面を作成して行った。調査地の地区割は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、野田地区遺跡を網羅する範囲の北東に基点（X＝－214. 0 ㎞、Y ＝－73. 3㎞）を設けた。この基点からＸ軸西方向とＹ軸南方向にそれぞれ 100 mの大区画（100 m方眼）を設定した。これらの呼称は、基点からＸ軸西方向にＡ～Ｙ（アルファベット大文字）、基点からＹ軸南方向に１～ 25（算用数字）とした（図２　区画呼称例　E13）。次いで、100 m方眼の大区画を 625 等分し、４m方眼の区画割（小区画）を行なっている。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅を基点として、Ｘ軸西方向にａ～ｙ（アルファベット小文字）、Ｙ軸南方向を１～ 25（算用数字）とした（図５　小区画呼称例　h21）。

実測基準点および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。全て、野田地区遺跡及び各年度の藤並地区遺跡調査の地区割に続くものである。

なお、標高は、東京湾標準潮位 T. P. ＋を使用した。

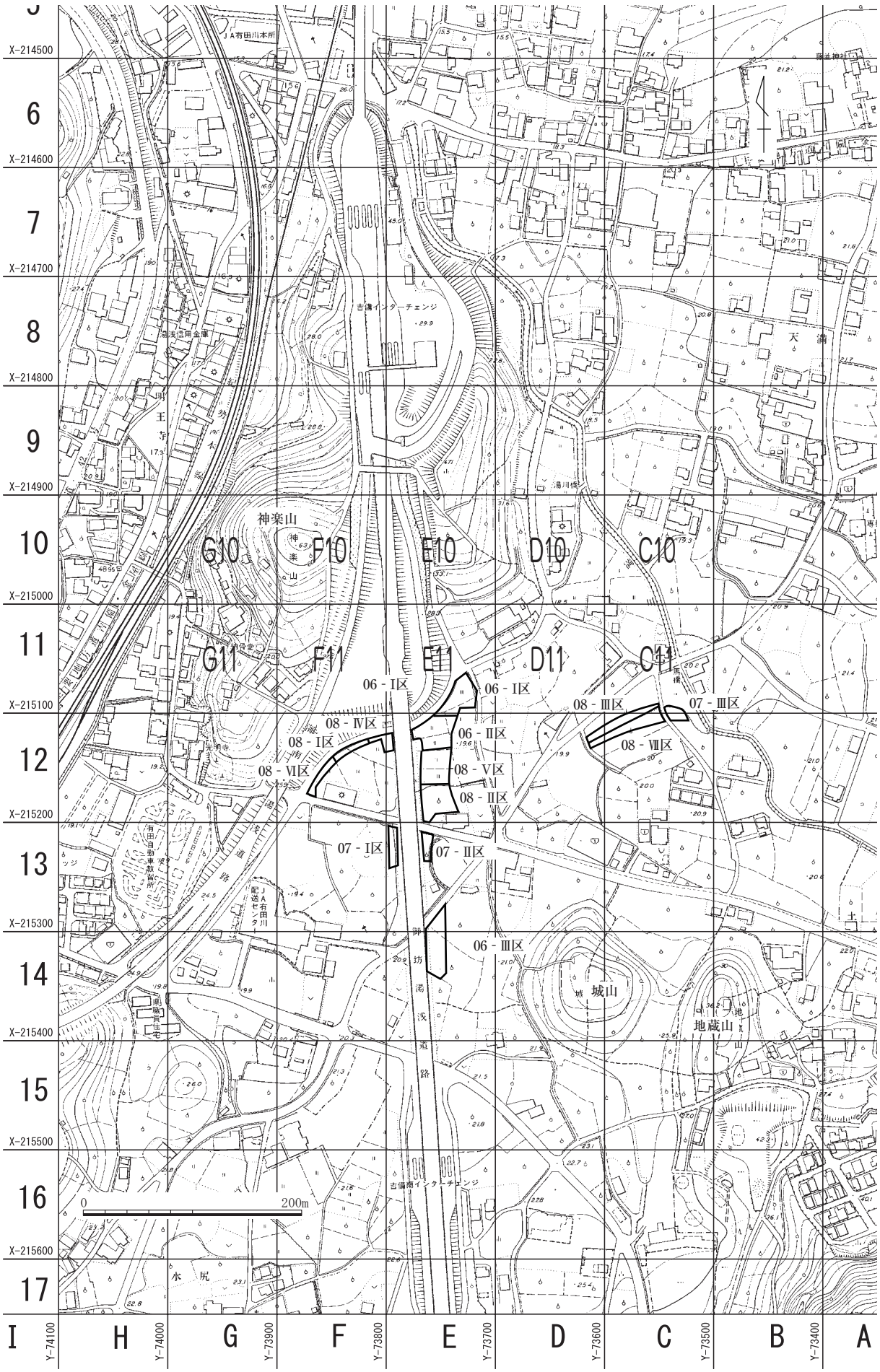


図４　調査範囲と地区割（100 m区画）（1：5,000）

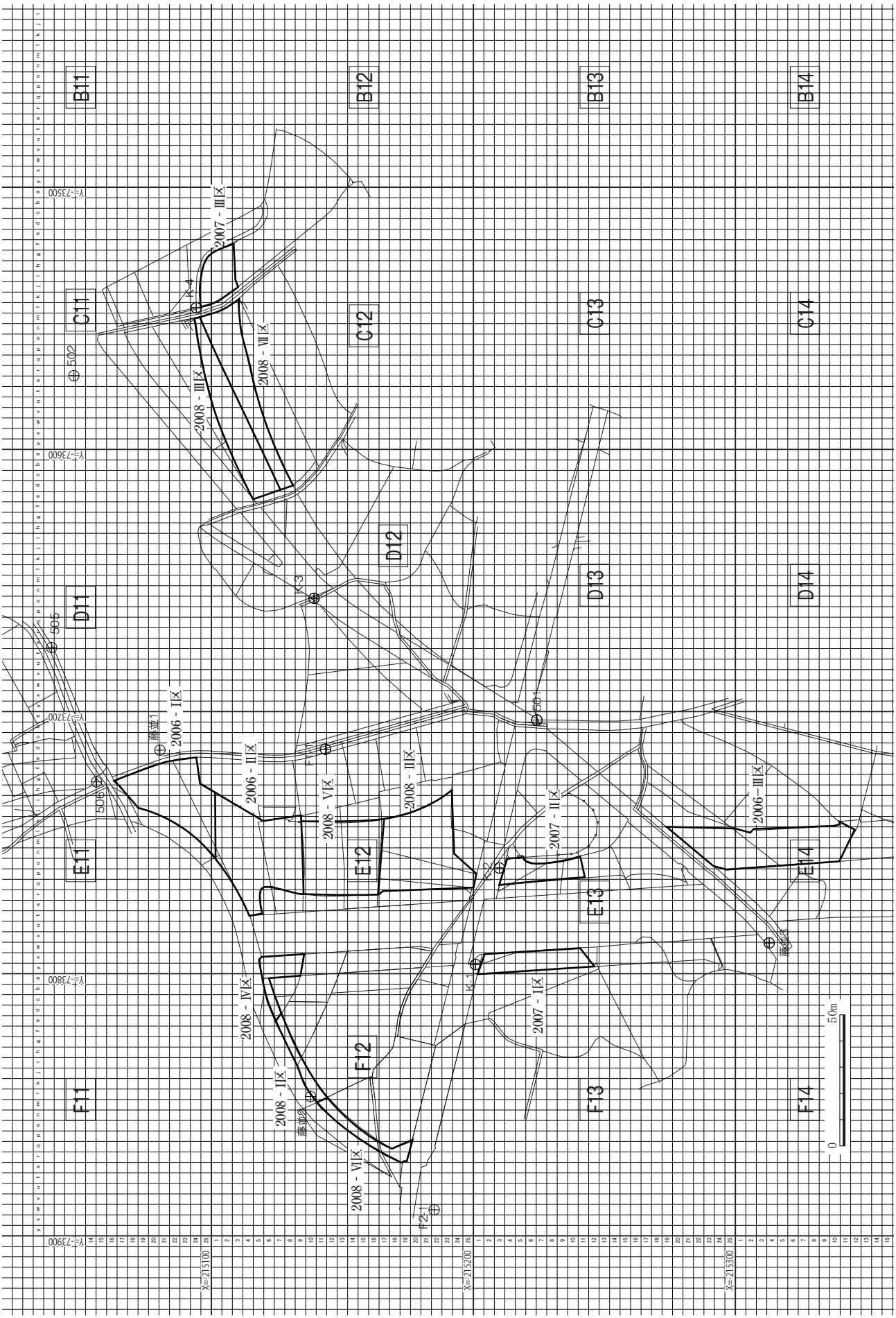


図５　調査位置と区画割（４ｍ区画）（1：2,000）

第3節　出土遺物等資料の整理

1　出土遺物応急整理等

応急整理作業（写真６）

出土遺物については、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、調査現場の監督員詰所において出土遺物について応急整理作業を実施した。洗浄作業についてはほぼ全て、注記作業は一部を行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までの収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

写真 14　出土遺物台帳登録（応急整理）

旧石器時代の石器・石器剥片の抽出

2008－Ⅲ区の補足調査（写真図版 26－3）では、下部の粗砂細礫層に関して 2007－Ⅲ区検出の６土坑と下部の堆積層との関連を探る必要があったため、粗砂細礫層の一部を採取し（土嚢袋約 80 袋分）、洗い出し（写真 15）・抽出作業を行った。その結果、時代が確定できないながらサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製石器剥片 12 点を確認した。

写真 15　2008 －Ⅲ区下位面　粗砂細礫洗浄作業
（応急整理）

上記の 2008－Ⅲ区の補足調査で粗砂細礫層からのサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製の石器剥片の存在が確実となったため、更に、南隣調査地の 2008－Ⅶ区の調査において粗砂細礫層からの石器・石器剥片の洗い出し・抽出作業（写真 16）を行った。その結果、旧石器時代のナイフ形石器４点・石器剥片など 49 点を確認した。調査時点では、ナイフ形石器以外の石器は認識できていなかった。

写真 16　Ⅶ区下位面　粗砂細礫からの旧石器遺物の抽出
（応急整理）

2　出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ（28 ℓ）にして 53 箱と旧石器時代の遺物抽出の必要な粗砂細礫層である。出土遺物の整理は、『財団法人和歌山県文化財センター　発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠して、全遺物を対象に台帳登録・遺物洗浄・遺物の調査コードと出土遺物登録番号の注記（写真

写真 17　遺物（土器）への登録コード注記

写真 18　遺物の接合

写真 19　遺物充填材による補強・復元

写真 20　出土遺物の実測図作成

写真 21　遺物実測図トレース作成

写真 22　実測遺物台帳登録データ入力

17）・遺物破片点数の集計（表３：総数 6, 589 点）・接合作業（写真 18）を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強（写真 19）・復元・遺物実測（写真 20）・実測遺物台帳登録（写真 22）・遺物実測図トレース作成（写真 21）・トレースレイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、集計登録データ等入力を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図・図面トレース（レイアウト）を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納・登録番号の記載作業を行った。

第Ⅲ章　各年度の調査成果と出土遺物

第1節　第1次調査（2006年度）

1　調査の概要

調査地は、大きく北側と南側の2箇所に別れ、地目の違いにより工法が異なるため北側から順に2006－Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称して調査を行なった。また、掘削排土の仮置場が十分確保できないため、北側調査地では2006－Ⅰ区と2006－Ⅱ区とに分割し、2006－Ⅲ区では北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これらに伴い4級基準点測量・航空写真撮影も各々、分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土層を主体として、2006－Ⅰ区では大別して４面、2006－Ⅱ区では２面、2006－Ⅲ区では１面のみが確認できた。遺構の主だったものとして、2006－Ⅰ区では鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まりなどを、2006－Ⅱ区では土坑・畦畔状の高まりなどを、2006－Ⅲ区では土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。なお、何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

調査地の現地形は、盛土による宅地化や果樹園などによりかなり改変されているが、鎌倉時代から室町時代の旧地形は大きく南西から北東方向に緩やかに傾斜する。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められることからこれらの耕作土の下部が往時の旧地形を表出するものと思われる。各々、2006－Ⅰ区での最下層の遺構面は、北端で標高T.P.=17.6ｍ～南端で17.5ｍ、2006－Ⅱ区での最下層の遺構面は、南端でT.P.=18.2ｍ～北端でT.P.=17.7ｍ、2006－Ⅲ区での遺構面は、南半部分と北半部分の間に段を挟んで南端でT.P.=19.5ｍ～北端でT.P.=19.1ｍを測る。都合、2006年度調査地の南北両端では、約2.0ｍの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、遺物包含層（旧水田耕作土）や落ち込み地形（１落ち）・谷状落ちから出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、旧石器時代の頁岩製の縦長剥片、縄文時代の石鏃・砂岩製窪み石、弥生時代後期の土器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、時期不詳の敲き石・サヌカイト剥片が十数点出土している。

鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿・鉢）、瓦質土器（三足釜・火舎）、陶器（備前擂鉢・甕、常滑甕）、磁器（中国製白磁碗・青磁碗）、土錘がある。これらの遺物に混じって、砂岩製砥石数点・鉄滓数点、鉄片１点、鉄砲弾（鉛玉）１点が出土した。

遺物の全体量は、通常の遺物コンテナ（28㍑入り）にして、19箱分である。

2　2006－Ⅰ区　調査面積590㎡（図６・７・９～12、写真23～26、写真図版１～４・６）

2006－Ⅰ区は、1992（平成4）年度調査のA地区の南東側に位置する（図３）。

基本層序（図７、写真23、写真図版６）

2006－Ⅰ区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、大別して鎌倉・室町前期・

室町後期・江戸時代の４面が認められる。詳細には（図７）、基盤層直上から第６層上面が鎌倉時代前期・後期、第５ｂ層上面が室町時代前期・中期、第５層上面が室町時代後期、第２ｆ層上面が江戸時代前期、第２層内に江戸時代の水田面が最低４面認められるものと考えられる。

2006－Ⅰ区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まり、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を検出した。

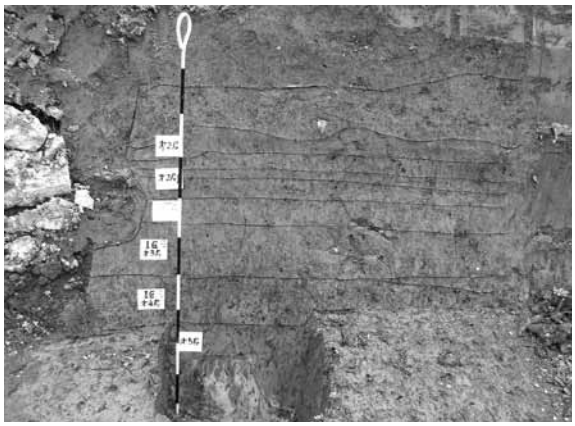


写真 23　2006－Ⅰ区 E11－f22　調査区東壁断面土層（西から）

51 谷状落ち（図６・９・46、写真図版１・２・32）

2006－Ⅰ区での最下層の遺構面（基盤層Ⅲ10BG5/1 青灰色粘質シルト乃至は、基盤層Ⅲ´5Y6/1 灰色粘質シルト）は、51 谷状落ちの南北両肩の高さを示し、北東端で標高 17.6 m～南東端で 17.5 mの数値を示す。部分的ではあるが、51 谷状落ちの両肩に近い部分を検出したことになり、南北幅約 20 m以上、深さ平均 0.75 mとなる。51 谷状落ちは、平面的に検出した範囲において北西－南東方向（図６のＡ－Ａ’）にサブトレンチと断面土層観察用の畦を残し、堆積状況の観察に努めた。

下部では比較的、流速の速い状況の中で第８層・第９層の細砂・粗砂を含む粘泥が堆積したものと思われる。上部では、流速の遅い澱みの状態の中で第７ａ層～第７ｃ層の埋積が認められる。観察した限りでは、有機質の混入の少ない泥溜りの状況を呈している。

51 谷状落ちは、第 7a 層を主体に掘削した結果、奈良時代の遺物も混在するが、133 点が出土した。遺物は、瓦器椀（13）・小椀（12）・小皿（10・11）、土師器皿（9）・土釜、瓦質火舎（14）など鎌倉時代のもので占められる。限られた掘削範囲であるが、遺物の内容は、第 7a 層以下の下位の層においても瓦器を含む傾向が認められる。瓦質火舎（14）は、51 谷状落ちの上位層第７ｂ層で取上げたが、52 石列状遺構に近接することから 52 石列状遺構に関係する遺物と考えられる。

53 粘土採掘土坑（図 12、写真 24、写真図版４）

53 土坑は、短軸 0.96 m・長軸 1.34 m・深さ 0.63 mを測り、南北に長い楕円形状を呈する。

53 土坑は、埋土の下部に基盤層Ⅲ（10BG5/1 青灰色粘質シルト）に 51 谷状落ち堆積層の第７層系の 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（N3/0 暗灰色ぎみ）～ 2.5Y2/1 黒色粘泥シルトの塊が多量に混在する。また、上部は、2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（N3/0 暗灰色ぎみ）に 2.5Y2/1 黒色粘泥シルトと基盤層Ⅲの小さい塊が少量混在する。明らかに人為的に埋めたものと判断でき、粘土採掘に伴う掘り穴と判断した。

写真 24　2006－Ⅰ区E11－f23　53 粘土採掘土坑掘削状況（北西から）

53 土坑の埋土からは、他の遺構に比較して多くの遺物（24 点）が出土した。奈良時代の須恵器２点・瓦（凹面布目痕、凸面格子叩き、焼成遺存良好堅緻）15 点、鎌倉時代の瓦器椀７点があり、鎌倉時代

の遺物が最も新しい内容となる。遺物は、細片が主体で図示できるものはない。

その他、53 土坑に隣接して、54・55・56 土坑の 3 基を確認している。各々、検出面での埋土は、第 5 層系の埋土を撹拌した状態にある。遺物は、54 土坑の最上層から奈良時代の瓦 2 点、鎌倉時代の瓦器椀 5 点（7）が出土した。

52 石列状遺構（図 10・11、写真 25、写真図版 3・32）

52 石列状遺構は、51 谷状落ちに堆積した第 7c 層の上部に一定の幅員約 2 mに粗砂礫混じりの土砂（図 11 のA～F´）を盛上げ、その上に大小の割石を乱雑に据え置いた状態にある。検出時には、粗砂礫混じりの土砂の範囲は、土質の違いから乾燥度合が著しく、明らかに 51 谷状落ちの埋積土とは異なる様相を呈していた。その状態から、52 石列状遺構は 51 谷状落ちの埋没後に構築された土橋の可能性が高いと考えられる。

52 石列状遺構に伴う客土と考えた埋土（図 11のA～F´）には、狭い範囲において今回の調査の中では、最も遺物の密度の高い状況となる。遺物は、瓦器椀・小皿・二次焼成の認められる三足釜（206・207）、須恵器捏鉢など、細片化した状態で多量（171 点）に出土した。52 石列状遺構に関係する遺物（53 点）として、土師器皿（4）、瓦器椀・小皿（5）、常滑甕などがある。

写真 25　2006－I 区　52 石列状遺構掘削状況
（北北西から）

土壌サンプルの採取（写真 26）

調査の一環として、土壌中に含まれる花粉や珪藻などの微化石分析をすることによって当時の環境を復元する資料を得る事が可能である。そのための試料として、旧水田耕作土や谷状落ちの堆積土の一部を採取している。前者の旧水田耕作土は、堆積層（遺物包含層）であるが、土壌の珪酸体分析、花粉・珪藻分析を通じて当地域の水田開発時の水田の状況と周辺の環境を推し量る事が可能となる。また、後者の谷状落ちの埋積土の土壌分析を通じて当時の植生や気候などの周辺環境を復元するための資料を得るには、花粉・珪藻分析を同時に行うことが最も望ましいと思われる。土壌分析用サンプルは、2 箇所で合計 12 点の試料を採取している。

写真 26　2006－I 区　E11－h・i22　51 谷状落ち土壌採取状況（北東から）

3　2006 －Ⅱ区　調査面積 729 ㎡（図６～８、写真 27・28、写真図版５・６）

2006－Ⅱ区は、1990（平成 2）年度調査の B 地区の東側に位置する（図３）。

2006－Ⅱ区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土を主体として、大別して 2006－Ⅰ区と同様の４面が認められるものと考えられる。詳細には（図７・８）、ほぼⅠ区と同様であるが、

第２層は後世の削平のために調査区の南端で現存するのは、現在の耕作土に伴う床土のみである。

2006－Ⅱ区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・畦畔状の高まり、2006－Ⅰ区に向かって下降する地形の落ち、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

第３層系包含層からは、サヌカイト製の石鏃（110）、奈良・鎌倉時代の遺物（図 46 ～ 48）が多数出土した。

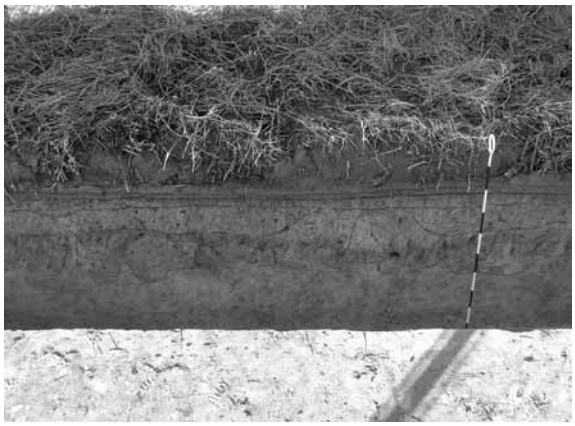


写真 27　2006－Ⅱ区 E12－n9　調査区南壁断面土層（北から）

土坑群（図６・48、写真 28、写真図版５・６）

調査地内の基盤層直上（第３層系包含層・１落ちの埋積土除去面）において 28 基の土坑を検出した。土坑からの出土遺物は、極めて少量である。遺物は、2 土坑からサヌカイト剥片１点が（63）、5 土坑から瓦器２点が、12 土坑から瓦器８点（64）・土師器皿１点・土師器小皿１点が、13 土坑から瓦器５点が、30 土坑から瓦器３点が出土したに過ぎない。大半の土坑は、人為的に埋められた埋土は認められず、澱みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認められない。遺物は、上位からの踏み込み遺構によってこれらの土坑の埋土に混じり込んだものと考えられる。このことから、土坑は人為的な所産による可能性が低いものと考えられる。

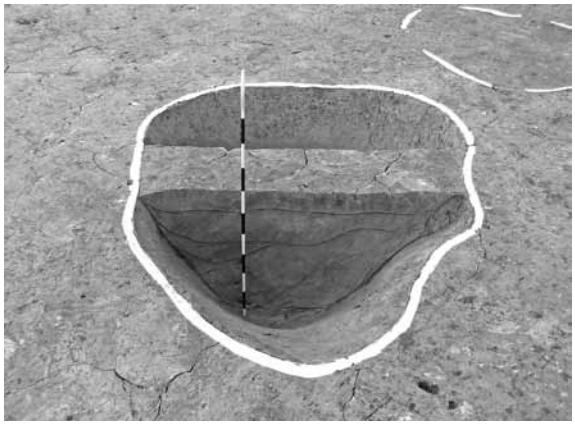


写真 28　2006－Ⅱ区 E12－ℓ5
18 土坑南西－北東断面土層（南東から）

1落ち（図６・7、写真図版 5）

１落ちは、2006－Ⅱ区の北側で地形の不整形な落ちが 2006－Ⅰ区に向かって下降する。埋土は、2006－Ⅱ区全体に広がる第３層系包含層の下位に第４層系包含層・第５層系包含層・第６層系包含層が埋積する状態にある。１落ちの遺物（726 点）は、旧石器時代のサヌカイト製のナイフ形石器（98）・横長剥片（108）、チャート製の縦長剥片（107）・剥片など、比較的多くの後期旧石器時代の遺物が出土した。遺物の主体は、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器椀・小皿などである。

鉄砲弾（図 51、写真図版６・40）

鉄砲弾（112）は、2006－Ⅱ区の北西隅 E12－q5 の側溝位置で、奈良・鎌倉時代の遺物を主体とする第３層系包含層の最下部から出土した。出土層位は、水田に伴う上位からの踏み込み遺構と考えられるものであり、鉄砲弾の時期を明確にできていない。

鉄砲弾は、直径 11.5 ㎜、重量 8.88 ｇ（2.368 匁）を量る。鋳型の合せ目痕が明瞭に観察できる。合せ目痕は、上下方向に細筋状の２条の突線として遺存している。また、上下方向の突線に対して直行する方向にも突線状の細筋を認めることができる。全体では４区分されたように見受けられる。現時点での県内での出土事例は、岩出市根来寺遺跡や和歌山市太田城跡・中野遺跡（城跡）・史跡和歌山城などで 10 点内外に止まる。なお、鉄砲弾は、現地から取上げ後に風化が進行し、現時点では表面上

は灰濁色を呈している。

4　2006－Ⅲ区　調査面積 488 ㎡（図 13 ～ 15、写真 29 ～ 31、写真図版７・８）

2006－Ⅲ区は、1990（平成 2）・1991（平成 3）年度調査のD・E地区の東側に位置する（図３）。

2006－Ⅲ区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、１面のみ確認できた。

2006－Ⅲ区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。また、2006－Ⅲ区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

基本層序（図 14、写真 29）

調査時点で上位層は殆んど削り取られていたため、第１層（耕作土）・第２層（水田床土）は部分的にしか存在しない。上部は、約１mの客土によって整地がなされていた。調査区の壁際に沿って、堆積層序の確認と排水を兼ねた側溝を設けた。

写真 29　2006－Ⅲ区北半 E13－m23
調査区東壁断面土層（西から）

2006－Ⅲ区での遺構面は、途中で段差を生じ南端で標高 19. 5 m～北端で 19. 1 mを測る。第３層層系包含層は、北に向かって緩やかに下降する。遺物包含層（第３層：中世耕作土）には、縄文時代の窪み石（115）、奈良時代の須恵器（65、238・239）・瓦（241）、中世の土釜・瓦器（66 ～ 69）・須恵器捏鉢（70 ～ 72）などの破片が認められる。

〈北半地区〉（図 13・15、写真 30、写真図版７）

地形的に、北側へと緩やかに傾斜する。県文化遺産課の 2006 年度の試掘調査で、調査地の北側約 40 mの地点で自然流路が確認されている。小溝群の方向と自然流路の方向は概ね一致すると考えられる。

水田耕作に伴う小溝群（図 13、写真図版 7・8）

幅員 20㎝前後・深さ約５㎝の溝を 20 数条検出した。埋土の大半は、第３層系遺物包含層（水田耕作土）が埋積している。小溝群は、北西－南東方向にほぼ平行に認められ、重複関係から古い段階がN－55°－W、新しい段階がN－50°－Wの走向を示す。

写真 30　2006－Ⅲ区北半 E14－m1　11 土坑
断面土層（南東から）

土坑（図 15、写真 30、写真図版７）

土坑は、5 基検出した。８土坑からは、白鳳期の焼成遺存が硬質で凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦１点が出土している。15 土坑からは、縄文時代と考えられる砂岩製の石皿１点（116）が出土した。その他の土坑から、遺物は出土していない。11 土坑は、短軸 0. 4 m・長軸 0. 55 m、深さ 0. 15 mを測り、明確な平面形を検出できた土坑である。埋土は、基盤層Ⅳに類似し 10YR5/1 褐灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。11 土坑も、2006－Ⅱ区で検出した土坑と同様に、人為的に埋められた埋土は認められず、澱みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認め

られない。このことから、2006－Ⅲ区検出の土坑も人為的なものとは判断できない。

水田畦畔

調査区の北端で検出し、畦畔の一部を検出した。畦畔の末端が調査範囲外におよぶため、全体の形状・水田の区画面積については不明である。

〈南半地区〉（図 13、写真 31、写真図版８）

小溝群（図 13、写真 31、写真図版８）

幅 20㎝前後・深さ約５～ 10㎝の小溝を 20 数条検出した。小溝群の走向性は、北半調査区とは異なり、北東－南西方向に平行に認められ、重複する前後関係から、古い段階がN－60°－E、新しい段階がN－40°－Eの走向を示す。

遺物は、瓦器椀（73･74）･小皿（75 ～ 77）など、鎌倉時代を主体としたものが出土した。

写真 31　2006－Ⅲ区南半　小溝群（北東から）

南半地区の北端には、古い段階の小溝群と並行する段状地形が存在し、この段（高低差約 20㎝）が北半と南半の水田を画する境となる。

噴砂（写真図版８）

北北西－南南東方向にかけて地震による液状化現象によって生じた噴砂を検出した。噴砂は、最大で１mの幅をもつ。調査区内では延長 16 mにおよび、地上に細砂・粗砂が噴出している。噴砂は、13 世紀の小溝群によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡である。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、南半地区では確認できなかった。南半地区の調査中に湧水が著しく、殆ど全面にわたり壁面が大きく崩落したため断念せざるを得なかった。北半調査区では、第３層系包含層除去面から約 50㎝の深さで基盤層Ⅴ（5BG6/1 青灰色細砂・粗砂）が確認でき（図 14）、この層が砂の供給源となるものと考えられる。

5　小結

調査の成果と周辺の現状地形から、まず、2006－Ⅰ区で 51 谷状落ちの南北両肩に近い部分を検出したこと、北東端では調査区外の町道部分から北側の丘陵に向かって急に高くなっていること、また現状地形から考えて、調査地の北西側に位置する神楽山の南麓および東麓から天満Ⅰ遺跡（図２の 16）の西端を抜けて、野田地区遺跡の段丘崖に向けて開析谷の広がりが認められる。調査地では、51 谷状落ちの地形状況と出土遺物から鎌倉時代に埋積が進んだ状況を窺う事ができる。

2006 年度の調査では、既往の調査でも検出されている鎌倉時代を中心とした遺構・遺物の検出によって、遺物包含層化した水田耕作土によって中世期から江戸時代にかけての集落から外れた範囲の状況が判明してきた。集落や屋敷地に関係する遺構は、何れの時代においても 2006 年度の調査範囲内では存在しないことが明らかとなり、鎌倉時代以後の水田化の様相を考えるができた。

中世期の土地開発を示す具体的な事例は、日高郡みなべ町（旧南部町）に所在する徳蔵地区遺跡や当地域においても例に漏れず、今回の調査地から 500 m南西側の 1980 年（昭和 55 年度）調査地においても中世における水田開発を示す資料が確認されており、当地域の広範に渡って開発が進められたものと考えられる。

第2節　第2次調査（2007 年度）

1　調査の概要

調査地は、大きく３箇所に別れ、地点の違いにより西側から順に 2007－Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称して調査を行なった。３地区合計 608 ㎡について実施した。また、掘削排土の仮置場が十分確保できないため、2007－Ⅰ区のみ北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2007－Ⅰ区では航空写真撮影も分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区は、柑橘類の畑地造成に伴い現代の耕作土・床土を始め、遺物包含層の大半が削平されていた。そのため､各地区の遺構は､基盤層直上（無遺物層であるが､本来の地山と区別するため「基盤層」の用語を使用する）で確認できたのみである。遺構の主だったものとして、2007－Ⅰ区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群などを、2007－Ⅱ区では土坑・地震による液状化の噴砂などを、Ⅲ区では柱穴・井戸・土坑・溝などを検出した。また、2006 年度と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

調査地の現地形は、盛土による果樹園などによりかなり改変されている。しかし、調査の成果から鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006－Ⅲ区･2007－Ⅰ・Ⅱ区や 2007－Ⅲ区から 2006－Ⅰ・Ⅱ区の方向へ下降し、北西側の神楽山南東裾に沿う谷地形を形成していることが判明してきた。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して僅かに中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められる範囲が存在する。このことから、これらの耕作土の下部が往時の旧地形を大きく逸脱しないと思われる。各々、2007－Ⅰ区での最下層の遺構面は、北端で T. P. =18. 85 m～南端で 18. 55 m、2007－Ⅱ区での最下層の遺構面は、北端で T. P. =18. 98 m～南端で 18. 75 m、2007－Ⅲ区での遺構面は、東端で T. P. =18. 95 m～西端で 19. 00 mを測る。都合、今回の調査地の北東端と南西端では、約 0. 4 mの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、主に 2007－Ⅲ区の溝や井戸から出土した平安・鎌倉時代の土器類で占められる。その他、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器・瓦などがある。平安・鎌倉時代の遺物に混じって、砥石・サヌカイト製石器剥片が出土している。

平安・鎌倉時代の遺物には、土師器（皿・甕・土釜）、黒色土器（椀）、瓦器（椀・皿）、須恵器捏鉢、砂岩製砥石がある。

遺物総数は、通常の遺物コンテナ（28 ㍑入）にして、９箱分である。

写真 32　2007－Ⅰ区北半 E13－x・y1
調査区北壁断面土層（南から）

2　2007 －Ⅰ区　調査面積 224 ㎡（図 16 ～ 19、写真 32・33、写真図版９～ 11）

2007－Ⅰ区は、1991（平成２）年度調査のC地区の西側に位置する（図３）。

2007－Ⅰ区では鎌倉時代の土坑 15 基・水田耕作に伴う小溝２条などを検出した。その他、踏み込み遺構

の集中する範囲（図 16 の遺構 14 ～ 25）が認められた。第 3 層系耕作土（遺物包含層）は、極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物は、僅かであるが土坑・遺物包含層・撹乱層から鎌倉時代を主体とした瓦器 7 点・須恵器捏鉢 1 点、弥生土器 1 点、須恵器 1 点が出土した。

土坑群（図 18・19、図写真図版 9 ～ 11）

1土坑（写真図版 9 ・10）

1 土坑は、2007－Ⅰ区の中央に位置し、調査区西壁に延びる状態で検出した。東西 0. 8 m以上・南北 1. 5 m以上・深さ 0. 32 mで、歪な形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後に人為的埋土によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。また、1 土坑の東側で、長軸 0. 5 m・短軸 0. 3 m・深さ 0. 1 m前後の小土坑を 7 基（遺構 2 ～ 8）検出した。

13 土坑（図 19、写真図版 11）

13 土坑は、2007－Ⅰ区の南端に位置し、調査区東壁に延びる状態で検出した。東西 2 m以上・南北 2. 1 m・深さ 0. 25 mで、半楕円形状を呈する。土坑の基底部に基盤層 A の崩れと思われる自然堆積層（図 19 の 5 ・ 6）が埋積し、上部は基盤層Aを主体とした多量のブロック土を含む人為的な埋土（図 19 の 1 ・ 2）で埋め尽くされている。遺物は出土していない。

写真 33　2007－Ⅰ区南半 E13－y7
1 土坑調査区西壁　断面土層（東南東から）

23 土坑（図 18、写真図版 11）

23 土坑は、側溝掘削のために平面で検出することができなかったが、2007－Ⅰ区の調査区西壁中央で検出した。南北 1. 9 m・深さ 0. 25 mで、形状は不明である。土坑の基底部に人為的な埋土（図 18 の 3）が埋められた後に、部分的に自然堆積層（図 18 の 2）が入り込み、再び、多量のブロック土を含む人為的な埋土（図 18 の 1）で埋め尽くされている。遺物は出土していない。23 土坑の上部には第 3 層系耕作土層（図 18 の第 3 層系）が存在し、鎌倉時代の瓦器 1 片が出土した。

水田耕作に伴う小溝群（図 16）

幅員 30㎝前後・深さ約 5 ㎝の溝を 2 条検出した。埋土は、第 3 層系の堆積層が埋積している。小溝群は、北北西－南南東方向にほぼ平行に認められ、N－15°－Wの走向を示す。

3　2007 －Ⅱ区　調査面積　194 ㎡（図 20 ～ 24、写真図版 12・13）

2007－Ⅱ区は、1991（平成 2 ）年度調査の C 地区の東側に位置する（図 3）。

2007－Ⅱ区では鎌倉時代の土坑 12 基・不整形な落ち 1 基・地震による液状化に伴う噴砂の砂脈 2 条などを検出した。第 3 層系包含層は、2007－Ⅰ区同様に極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物（69 点）は、2007－Ⅰ区同様に僅かであるが、土坑・撹乱層から鎌倉時代を主体とした土師器 3 点・瓦器 64 点（内、54 点が 17 土坑から小片で出土）、須恵器 2 点が出土した。

土坑群（図 22・23、写真図版 12・13）

ここでは、主な土坑の記述のみに止める。

5土坑（図 22、写真 34、写真図版 13）

５土坑は、2007－Ⅱ区の北半部東側溝寄りに位置し、調査区東側に延びる状態で検出した。短軸1.３m以上・長軸2.１m・深さ0.31mで、やや歪な楕円形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後に人為的な踏み込みによって撹拌された状況（図22の３ｂ･3ｃ）を示し､後に再び自然堆積層（図22の２・３ａ）が埋積し、最終的には人為的な埋土（図22の１）によって埋め尽くされている。遺物は、鎌倉時代の瓦器椀３点が出土した。

写真34　2007－Ⅱ区E13－o6　５土坑検出状況
（北北東から）

11土坑（図23、写真図版12）

11土坑は、2007－Ⅱ区の中央に位置し、全体が把握できる状態で検出した。東西1.４m・南北2.２m・深さ0.24mで、やや歪な形状を呈する。11土坑は、段階的ではあるが、人為的な埋土（図23の１・２）によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。

18・19噴砂（図24、写真35、写真図版13）

2007－Ⅱ区の北半部で、地震による液状化現象によって生じた噴砂の砂脈（遺構18）を検出した。18噴砂は、最大で0.75mの幅をもち、北東－南西方向に走向する。調査区内では延長5.5m以上におよび、地表面に細砂・粗砂が噴出している。18噴砂は、第３層系埋土の中世の素掘り小溝によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡であることが判明した。

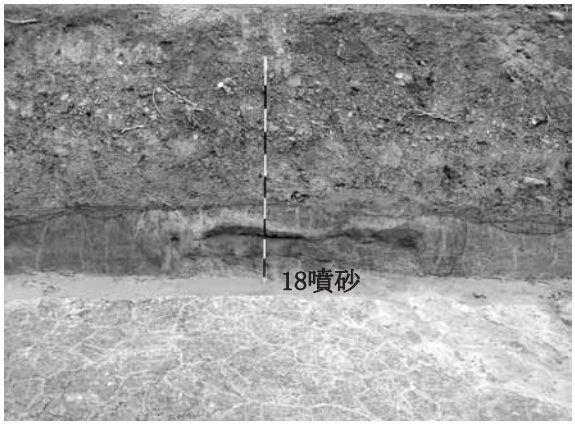


写真35　2007－Ⅱ区E13－p7
18噴砂調査区西壁断面土層（東から）

18噴砂の約２m南東側で19噴砂を検出した。19噴砂は、18噴砂と同一方向性を指向し、最大幅0.８m・延長1.５m以上を検出した。時期の判明する遺構との重複関係はないが、18噴砂と方向性が同じであること、18噴砂と19噴砂の間の基盤層Ⅲ（10YR4/1褐灰色粘質シルト）が両噴砂の影響によって砂質化している状況にあることから同時的に生じた噴砂である蓋然性が高いと判断している。

以上のことから、18・19噴砂は2006－Ⅲ区で検出した噴砂と同一時期の所産と考えられる。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、調査中に降雨・湧水が著しく、今回の調査区では確認できなかった。

４　2007－Ⅲ区　調査面積190㎡（図25～28・46、写真図版14～16・38・39）

2007－Ⅲ区は、2007－Ⅱ区から250m北東側に位置し、天満川に隣接している。従来の藤並地区遺跡の北東縁辺部に該当する。Ⅲ区では調査を反転方式にしても掘削排土の仮置場が十分に確保できないため、全ての掘削土を調査地外に搬出することとした。

2007－Ⅲ区では柱穴15基・井戸２基・土坑３基・溝１条などを検出した。遺物（785点）は、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器･瓦、平安･鎌倉時代の土師器（皿･甕･土釜）、黒色土器（椀･皿）、瓦器（椀・小皿）、須恵質捏鉢、砂岩製砥石等が出土した。遺物の殆どが１溝からの出土である。

基本層序（図 26、写真 36）

調査時点で上層は殆んど削り取られていたため、第１層（耕作土）は部分的にしか存在しない。上部は、約 0. 4 ～ 0. 5 ｍの客土によって果樹園の造成がなされていた。基盤層Ｉは、2007－Ｉ・Ⅱ区の基盤層Ａ（図 18・23）に類似している。

写真 36　2007－Ⅲ区　調査区南西壁断面土層
（南東から）

柱穴群（図 25、写真図版 15）

柱穴は、2007－Ⅲ区の北東側に集中して位置し、15 基検出した。総体的に北西から南東方向に並びを有するものと思われるが、建物としての柱並びを捉えることができなかった。柱穴の配置状況から調査地の北東側に広がるものと思われる。柱穴は、重複関係を有するものもあるが、掘形長軸 40 ～ 50 ㎝・短軸 30 ～ 40 ㎝・深さ 30 ～ 60 ㎝の規模である。掘形埋土は、基盤層Ｉを成因としたものが主体を占め、殆どが類似している。柱穴には、柱痕跡（柱当り）の認められるものも有り、細砂を混在したシルトが自然堆積した状態にある。遺物は出土していない。

2井戸（写真 37）

２井戸は、2007－Ⅲ区の北東隅に位置する。当初、遺構の平面検出において大型柱穴の柱痕跡・掘形の重複関係を考えたが、井戸と判明した。

２井戸は、東西長軸 1. 1 ｍ・南北短軸 1. 0 ｍ・深さ 1. 1 ｍ（基底部で T. P. =17. 80 ｍ）の規模である。井戸の掘り込みは、基盤層Ⅳ類似層に達し、素掘りである。埋土は、上記した柱穴埋土に酷似した埋土を認めることができる。そのため、時代が不明ながら同一段階に帰属する所産と思われる。遺物は出土していない。

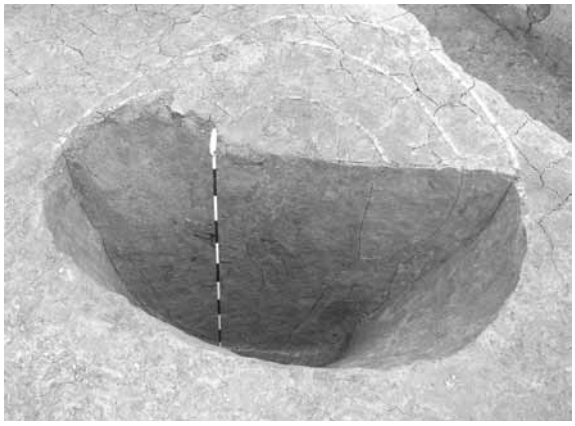


写真 37　2007－Ⅲ区 C12 － g1　2 井戸東西断面土層
（南から）

5井戸（写真 38、写真図版 15）

５井戸は、2007－Ⅲ区の北西隅に位置し、１溝と重複関係にある。調査区北壁断面土層と１溝－5 井戸間の断面土層の層序関係から、１溝の埋没途上において 5 井戸が掘削されたことが判明した。

５井戸の規模は、１溝との関係で判然としないが、東西掘形上端で 3. 2 ｍ（掘削できた下部での掘形は東西 1. 8 ｍ）・深さ 1. 1 ｍ（T. P. =17. 70 ｍまで掘削）以上である。井戸の掘り込みは、基盤層Ｖよりさらに下位に及んでいる。遺物は、上層で１溝と同様の平安・鎌倉時代の土師器１点・瓦器１点、須恵器１点が出土した。下部で遺物は出土していない。

写真 38　2007－Ⅲ区　1 溝―5 井戸間の断面土層
（東南東から）

1溝（図 25・27・49、写真 39、写真図版 14・15・38・39）

１溝は、Ⅲ区の西半部に位置し、南側から調査地を斜め（N－31°～33°－W）に横切り、５井戸の手前で西側に屈曲（内角約 115°）する。一方、溝は調査区北壁断面土層には現れないが、検出・掘削した平面形では、５井戸の東側で直線的に北西方向に延びているように見受けられる。基底部の深さは、南端と西端ではさほどの差がなく、走向を判断できない状態にある。

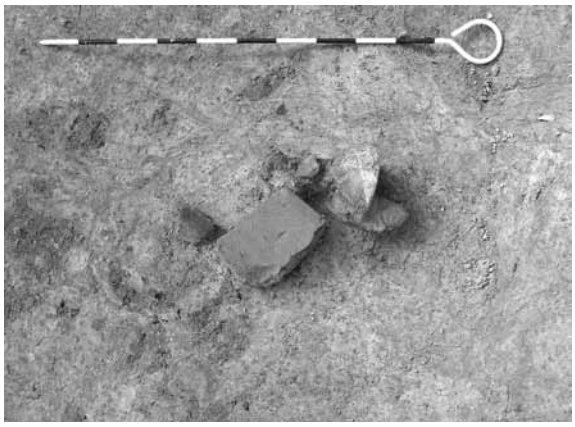


写真 39　2007－Ⅲ区　1 溝遺物出土状況（南南東から）

埋土の最下層は、自然堆積層（図 27 の８・９）で、９は流水痕跡、８は澱み状態の認められる状況にある。断面土層位置では、図 27 の２～４において掘り直しと思われる堆積層序を示すが、調査区南壁及び南西壁では認めることができない。

遺物（766 点）は、図 27 の３下半～４にかけて集中する。奈良～平安時代（470 点）の須恵器、土師器・黒色土器、平安時代末～鎌倉時代（292 点）の土師器（88・89）・瓦器（90・91）・砥石（117）等がある。５井戸の東側では、鎌倉時代以前の遺物が特に集中する傾向にあり、別遺構の重複をも考える必要がある。中には白鳳期の凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦１点（249）が出土した。

6土坑（図 28、写真 40、写真図版 16）

６土坑は、Ⅲ区の北西側で１溝と重複して位置する。東西 3.1ｍ・南北 3.0ｍ・深さ 0.7ｍで、やや歪な隅円方形状を呈する。法面の立ち上がりは比較的緩やかで、丸みをもって基底部に達する。基底部では、南東から北西に向かって緩傾斜するものの、最大２×２ｍの歪な面を認めることができる。埋土は、大別して３区分できる。上位層は図 28 の４～６で基盤層Ⅱ・Ⅲを成因とし、下位層は図 28 の７・８・10 で褐灰色から黒褐色シルトを主体とする。最下層は、粗砂礫を多量に含み基盤層Ⅳを成因とする埋積である。

写真 40　2007－Ⅲ区 C11－k25・C12－k1　6 土坑（北東から）

遺物は、土器と思われるものは一切ない。６土坑に関して、基底部に堆積した埋土（図 28 の８・９）の一部と当遺構と関連性の高い基盤層Ⅳ黄褐色粗砂礫の一部を採取し（土嚢袋 18 袋分）、遺物の洗い出し作業を行った。石器製作に伴う剥片と判断した凝灰岩（硬質頁岩）製剥片１片（写真 42）が出土した。

写真 41　2007－Ⅲ区 C11－k25・C12－k1　4 土坑（北から）

3土坑（写真図版 16）

2007－Ⅲ区の西半部で１溝と重複して位置する。東西 0.85ｍ・南北 0.75ｍ・深さ 0.50ｍの規模で、

円形状を呈する。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。石器遺物ではないが、６土坑で選別した類いの泥岩・粘板岩の小片が数点出土したのみである。

4土坑（図 28、写真 41）

４土坑は、2007－Ⅲ区の北西側に位置し、１溝・６土坑と重複関係にある。４土坑は、１溝より古く、６土坑より新しい段階にある。短軸 0. 84 m・長軸 1. 8 m・深さ平均 0. 32 mの規模で、北端は凹凸の著しい状況にある。埋土は、図 28 に示すように３土坑と類似している。遺物は出土していない。

6土坑出土の凝灰岩（硬質頁岩）製剥片（写真 42）

凝灰岩（硬質頁岩）製剥片は、長さ 18 ㎜・幅 11 ㎜・厚み 6. 5 ㎜を測る小片である。剥片そのものは、乳濁色を呈し非常に風化の著しいものと見受けられる。剥片は、明瞭に打瘤痕が観察できることから石器製作に伴う剥片と判断した。剥片の先端部に非常に細かな割れが認められるが、乳濁色の色調よりやや鮮明な状態にあるため調査時に生じた欠けである可能性が高い。

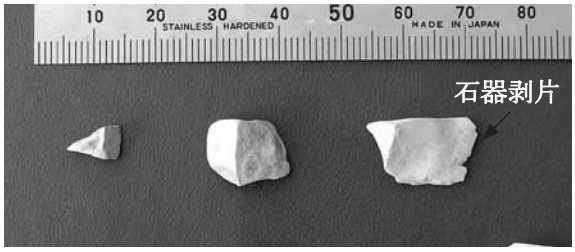


写真 42　2007－Ⅲ区　6 土坑出土の石器剥片

断定するには至らなかったが、石器剥片の出土から６土坑は縄文時代以前に遡る遺構の蓋然性が高いものとなった。なお、基盤層Ⅲｂの下部に一定の広がりが認められる基盤層Ⅳ黄褐色粗砂細礫は、６土坑の基底部でも確認されている。基盤層Ⅳにも人為的な石器剥片が含まれるかどうかの検討は、その後の調査 2008－Ⅲ区・Ⅶ区下位面において明確にすることができている。なお、選別作業によって得られた自然礫の大半は、基盤層Ⅳが成因となるものと思われるが、量の多い順から泥岩・粘板岩・砂岩・チャート系・長石・石英・その他不明となる。

5　小結

調査の成果と周辺の現状地形から、さらに調査地付近の古い微地形を考える事が可能となった。鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006－Ⅲ区・2007－Ⅰ・Ⅱ区や 2007－Ⅲ区から 2006－Ⅰ・Ⅱ区の方向へ緩やかに下降し、北西側の神楽山南東麓に沿う谷地形を形成していることが判明した。ただ、2007－Ⅰ・Ⅱ区の北端より南端の方が 30 ㎝程度低くなることから、部分的に下位層の自然流路等の影響による微低地が入り込んでいる様相も理解できる。

また、現状地形から考えて、調査地 2007－Ⅲ区の東側の天満川を境にして北東側に位置する天満Ⅱ遺跡（図２の 17）に向かって高位の地形を形成している。2007－Ⅲ区の東側では、既に県道工事が進捗している状態であったが、中世と思われる土器破片数片を採取した。このことから、2007－Ⅲ区の東側にも中世の何らかの遺跡の展開が想定されるところであった。

今回の 2007－Ⅰ・Ⅱ区周辺でも、2006－Ⅲ区を含めて縄文・弥生・古墳時代の集落からも外れた範囲である事も確実となった。2007－Ⅰ・Ⅱ区周辺の鎌倉時代以前の状況は、2006－Ⅲ区を含めて上位層での流水痕跡を留めた自然流路などが確認されなかった事から考えれば、土地利用のされない荒廃した立地と考える事が可能である。平安時代については、2007－Ⅲ区の鎌倉時代の溝からの出土ながらまとまりのある遺物群が存在することから、狭い範囲に平安時代の一定の遺構の広がりを考えることが可能となった。これは、1980（昭和 55）年度から 1981（昭和 56）年度にかけて調査が実施された藤

並地区遺跡（32）の南西側範囲や野田地区遺跡の近接する範囲とは別の広がりをもつものである。

今回の調査の内、2007－Ⅰ・Ⅱ区で検出した土坑群は、埋土の堆積状況から一部に自然堆積と認められるものがあることから一概に土坑墓としての性格を与えることのできない結果となった。湯浅御坊道路 1991（平成 2）年度調査のＣ区土坑群を土壙墓群と性格付けた意味合いを、再検討する必要がある。

基盤層に関して、全体を通した層序関係を見ると、2006－Ⅲ区の基盤層Ⅲ・Ⅳ褐灰色系シルト（写真 29）と 2007－Ⅲ区の６土坑の堆積層（図 28 の７・８・10）、2007－Ⅲ区の３・４土坑の堆積層全般、2007－Ⅰ・Ⅱ区の基盤層Ⅲが非常に似通った状況にある。ただ、2006－Ⅲ区では 2007－Ⅲ区の３・４土坑に類似した埋土遺構が基盤層Ⅲより上位の面から切り込まれていたことから、一概に基盤層Ⅲ類似層が同一の成因・時期とはできない。故に、2006－Ⅲ区の基盤層Ⅲ・Ⅳが縄文時代の堆積層に対応するかどうかは俄かに判断し難いところでもあった。

また、2007－Ⅰ・Ⅱ区においては、基盤層Ⅲより下位に基盤層Ⅵ・Ⅶが存在する。2007（平成 19）年度の調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層Ⅶが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層が存在するものと思われた。この事から周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当って、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われた。と共に、2007－Ⅲ区周辺は元より、広範において旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起されるところでもあった。

第3節　第3・4次調査（2008 年度）

1　調査の概要

調査地は、大きく７箇所に別れ、地点の違いにより 2008－Ⅰ区～Ⅶ区と呼称して調査を行った。調査は、７地区合計 2, 237 ㎡（調査対象面積 3, 138 ㎡）について実施した。

また、掘削排土の仮置場が十分確保できない 2008－Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区は各々東側半分と西側半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2008－Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区では航空写真撮影も分割して作業を行った。なお、2008－Ⅳ区～Ⅶ区は、県文化遺産課・県建設部から追加変更の依頼のあった地区である。

今次の調査では調査区が複数に分かれるため、検出遺構等の記述は、西側の範囲 2008－Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ区、中央の範囲 2008－Ⅱ区、東側の範囲 2008－Ⅲ・Ⅶ区の順で行うこととする。

検出遺構

検出遺構は、各地区において様相を異にするため詳細は後述するが、ここでは大要を記述する。

2008－Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区の遺構は、主に中世遺物包含層（第３層・第４層）上面と旧石器時代以降の形成層の直上（第３層・第４層下面）で確認できた。

調査区の内、2008－Ⅲ・Ⅶ区は、昭和 30 年代の大規模な粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、粘土採掘坑に充填されていた。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査によって下位面の遺構と自然地形を確認することができた。

遺構の主だったものとして、2008－Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを、2008－Ⅱ区では奈良時代の掘立柱建物、時代不明の土坑・溝などを、2008－Ⅲ・Ⅶ区では上位面の調査で褐灰色系シルトを埋土とする土坑・落ち込み状遺構などを検出した。また、既往の調査と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

特筆すべき事項として、2008－Ⅲ区補足調査、2008－Ⅶ区下位面として行った調査において既往の

調査では確認されていなかった旧石器時代の堆積層（粗砂細礫層）や往時の自然地形と石器・石器剥片類、更に下位の基盤層を確定できたことにある。

出土遺物（図 49・写真図版 39）

出土遺物の大半は、主に各地区の包含層や 2008－Ⅲ・Ⅶ区の粘土採掘坑の改変土から出土した鎌倉・室町時代の土器類で占められる。鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（小壺・甕・椀・皿）、須恵器捏鉢、瓦、砂岩製砥石、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁・白磁）、銭貨などがある。

その他、旧石器時代のナイフ形石器・石器剥片、縄文時代の石鏃、弥生時代の土器（甕）、奈良時代の須恵器（壺・甕・坏・坏蓋）・瓦などがある。

2　2008－Ⅰ区　調査面積 84 ㎡（調査対象面積 114 ㎡）（図 29・30、写真 43、写真図版 17・18）

Ⅰ区は、一般国道 42 号湯浅御坊道路（1990（平成２）年度調査のＢ地区より西側、同 1992（平成４）年度調査のＡ地区の南東側に位置する（図３）。

Ⅰ区は、後世の果樹園の造成のため大半の耕作土・床土が削平され、造成土（岩砕礫）が中世遺物包含層第３層（中世水田耕作土）に喰い込む状態となっていた。

遺構検出面と出土遺物

Ⅰ区の遺構は、中世遺物包含層第３層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。遺構調査は、第３層下面で行った。中世遺物包含層第４層は、形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存するのみであった。

遺物（71 点）は、遺物包含層第 3・4 層から鎌倉時代を主体とした土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿）、須恵器（甕）が出土した。

水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり（図 29、写真 43、写真図版 17）

遺構の主だったものとして、Ⅰ区西側調査地で鎌倉時代の水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり２条を検出した。盛り上がりの高さは、第３層（中世水田耕作土）下面からすると 0. 08 mを測る。盛り上がりの走行は、N－11°－E である。基盤層の盛り上がりの上位に人為的な盛土を確認していないため、畦畔と考える見解に否定的な意見もある。なお、現況地形では特に走行性の定まった地形区画は認められない。

写真 43　2008－Ⅰ区西側西　水田区画（南西から）

人間・牛の足跡（写真図版 17・18）

また、既往の調査と同様に何れの範囲においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込みを多数検出した。特に、水田を形成していると考えられる第３層系堆積層を埋土とする踏み込み遺構が多数存在する。

シルト層に喰い込む自然石（角礫）の性格（写真 43）

調査区の範囲内には、下部基盤層のシルト層に喰い込む状態で拳大から人頭大の自然石（角礫）が比較的多く存在した（写真 43 手前の角礫）。特に、Ⅰ区西側調査区の南西端に集中して多く見受けられ、Ⅰ区東側調査区にも散在的に認めることができた。これらの自然石の埋没が人為的な所産によるかどう

かを確認するため、調査区南西壁断面土層の詳細な観察、検出平面の再々にわたる観察を行ったが、人為的な掘形・埋め込みの状態を確認することができなかった。結果的には、下部基盤層のシルト層が不安定な状態の時に北西側の丘陵斜面からの転石と考えるに至っている。後述するⅠ区より南西側のⅥ区北東半・南西半の調査区においても多数認められるところである。

自然石（角礫）は、当地区の北東側に位置する2008－Ⅳ区では殆ど見受けられない。また、2006－Ⅰ・Ⅱ区では、第３層系・第４層系堆積層に含まれるものの、基盤層内には包含しない。

３　2008－Ⅳ区　調査面積154㎡（調査対象面積172㎡）（図31・32、写真44・45、写真図版19）

2008－Ⅳ区は、2008－Ⅰ区の北東側に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路（1990（平成２）年度調査のＢ地区より西側、同1992（平成４）年度調査のＡ地区の南東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物（図32、写真44）

2008－Ⅳ区の遺構は、中世遺物包含層第３層上面と第３層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第４層が遺存する。

遺物は（299点）、遺物包含層第３・３´層・４層から鎌倉時代を主体とした土師器（皿・土釜）、瓦器（椀）、須恵器（甕・須恵質捏鉢）、奈良時代の須恵器（壺・甕）が出土した。

写真44　2008－Ⅳ区F12－d6　調査区北壁断面土層
（南南東から）

水田耕作に伴う不整形な小溝群（写真45）

遺構の主だったものとして、2008－Ⅳ区東側中央E12－x・y７で鎌倉・室町時代の水田耕作に伴う不整形な小溝群を多数検出した。不整形な小溝群は、最大幅員0.6ｍ・最小幅員0.15ｍ・深さ0.02～0.03ｍで、東西方向N－86°－EからN－85°－Wに走行する。埋土は、中世遺物包含層第４層である。

第3´層埋土の落ち込み

Ⅳ区西側F12－a６～d6・７では東西13ｍ・南北2.7ｍ以上・検出最深0.1ｍにおよぶ第３´層埋土の落ち込みを検出した。また、既往の調査と同様に当地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

写真45　2008－Ⅳ区E12－x7・F12－a7　小溝群
（西から）

その他の遺構

その他、調査区東壁断面土層E12－x６にかかって褐灰色から黒褐色系シルト埋土の土坑が１基確認さていたが、壁面崩壊のため断面土層図に記録することができなかった。また、中世遺物包含層第３層上面の遺構は、第２層（現代の床土）下面に該当し、中世以後、江戸時代から近代に至る間の耕作に伴う痕跡と考えられる。記録は、デジタルカメラによるスナップ写真に留めた。

4　2008－Ⅵ区　調査面積 121 ㎡(調査対象面積 147 ㎡)(図 33 ～ 36、写真 46、写真図版 20・21)

2008－Ⅵ区は、2008－Ⅰ区の南西側に位置し、今次の調査では最も西端の地区になる。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチの設定地区に該当する。また、一般国道 42 号湯浅御坊道路から国道 42 号線への導入路部分の調査（1980（昭和 55）年度）Ⅰ区とは、僅か約 80 mの位置関係にある。

遺構検出面と出土遺物

2008－Ⅵ区の遺構は、中世遺物包含層第３層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第４層が遺存する。第４層の一部は形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存する範囲もある。遺構は、第３層に掘り込まれた状態で溝１条、第３層下面で不整形な土坑数基が、2008－Ⅵ区南西端で第３層に掘り込まれた土坑１基などがある。

なお、下位層の旧石器時代を対象とした調査は行っていない。

遺物（267 点）の大半は、中世遺物包含層第３層からの出土である。一部は、踏み込み遺構の集合体としての第４層系埋土からの出土である。

1溝（図 36、写真 46、写真図版 20）

第３層下面で、東西に走行する１溝を検出した。１溝は、Ⅵ区南西半中央から南側 F12－p5 ～ q16 に位置する。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチ部分に該当する。

写真 46　2008－Ⅵ区南西半 F12－p15
1 溝調査区南東壁断面土層（西から）

溝は、基本的に東西に走行するが、西側では南西方向に浅い落ちの広がりが認められる。１溝は、最大幅員 1. 35m・深さ 0. 90 m・延長 6. 5 m分を検出した。埋土は、自然堆積と考えられ、上端部では包含層第３層は窪まず、第３層によって整形された状態にある。また、溝の埋土に第４層系の堆積層を含まない。埋土の中位以下に厚さ約 40 ㎝の木屑層（幾層にもわたる木っ端・木の葉層：図 36 の E）を形成するが、流水による影響が及んだためか、肩崩れを起こし基盤層類似土が木屑層の上に覆い被さる。

木屑層の埋没状況は、2008－Ⅶ区下位面の補足調査による地山基盤層直上の木屑層基盤層に類似するが、性格・相関関係は不明である。遺物は出土していない。

１溝は、包含層第３層（室町時代）によって埋土の上端部が削平されること、第４層系の堆積層（鎌倉時代）が存在しないことから両層の形成の過渡期に掘削されたとも考えられる。

11 土坑（図 35、写真図版 21）

11 土坑は、第３層下面で、2008－Ⅵ区北東半の南寄り F12－o13 に位置する。11 土坑は、南北 0. 45 m・東西 0. 40 m・深さ 0. 17 mを測り、やや歪な隅丸方形を呈する。埋土は、基盤層のブロック土が少量入ることから、人為的埋土の可能性が高い。遺物は出土していない。

不整形な土坑群

不整形な土坑群は、2008－Ⅵ区南西半の１溝より南側 F12－p・q16 に集中して位置する。最深 0. 10 m前後で、埋土は第４層系の堆積層である。特に方向性のある配置は認められない。

2溝

２溝は、2008－Ⅵ区南西半の南端 F12－q16 に位置し、上記の不整形な土坑に重複する。2008－Ⅵ

区南西半では、最も上位の遺構である。２溝は、南北方向N－12°－Wに走行し、幅員 0. 25 ～ 0. 40 m・深さ 0. 10 ～ 0. 15 m・延長約 2. 3 m分を検出した。埋土は、粗砂を主体として少量の細礫を含む単層であり、自然堆積か人為的埋土かは不明である。遺物は、近代と思われる磁器が１点出土した。

５　2008－Ⅱ区　調査面積 824 ㎡(調査対象面積 868 ㎡)(図 37 ～ 40、写真 47、写真図版 22 ～ 24)

2008－Ⅱ区は、2007－Ⅱ区とは町道を隔てて北側に位置し、一般国道 42 号湯浅御坊道路（1990（平成２）年度調査のＢ地区より東側に位置する。県文化遺産課の確認調査 10 ～ 13・18 トレンチの設定地区に該当する。

遺構検出面と出土遺物

2008－Ⅱ区の遺構は、中世遺物包含層第３層下面と旧石器時代以降の形成層の直上で確認できた。

遺構の主だったものとして、奈良時代の掘立柱建物１棟・落ち込み状遺構１条、鎌倉・室町時代の土坑 10 基・落ち込み状遺構・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを検出した。また、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

遺物（1, 290 点）は、中世遺物包含層第３層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、サヌカイト剥片、銭貨などが出土した。

2008 －Ⅱ区では第３層系・第４層系遺物包含層は、主に北半側の低い範囲に遺存するのみであった。ここでは、主な遺構についてのみ記述する。

掘立柱建物1（図 40、写真図版 23・24）

掘立柱建物１は、2008－Ⅱ区の北西隅 E12－o・p17 ～ 19 に位置し、南北桁行３間（東側柱並び 6. 60m・西側柱並び 6. 65m）×東西梁行２間（北側柱並び 4. 65m・南側柱並び 4. 80m）の南北棟の側柱建物である。柱穴掘形は、方形・長方形・歪な方形を呈し、一辺最小寸法 0. 54m ～最大寸法 0. 77m を測る。柱穴柱当りに該当する埋土部分は、円形を呈し、最小寸法径 0. 13m ～最大寸法径 0. 31m、深さ最浅 0. 26m ～最深 0. 46m である。

掘立柱建物１は、棟方向が東側柱並びでN－５°－Ｅ、西側柱並びでN－８°－Ｅである。

埋土は、柱穴掘形は人為的埋土、柱穴柱当りは人為的埋土もしくは自然埋没、そしてその両方を合わせ持つ三過程が認められる。中には埋土に炭粒を多量に含み、焼成粘土塊を包含する 33 柱穴（写真図版 24－１）も存在する。

遺物は、柱穴掘形・柱当り埋土から奈良時代の須恵器坏・蓋・甕、土師器甕の小片 30 点が出土した。

21 土坑（写真図版 24）

21 土坑は、2008－Ⅱ区の西側南寄り E12－o・p22 に位置する。東西長軸 5. 0 m・南北短軸 3. 4 m・最深部 0. 10 mの規模である。埋土は、基盤層のブロック土を少量含む黄灰色シルトで人為的埋土と考えられる。遺物は、鎌倉時代の瓦器椀・土師器皿、須恵器坏の小片 20 点が出土した。

耕作に伴う小溝群（図 38、写真図版 22）

耕作に伴う小溝群を対象とした調査は、部分的に E12－m19 区画周辺で行い、中世遺物包含層第３層下面（中世遺物包含層第４層上面）で検出した。

小溝群の走行は、南北方向がN－１°－WからN－２° 20′－W、東西方向がN－82° 30′－Ｅである。現況地形では、床土直下の暗渠排水溝に一定の方向性が認められ、南北方向がN－５° 40′－W前後の一群とN－11°－W、N－20°－Wの三群がある。一部、小溝群との相関性が考えられる。

遺物は、鎌倉時代の瓦器・土師器の小片が数点出土した。

その他の遺構

その他の遺構として、調査区東壁断面土層 E12－k19 において褐灰色から黒褐色系シルト埋土の土坑１基、調査区の中央北寄り E12－n19・20 において同埋土の不整形な土坑状の窪みが東西楕円形状に配置する 10 遺構などがある。

また、人間の足跡と考えられる踏み込み遺構が特に集中する範囲を確認した。集中する範囲は、特に方向性・規模の規格性は認められなかった。

写真 47　2008－Ⅱ区東側 E12－n・m19・20 10 遺構（北から）

補足調査（写真図版 24）

2008－Ⅱ区西側 E12－q22･23 の調査区西壁沿いにおいて、天端面積約 10 ㎡（東西 2.5 m×南北４m）で補足調査を行った。補足調査では、調査区西壁断面土層での粗砂細礫層の層厚・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面は、最も高い部分で T.P.=17.60 m前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取は行っていない。

6　2008－Ⅴ区

調査面積 532 ㎡（調査対象面積 815 ㎡）

Ⅴ区は、県文化遺産課の確認調査（27・28 トレンチ）に伴う地区設定である。2006－Ⅱ区と 2008－Ⅱ区に挟まれた範囲に位置し、一般国道 42 号湯浅御坊道路（1990（平成２）年度調査のＢ地区より東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物

Ⅴ区の遺構は、褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑などがあるが、詳細は県文化遺産課「県道吉備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡確認調査報告書」に譲る。

遺物は、中世遺物包含層第３層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、瓦などが出土した。

7　2008－Ⅲ区　調査面積 410 ㎡（調査対象面積 410 ㎡）（図 41 ～ 44、写真 47、写真図版 25・26）

2008－Ⅲ区は、2008 －Ⅶ区の北隣、2007－Ⅲ区の西側に位置し、今次の調査では東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査 22 ～ 25 トレンチの設定地区に該当する。計画当初は排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側に排土置場を確保できたことから一括調査が可能となった。

遺構検出面と出土遺物

Ⅲ区は、昭和 30 年代の粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、１～３粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去されていた。この地区では、上位面の遺構と一部調査区南壁沿いの補足調査によって下位面の粗砂細礫層の状況を確認することができた。

遺構の主だったものとして、Ⅲ区では土坑 20 基・柱穴状遺構３基・落ち込み状遺構３箇所などを検出した。

遺物（768 点）は、奈良時代の須恵器・瓦、平安・鎌倉時代の遺物の土師器（皿・甕・土釜）、瓦器（椀・小皿）、須恵器捏鉢、砂岩製砥石、現代（昭和）の陶磁器・瓦・土管などがある。遺物の大半は、西側に位置する１～３粘土採掘坑に係る３次的な埋土からの出土である（765 点）。

補足調査による粗砂細礫層からは、旧石器時代のサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製の石器剥片が出土した（Ⅲ区補足調査時には、石器が確認されず時代が確定できていなかった）。なお、一連の褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱穴状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

4土坑（図 43、写真 48、写真図版 25－3 の手前の土坑）

４土坑は、2008－Ⅲ区の東端部 C11－n24・25 に位置する。４土坑は、東西 0. 93 m・南北 0. 70 m以上・最深 0. 62 mを測る。北側半部は、北壁際側溝の掘削により損壊した。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

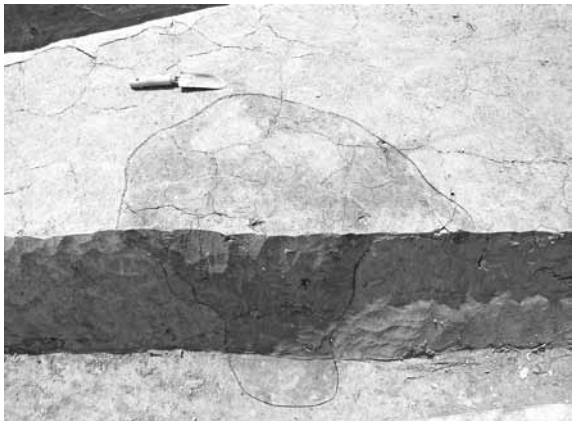


写真 48　2008－Ⅲ区 C11－n24・25
4 土坑検出状況（北から）

10 土坑（写真図版 26）

10 土坑は、2008－Ⅲ区の中央東寄り C12－t 1 に位置する。10 土坑は、東西短軸 1. 75 m・南北長軸 2. 75 m以上・最深 0. 70 mを測り北側の調査区外に続く。土坑の北側から北壁際側溝位置で最も深くなり、歪な形状を呈している。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトを基本として基盤層黄褐色シルトが入り込む。遺物は出土していない。

8落ち込み状遺構（写真図版 26）

８落ち込み状遺構は、2008－Ⅲ区の東側 C11－o25 ～ C12－r・s 1 に位置し、北側調査区外に延びる。また、南側は、Ⅶ区上位面 C11－n・o25 ～ C12－r 2・s 3へ続く遺構である。８落ち込み状遺構は、東西 22. 4m・南北 13. 2m 以上・最深 0. 34m に及ぶ。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトを基本とする。両地区を通して、遺物は出土していない。

1～3粘土採掘坑（写真 49、写真図版 25－２手前の遺構）

１～３粘土採掘坑は、2008－Ⅲ区～Ⅶ区 C11－x 3・4・v 5から西側にかけて位置する。県文化遺産課の確認調査 22・23 トレンチ部分に該当する。１～３粘土採掘坑の大半は、人為的な埋め戻しが行われ、最上層から中位にかけて中世遺物包含層（層厚約 40 cm）が充填されていた。そのため、当初は中世の遺構と判断して調査を進めた。１～３粘土採掘坑は、東西 29m 以上・南北 25m 以上・深さ 1. 2m 以上の規模を有し、大きく３単位に分けて掘削→埋め戻し（山土・岩砕造成土（岩砕礫））を繰り返し、東側から西側に掘り進んでいる。下層ないし最下層に近い部分において昭和の陶磁器・瓦・土管が出土した。その時点で、粘土採掘坑に係る掘削を放棄した。

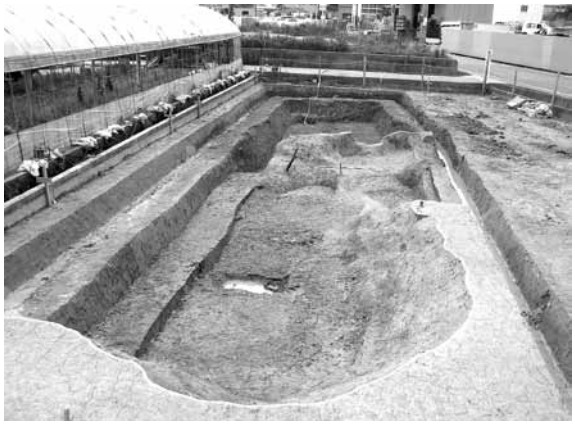


写真 49　2008－Ⅲ区　1～3粘土採掘坑（東北東から）

また、元地権者の方から昭和30年代に瓦を焼くための粘土採掘がⅢ区・Ⅶ区において大規模に行われた事実を確認することができた。そのため、Ⅶ区上位面では粘土採掘坑の平面位置の確認に留め、掘削は行わなかった。

補足調査（写真図版26・39）

2008－Ⅲ区C12－s・t2の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9㎡（東西3.5ｍ×南北2.5ｍ）で補足調査を行った。補足調査では、21土坑に関係した調査区南壁断面土層での粗砂細礫層の層厚・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面は、最も高い部分でT.P.17.70m前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取を行い（土嚢袋80袋分）、洗い出し・抽出作業を行った。その結果、調査時点では時代が確定できないながら、旧石器時代のサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩：写真図版39-305）製石器剥片12点が出土した（写真図版39－305）。

８　2008－Ⅶ区　調査面積644㎡・下位面の調査面積292㎡（調査対象面積636㎡）（図41～45、写真50、写真図版27～31）

2008－Ⅶ区は、2008－Ⅲ区の南隣、2007－Ⅲ区の西側に位置し、今次の調査では2008－Ⅲ区と共に東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査32・33トレンチの設定地区に該当する。計画当初は、2008－Ⅲ区と同様に排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側と南側に排土置場を確保できたことから一括調査が可能となった。

遺構検出面

2008－Ⅶ区も2008－Ⅲ区と同様に粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、１～３粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去された。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査を行うことができた。

〈2008－Ⅶ区上位面の調査と出土遺物〉

2008－Ⅶ区上位面では、土坑15基・落ち込み状遺構３箇所などを検出した。大半の遺構は、褐灰色系シルトを埋土とするものである。検出した土坑の内、53・54・55・56・57・58土坑は、８落ち込み状遺構の埋土を除去した下面においての検出である。

2008－Ⅶ区上位面の遺物（12点）の大半は、粘土採掘坑に係る埋土最上層から出土した鎌倉・室町時代の土器・瓦類で占められる。なお、一連の褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱穴状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

46土坑

46土坑は、2008－Ⅶ区の東側南寄りC12－q３に位置し、45落ち込みに重複する。46土坑は、東西長軸1.23ｍ・南北短軸0.60ｍ・最深0.48ｍで、長楕円形状を呈する。基底部の東寄りに径0.18ｍ・最深0.20ｍの柱穴様の小穴が存在する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

49土坑（写真図版28）

49土坑は、2008－Ⅶ区の中央北寄りC12－s３に位置する。49土坑は、東西2.90ｍ・南北1.75ｍ・最深0.34ｍで、不整形な形状を呈する。埋土は、頻度の高い順に褐灰色系シルト・黒褐色系シルト・灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

55 土坑

55 土坑は、2008－Ⅶ区の東側北寄り C12－p･q１に位置する。55 土坑は、東西長軸 1. 92 m・南北短軸 0. 54 m・最深 0. 10 mで、隅丸長方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする単層である。遺物は出土していない。

57 土坑（写真図版 28）

57 土坑は、2008－Ⅶ区の東側北寄り C12－o・p １で、55 土坑の東隣に位置する。57 土坑は、東西短軸 0. 91 m・南北長軸 0. 98 m・最深 0. 20 mで、隅丸方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

45 落ち込み状遺構

45 落ち込みは、2008－Ⅶ区の中央南寄り C12－q３・４～ s３・４に位置し、46 土坑が重複する。45 落ち込みは、東西 9. 4 m・南北 3. 5 m・最深 0. 10 mを測り、やや歪な形状を呈する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とし、直下の基盤層に類似する。遺物は出土していない。

〈2008 －Ⅶ区下位面の調査と出土遺物〉（図 45、写真 50、写真図版 29・30）

2008－Ⅶ区下位面では、土坑１基、複数箇所の自然流路状の落ち込みを検出した。

2008－Ⅶ区下位面の出土遺物は、粗砂細礫層からの石器・石器剥片のみである。

下位面：101 土坑（図 44、写真 50、写真図版 29）

101 土坑は、下位面の調査で唯一掘り込みの認められる土坑である。調査区の中央南側 C12－r３・４に位置する。101 土坑は、東西長軸 1. 5 m・南北短軸 0. 84 ～ 1. 05 m・最深 0. 17 mで、歪な形状を呈する。土坑の法面は、北側と東側が比較的緩やかに傾斜し、南側が急角度で傾斜する。基底部は、北側から南側に向けて緩やかに傾斜するものの比較的平坦である。

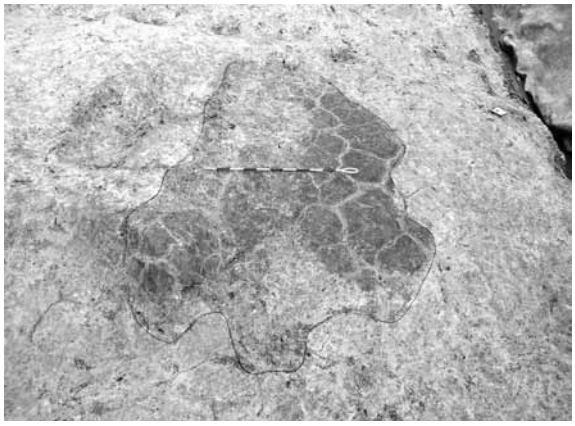


写真 50　2008－Ⅶ区下位面 C12－r3・4
101 土坑検出状況（南寄り西から）

埋土は、部分的に緑灰色ないし暗緑灰色粗砂細礫層が入った上に、褐灰色シルトないし黒褐色シルトが入り込む。堆積埋土の観察に努めながら丹念に掘削を行ったが、遺物は出土していない。

下位面：自然流路状の落ち込み

2008－Ⅶ区下位面は、粗砂細礫層を埋土とする大小の落ち込みによって形成され、全体の中で、大きく広い範囲で高低差を形成している。落ち込みの形状は様々であるが、タイプ分けすることも可能である。落ち込みの走行は、調査区西側では主に南東から北西を、東側では南西から北東を指向する。また、調査では、落ち込みの形状と粗砂細礫の大きさの相関関係にまで及んでいない。

粗砂細礫層は、調査区壁面の断面土層観察では一時に堆積したのではなく、複数回による堆積と見なされる状況にある。粗砂細礫層の堆積は､調査区全域に及ぶものであり､層厚 0. 16 m～ 0. 84 mを測る。

旧石器時代の遺物の抽出を目的とした粗砂細礫層の採取は、４m方眼を基本にしたが、採取位置・範囲について厳密にしていない。粗砂細礫層の採取に当たっては、極力、落ち込み内の粗砂細礫層の採取をも行ったが、現時点の資料では石器・石器剥片が特に多くなる傾向はなかった。

補足調査（巻頭写真図版２・写真図版 31）

2008－Ⅶ区下位面では、補足調査Ａ・Ｂと呼称して２箇所で行った。

補足調査Ａ（巻頭写真図版２）は、2008－Ⅶ区下位面 C12－p3 の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約９㎡（東西３ｍ×南北３ｍ）で行った。補足調査Ａでは、調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=14.00 ｍ前後（耕作土天端復元値 T.P.=19.20 ｍ前後）まで行い、地山基盤層は T.P.=16.00 ｍ前後で確認した。

補足調査Ｂ（写真図版 31）は、2008－Ⅶ区下位面 C12－s・t4 の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約９㎡（東西３ｍ×南北３ｍ）で行った。補足調査Ｂでも、補足調査Ａと同様に調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=15.30 ｍ前後（耕作土天端復元値 T.P.=19.20 ｍ前後）まで行い、地山基盤層は T.P.=16.00 ｍ前後で確認した。

9　小結

2008 年度の調査で、当該範囲の和歌山県土木部から依頼・県文化遺産課から指示のあった地区の調査を完了することになった。1980（昭和 55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる吉備インターチェンジ（現、有田インターチェンジ）から国道 42 号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われて以来、広範囲に及ぶ調査が行われてきた。

旧石器時代に関しては、2007 年度の調査に伴う『平成 19 年度県道吉備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡発掘調査の概要報告』では、「07－Ⅰ区・07－Ⅱ区においては、基盤層Ⅲより下位に基盤層Ⅵ・Ⅶが存在する。調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層Ⅶが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層である所謂地山が存在するものと思われる。周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当って、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われる。と共に、07－Ⅲ区周辺は元より広範において、旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起されるところである。」とした。

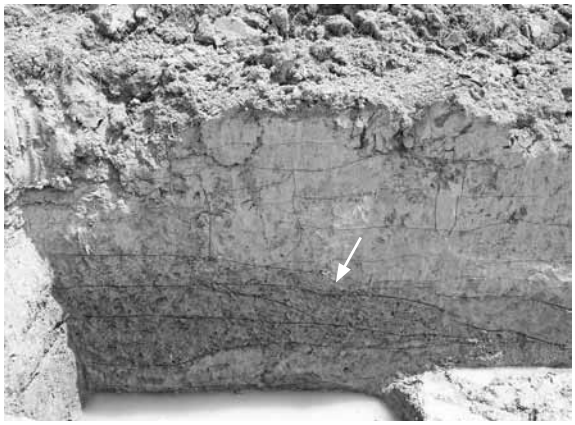


写真 51　県文化遺産課確認調査 30 トレンチ
調査区南壁断面土層（北から）

このことに関して、旧石器時代の基盤層である所謂地山は、今回の調査で更に下位に存在することが確定した。また、今回の調査による新たな成果を加えることにより藤並地区遺跡の理解に対して、旧石器時代の様相に一つの見解を提示することが可能となった。

この旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、既往の調査に伴う補足調査（2008－Ⅱ区）、県文化遺産課確認調査 30 トレンチ（写真 51）、道路本体工事に伴う深掘り部分（３箇所）の確認・観察に伴い粗砂細礫層の存在が確認されている（写真 52）。これらのことから、旧石器時代の往時の自然地形･生活面は､今次の調査範囲全域（2006

写真 52　2008－Ⅳ区　道路工事掘削部分
西壁断面土層（東から）

～ 2008 年度調査）に広がるものと考えられる。

国道 42 号線への導入路部分の調査（1980（昭和 55）年度）では、1980 年度Ⅰ区 T. P. =17. 50 ～ 18. 00 m前後で多数の自然流路と流路周辺に展開する旧石器時代の生活領域が検出されている。

土生池遺跡（有田川町土生）では、緩斜面地 1984 年度N・M・S地点 T. P. =29. 40 ～ 30. 50 m前後で土坑・自然流路などが多数検出されている。

一般国道 42 号湯浅御坊道路の建設工事に先立つ調査（1989（平成元）年度から 1993（平成 5）年度）では、1991 年度M地区 T. P. =24. 50 ～ 25. 20 m前後で当該期の生活面に散在する石器・石器剥片の広がりが検出されている。

今次の 2008－Ⅶ区下位面調査では、粗砂細礫層下面の T. P. =17. 50 ～ 17. 80 m前後で土坑 1 基（101 土坑）・多数の自然流路状の落ち込みを検出した。調査では詳細な観察ができなかったが、調査地全体に厚薄に堆積する粗砂細礫層の在り方は、自然流路状と称するより土砂流等の作用による抉り込みが生じた痕跡と考えられる。

2008－Ⅱ区では、補足調査ながら 2008－Ⅶ区と類似する T. P. =17. 60 m前後で下位面の存在を確認している。また、2006－Ⅲ区では、粗砂細礫層に関係する 1 層上位の粗砂層の上端面を T. P. =18. 70 m前後で確認している。更に、県文化遺産課の確認調査 30 トレンチにおいて粗砂細礫層に関する調査が行われ、T. P. =17. 75 ～ 17. 90 m前後で確認されている。

これらのことから、旧石器時代に伴う遺物の確認できていない地点は実証性の低い状態となるが、同一層序の広範にわたる分布は土生池遺跡 1984 年度N・M・S地点、藤並地区遺跡 1980 年度Ⅰ区、藤並地区遺跡 1991 年度M地区調査との関連性を強く示唆するところである。旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、生活領域を確定できないにしろナイフ形石器段階の展開を広範に認めるところである。

藤並地区遺跡 1980 年度Ⅰ区での展開は、旧石器時代末の有舌尖頭器や縄文時代草創期の石鏃を伴う過渡的な時期と認識されていることから、小期により領域の展開が土生・水尻・天満の範囲の中で移動・併存しているものと考えられる。

旧石時代領域の広がり、小期の石器組成の変遷など、詳細検討については今後も藤並地区遺跡 1980 年度Ⅰ区、土生池遺跡 1984 年度N・M・S地点、藤並地区遺跡 1991 年度M地区、藤並地区遺跡 2008－Ⅲ・Ⅶ区との関係の中で検討していきたい。

2007－Ⅲ区において、6 土坑と称した遺構については、調査時に最下位の堆積埋土と判断した粗砂細礫層から風化の著しい硬質頁岩製の剥片石器と認定した遺物（写真 42）があり、旧石器時代の遺構と判断したところである。今次の 2008－Ⅲ区・Ⅶ区下位面の調査等から勘案すれば、粗砂細礫層出土遺物と判断したものは疑似石器と判断した方が良いと思われる。また、これは、2007－Ⅲ区下位層の基盤層Ⅳ粗砂細礫層に伴うものと判断すべきと考えるに至った。

また、2008－Ⅲ・Ⅶ区の上位面調査における褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みは、先述したとおり、出土遺物が皆無のため的確な時期判断ができない。根拠に乏しいが、縄文時代から弥生時代前期に至る何れかの時期に対応するものと思われる。その他、調査の主体にはなっていないが 2006－Ⅱ・Ⅲ区、2008－Ⅱ区においても褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みを確認している。但し、これらの土坑の堆積層には遺物が伴わない事、堆積層に人為的に手の加わった埋土でない可能性が高いことなどから、土坑は倒木等による自然の所産、落ち込みは自然地形への埋積になるものと考えたい。

第Ⅳ章　総括

出土遺物内容とその分布領域の性格に関して

2007－Ⅲ区、2008－Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ区の下位層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する1990年調査M地区及び土生池遺跡（25）周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうることができることとなった。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイト製ナイフ形石器・サヌカイト製横長剥片・チャート若しくは凝灰岩（硬質頁岩）製縦長剥片・サヌカイト製錐状石器、その他のサヌカイト・凝灰岩（硬質頁岩）・チャート製剥片がある。

縄文時代草創期・縄文時代晩期若しくは弥生時代前期・後期後半については、遺物が極めて少ないため、その内容を推し量るには無理があることが明らかとなった。

飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包含層（水田耕作土）からの出土であるため、全ての地区において窯場からの集積を反映したものでないことが確実視されることとなった。ただ、出土遺物の中には飛鳥Ⅱの段階の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する城山窯跡群（22）や地蔵山窯跡群（23）・風呂の谷窯跡群（24）などの須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008－Ⅱ区において、単独で検出した奈良時代の掘立柱建物の位置付けを明確にすることができていない。

平安時代後期は、掘立柱や溝を検出した2007－Ⅲ区のみに当該期の遺構・遺物が集中して認められることから、2007－Ⅲ区調査地から東側に水路を挟んで展開する未周知の遺跡に関与することが濃厚であると考えられる。

平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007－Ⅲ区の良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007－Ⅲ区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含（包含層第３層・第４層）として位置付け理解しうる。

以後、室町時代にかけて当該地一帯は水田経営の基盤となっている。鎌倉時代から室町時代の集落の中心は、既往の有田川町教育委員会の調査から、藤並地区遺跡の北側に位置する天満Ⅰ遺跡（16）・天満Ⅱ遺跡（17）にあるものと考えられる。

以上のように、調査・出土遺物整理作業によって得られた遺物内容とその分布領域から、藤並地区遺跡の周辺部の状況を踏まえてその変遷を把握することとなった。

【引用・参考文献】

吉松敏隆　1982「地理的環境」『田殿・尾中遺跡―庄地区道12号長田連絡改修工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』吉備町教育委員会

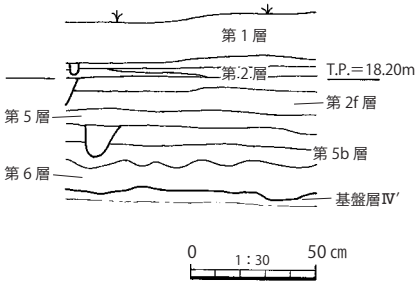
藤井保夫・渋谷高秀他　1985『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書―海南湯浅道路に伴う関連遺跡発掘調査―』和歌山県教育委員会

井石好裕他　1995『藤並地区遺跡発掘調査報告書― 一般国道42号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査―』（財）和歌山県文化財センター

2005『吉備町の文化財』吉備町教育委員会

川口修実・佐々木宏治　2008『旧吉備中学校校庭遺跡―有田川町公共下水処理施設建設に伴う発掘調査報告１―』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書　第１集　有田川町遺跡調査会

川口修実　2008『藤並地区遺跡―町道吉備インター連絡線改修工事に伴う発掘調査―』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書　第２集　有田川町遺跡調査会



第1層　耕作土
第2層　床土、旧耕作土
2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
～ 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
第2f層　2.5Y6/1 ～ 5/1 黄灰色粘質シルト
第5層　2.5Y5/1 ～ 4/1 黄灰色粘質シルト
第5b層　10TR5/1 ～ 4/1 褐灰色粘質シルト
第6層　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
基盤層Ⅳ′　2.5Y5/4 黄褐色細砂・微砂

図７　2006-Ⅱ区　基本土層　調査区北壁断面土層

図８　2006-Ⅱ区　基本土層
調査区南壁断面土層

第1層　耕作土
第2層　床土、2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
第3層　10YR5/1 褐灰色（粘質）シルト
第4層　2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
第5層　2.5Y5/1 ～ 4/1 黄灰色粘質シルト
基盤層Ⅱ　7.5GY5/1 緑灰色粘質シルト
基盤層Ⅲ　10BG5/1 青灰色粘質シルト

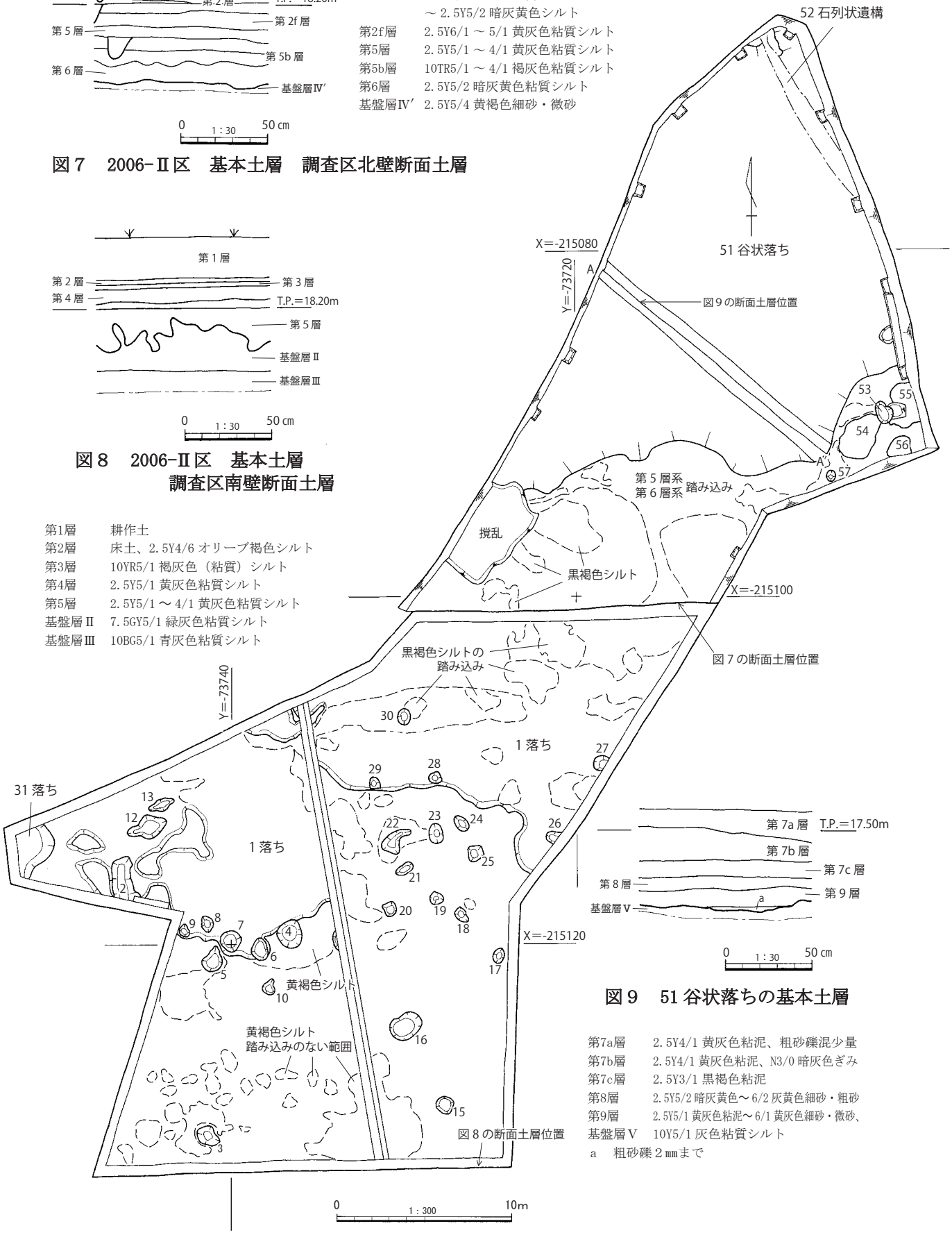


図９　51 谷状落ちの基本土層

第7a層　2.5Y4/1 黄灰色粘泥、粗砂礫混少量
第7b層　2.5Y4/1 黄灰色粘泥、N3/0 暗灰色ぎみ
第7c層　2.5Y3/1 黒褐色粘泥
第8層　2.5Y5/2 暗灰黄色～ 6/2 灰黄色細砂・粗砂
第9層　2.5Y5/1 黄灰色粘泥～ 6/1 黄灰色細砂・微砂、
基盤層Ⅴ　10Y5/1 灰色粘質シルト
a　粗砂礫２㎜まで

図６　2006-Ⅱ区　調査遺構全体図

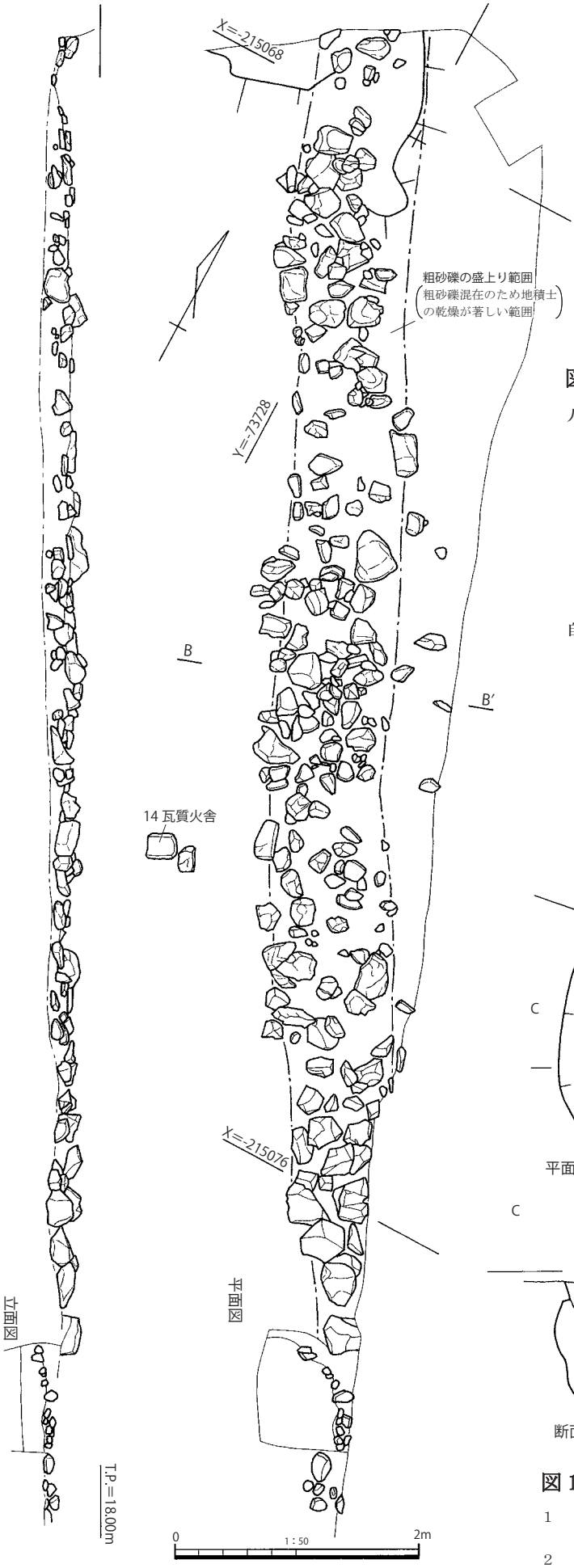


図 10　2006-Ⅰ区　52 石列状遺構実測図

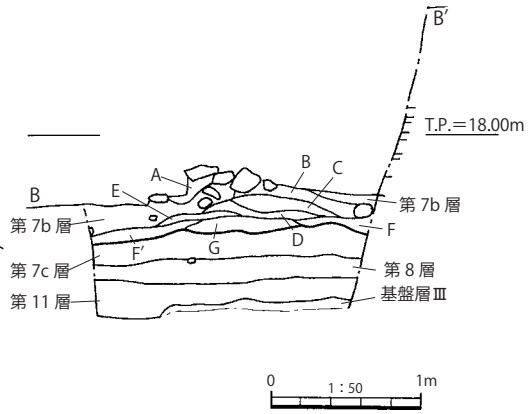


図 11　2006-Ⅰ区　52 石列状遺構断面土層図

人為的埋土

A　2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
B　2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂礫
C　2.5Y4/3 オリーブ褐色～ 5/6 黄褐色粗砂礫
D　2.5Y4/1 黄灰色粘泥、粗砂礫多量混
E　Dに類似、粗砂礫極多量混
F　2.5Y4/1 黄灰色粘泥、2.5Y2/1 黒褐色粘泥混在粗砂礫少量混
F′　基本的にFと同じ、粗砂礫中量混
G　2.5Y2/1 黒色～ 3/1 黒褐色粘泥

自然堆積層

第７ｂ層　2.5Y4/1 黄灰色粘泥、N3/0 暗灰色ぎみ
第７ｃ層　2.5Y3/1 黒褐色粘泥
第８層　2.5Y5/2 暗灰黄色～ 6/2 灰黄色細砂・粗砂
第 11 層　2.5Y2/1 黒色～ 3/1 黒褐色粘質シルト
基盤層Ⅲ　10ＢＧ5/1 青灰色粘質シルト

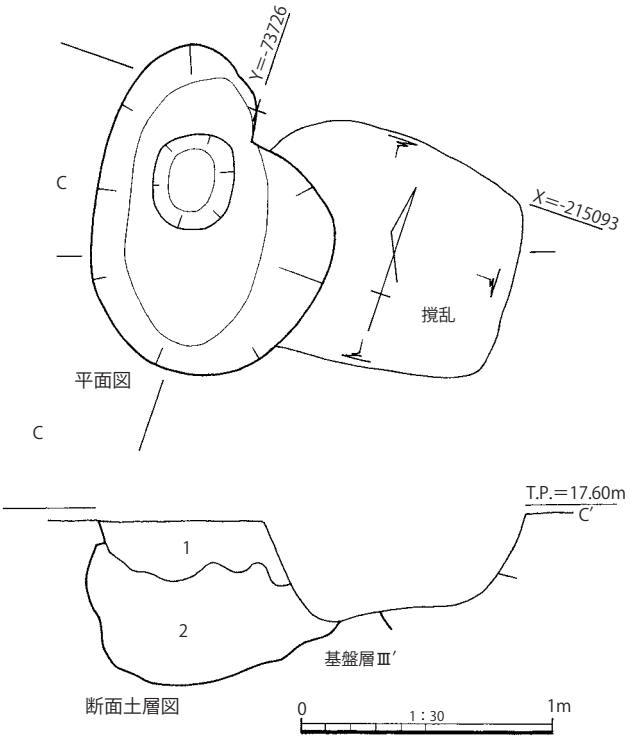


図 12　2006-Ⅰ区　53 粘土採掘土坑実測図

1　2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
　2.5Y2/1 黒色粘質シルト・基盤層Ⅲ小ブロック少量混
2　基盤層Ⅲの中に、１の大中小ブロック多量混
基盤層Ⅲ′　５Ｙ6/1 灰色粘質シルト

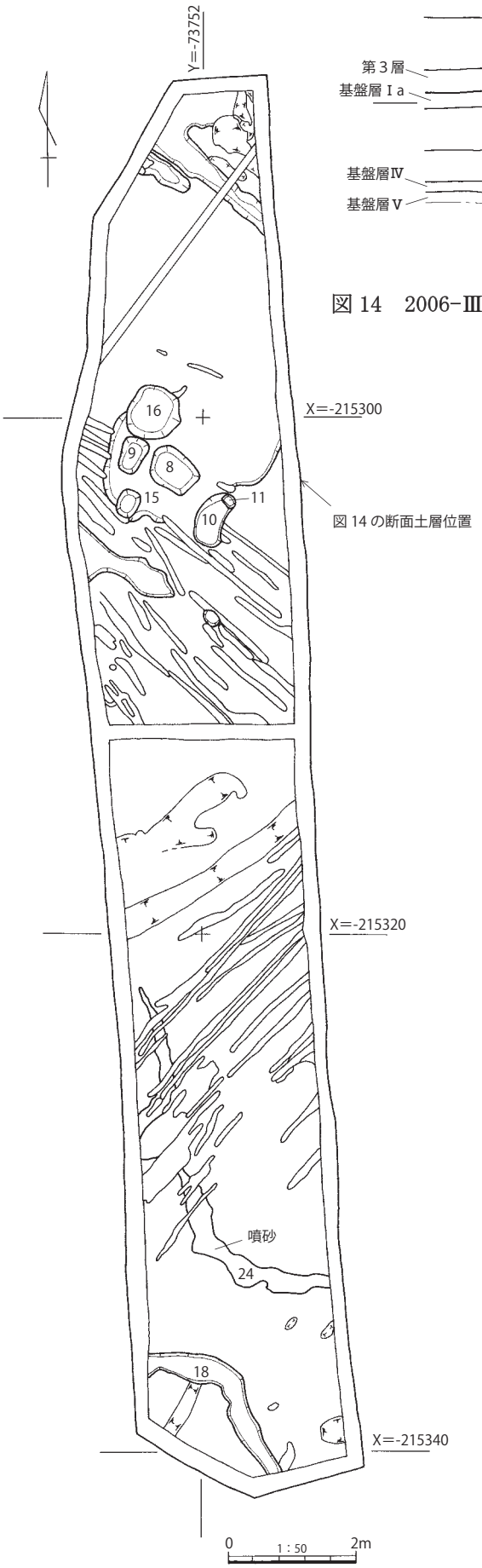
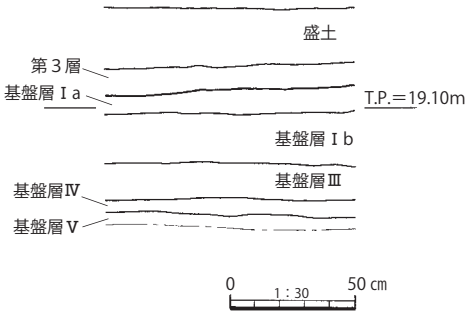


図 13　2006-Ⅲ区　調査遺構全体図



盛土　　山ズレ
第３層　2.5Y5/1 黄灰色シルト
基盤層Ⅰa　10YR5/6 黄褐色粘質シルト
基盤層Ⅰb　10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
基盤層Ⅲ　10YR4/1 褐灰色粘質シルト
基盤層Ⅳ　10YR5/1 褐灰色粘質シルト
基盤層Ⅴ　５BG6/1 青灰色細砂・粗砂

図 14　2006-Ⅲ区　基本土層　調査区東壁断面土層

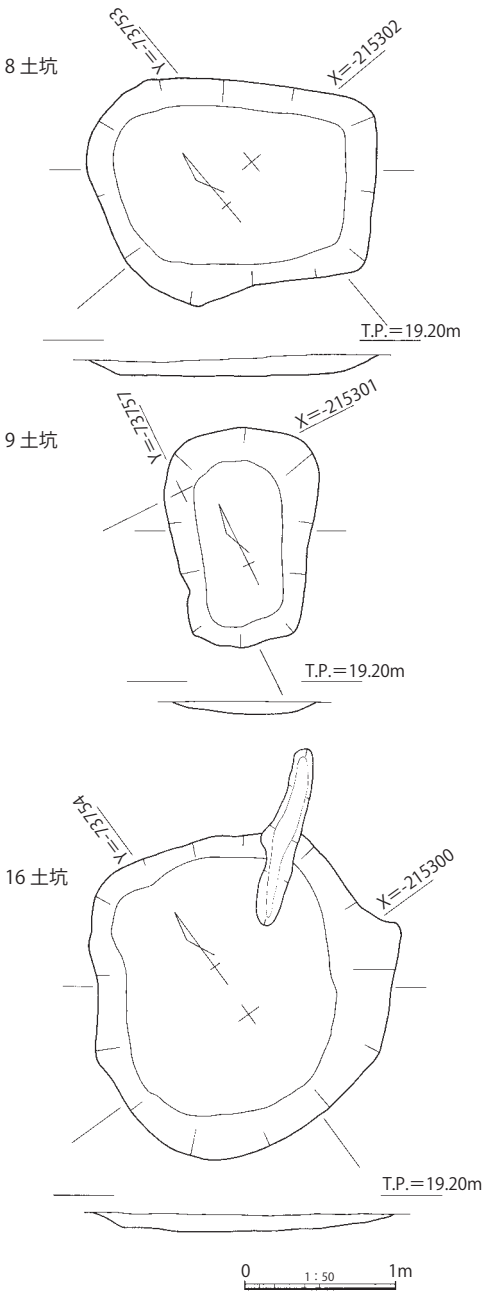


図 15　2006-Ⅲ区　各土坑実測図

8 土坑　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト
9 土坑　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト
16 土坑　10YR6/1 褐灰色粘質シルト

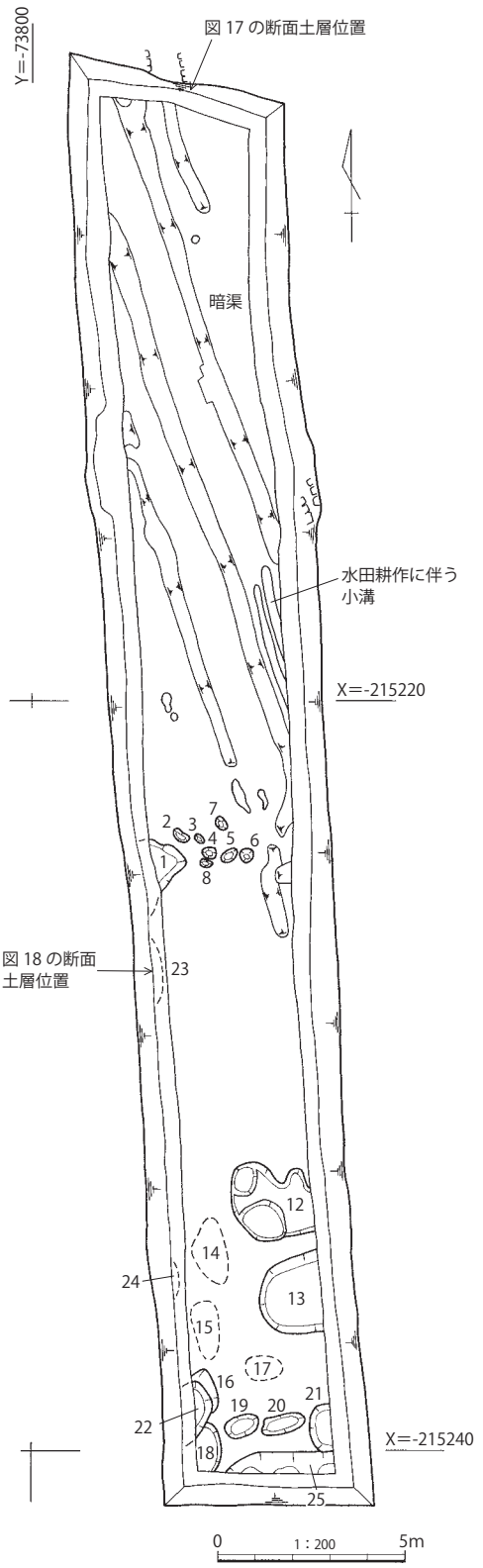


図 16　2007-Ⅰ区　調査遺構全体図

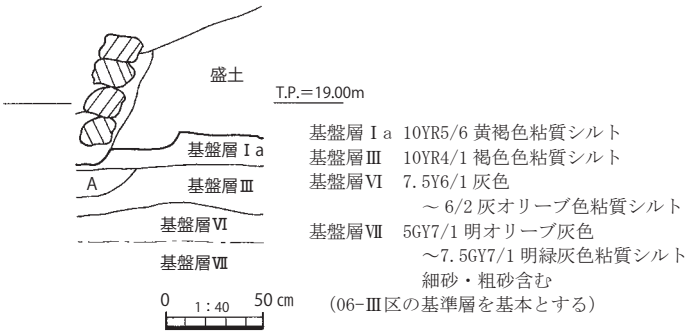


図 17　2007-Ⅰ区　基本土層　調査区北壁断面土層

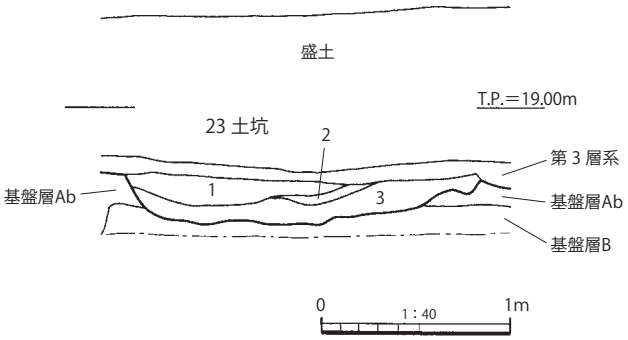
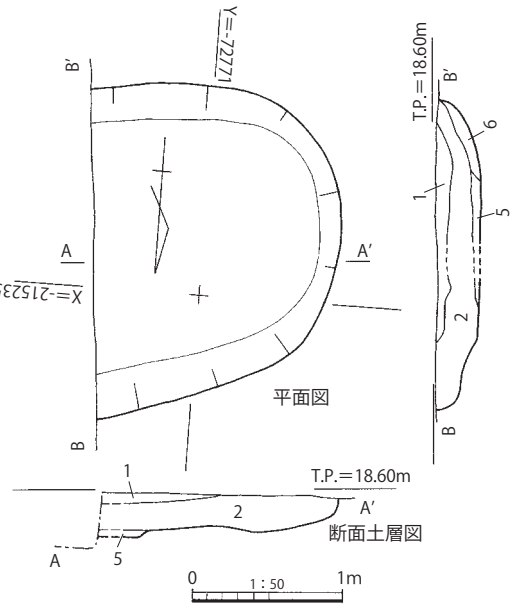


図 18　2007-Ⅰ区　23 土坑調査区西壁断面土層

基盤層Ａ　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト
2.5Y5/1 黄褐色粘質シルト
混在
基盤層Ａb　基盤層Ａに
10YR5/1 褐灰色粘質シルト縦筋状に多量
基盤層Ｂ　2.5Y6/1～5/1 黄灰色シルト
23 土坑
1　人為　10YR3/1 黒褐色粘質シルト中大ブロック極多量
2　自然　10YR3/2 黒褐色シルト
3　人為　10YR2/1 黒色粘質シルト中大ブロック極多量



1　人為　10YR5/1 褐灰色シルト
～10YR6/2 灰黄褐色シルト
2　人為　10YR6/1・10YR4/1 褐灰色シルト中大ブロック多量
10YR2/1 黒色シルト小中ブロック少量
10YR5/6 黄褐色・10YR4/6 褐色シルト中大ブロック中量
5　自然　2.5Y6/1 黄灰色シルト
6　自然　2.5Y6/1 黄灰色シルト、基盤層Ｂ中大ブロック多量

図 19　2007-Ⅰ区　13 土坑実測図

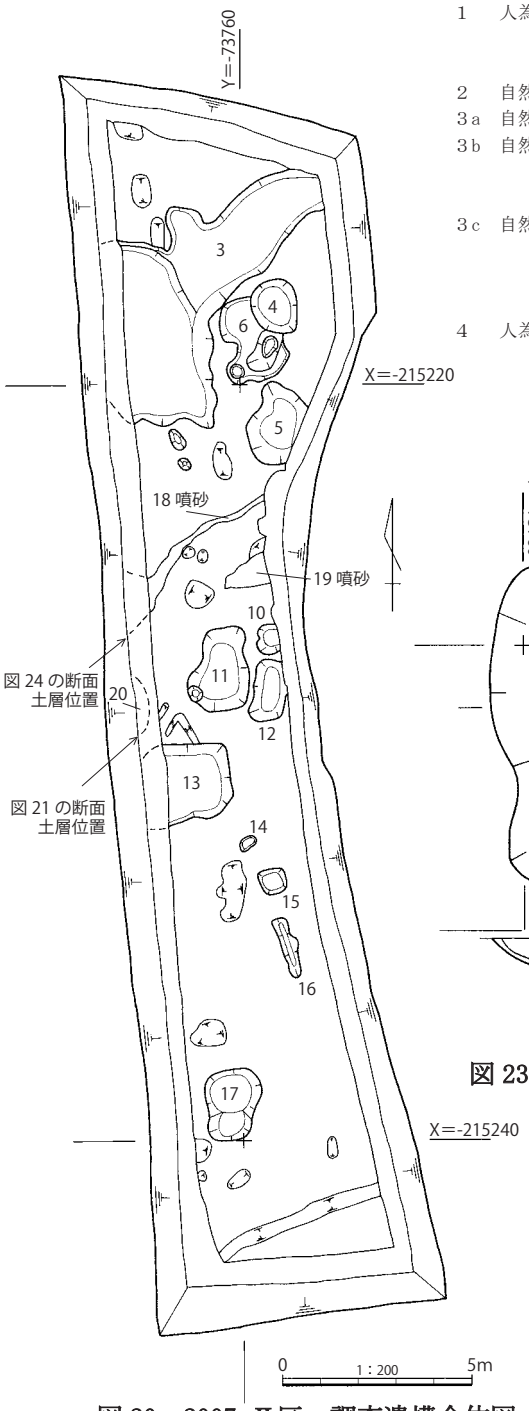


図 20　2007-Ⅱ区　調査遺構全体図

1　人為　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
10YR5/6 黄褐色シルト（基盤層Ⅰa）
中大ブロック多量
2　自然　10YR5/1 褐灰色粘泥　N3/0 暗灰色ぎみ
3a　自然　10YR5/1 褐灰色粘泥
3b　自然・人為撹拌　3a に 2.5Y7/3 浅黄色～2.5Y5/3 黄褐色細砂混シルト
小ブロック中量
3c　自然・人為撹拌　10YR5/1 褐灰色粘泥
10YR3/1 黒褐色粘泥
2.5Y7/3 浅黄色細砂混シルト
ブロック状
4　人為　1に3bと 10YR3/1 黒褐色シルト
中大ブロック混在

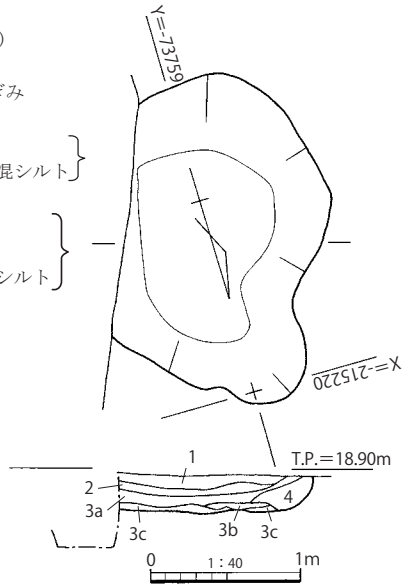


図 22　2007-Ⅱ区　5 土坑実測図

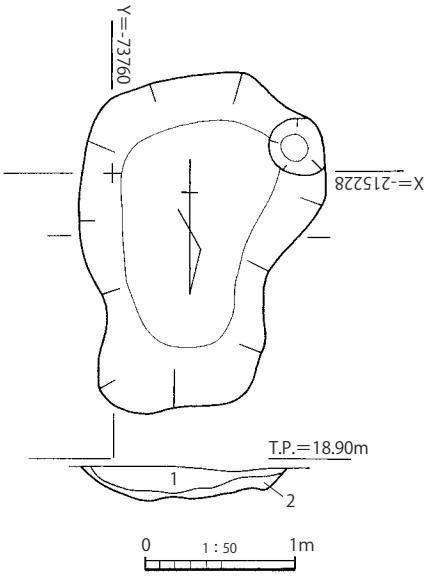


図 23　2007-Ⅱ区　11 土坑実測図

1　人為　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
2.5Y7/6 明黄褐色シルト
ブロック多量
2　人為　2.5Y5/1 黄灰色シルト
基盤層 A ブロック混在

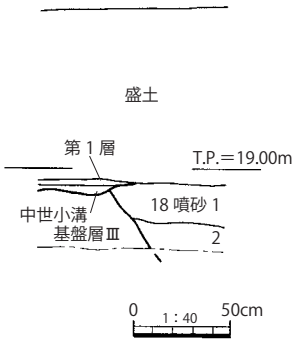
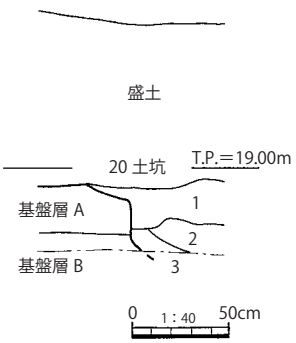


図 24　2007-Ⅲ区　18 噴砂と中世小溝の関係
調査区西壁断面土層

第 1 層　耕作土
第 3 層系　中世小溝
2.5Y5/1 黄灰色シルト
基盤層Ⅲ　10YR4/1 褐灰色粘質シルト
（Ⅰ区北壁と同じ）

18 噴砂
1　2.5Y7/1 灰白色～7/2 灰黄色細砂
下半は、10YR5/4 にぶい黄褐色細砂・粗砂
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫
礫 5 ㎜まで
～7.5YR4/4 褐色細砂・粗砂



基盤層 A　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルト　混在
2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
中大ブロック多量
基盤層 B　2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト
10YR5/6 黄褐色粘質シルト粒
3～5 ㎜極多量

20 土坑
1　人為　10YR2/1 黒色粘質シルト
上半に 10YR5/6 黄褐色～4/6 褐色シルト
小中ブロック少量
2　人為　基盤層 B 撹拌状態に 1 の中大ブロック多量
3　自然　10YR5/1 褐灰色シルト、N5/0 灰色ぎみ

図 21　2007-Ⅱ区　基本土層　調査区西壁断面土層

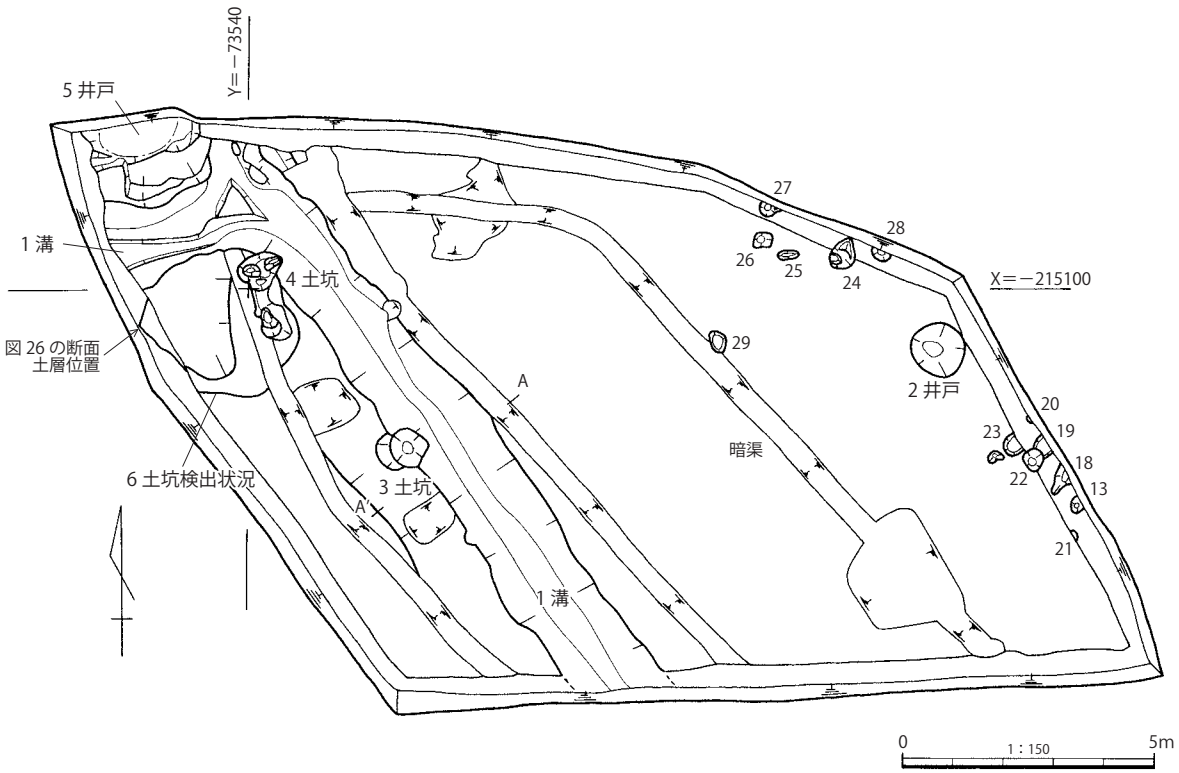
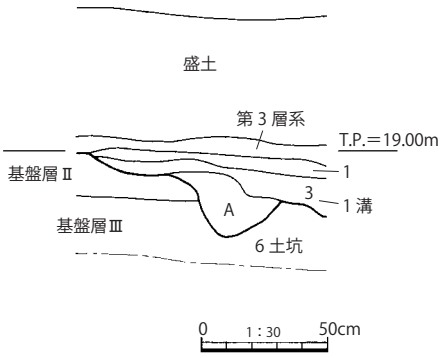


図 25　2007-Ⅲ区　調査遺構全体図



第 3 層系　2.5Y6/2 灰黄色～ 10YR6/2 灰黄褐色シルト

1 溝

1　10YR6/1 褐灰色～ 6/2 灰黄褐色シルト

3　10YR5/2 灰黄褐色（弱砂質）シルト、細砂多量

6 土坑

A　図 28 の 7 に該当　10YR4/1 褐灰色シルト

基盤層Ⅰ　（北東壁：10YR4/1 褐灰色～ 3/1 黒褐色粘質シルト
基盤層Ⅱ中大ブロック多量）

基盤層Ⅱ　10YR6/6 明黄褐色～ 6/4 にぶい黄橙色シルト

基盤層Ⅲ　7.5YR5/8 明褐色～ 10YR 4/6 褐色ぎみシルト

図 26　2007-Ⅲ区　基本土層　調査区南西壁断面土層

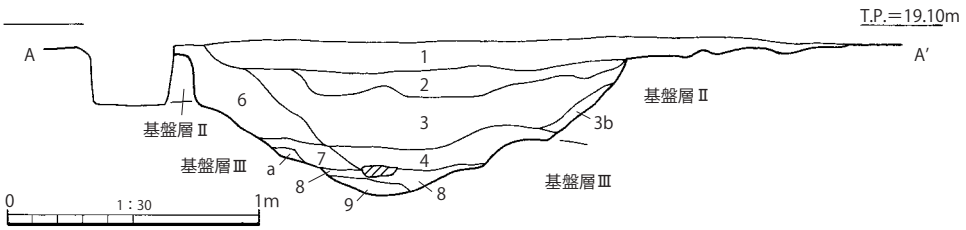


図 27　2007-Ⅲ区　1 溝断面土層図

1　10YR6/1 褐灰色～ 6/2 灰黄褐色シルト

2　10YR5/2 灰黄褐色弱粘質シルト

3　10YR5/2 灰黄褐色（弱砂質）シルト
10YR3/1 黒褐色粘質シルト小中ブロック少量

3 b　3 に基盤層Ⅱ小ブロック多量

4　10YR5/1 褐灰色粘質シルト

5　（南西壁：10YR5/2 灰黄褐色～ 5/3 にぶい黄褐色細砂）

6　人為　10YR3/1 ～ 3/2 黒褐色粘質シルト
7.5 YR4/4 褐色シルト小ブロック少量

7　10YR4/1 褐灰色粘質シルト

a　7 ＋基盤層Ⅲ・粗砂礫

8　自然　10YR5/1 褐灰色粘質シルト

9　自然　7.5YR5/6 ～ 5/8 明褐色粗砂礫、礫 3 ～ 5 ㎜ 多量

基盤層Ⅱ・Ⅲは、図 26 に同じ

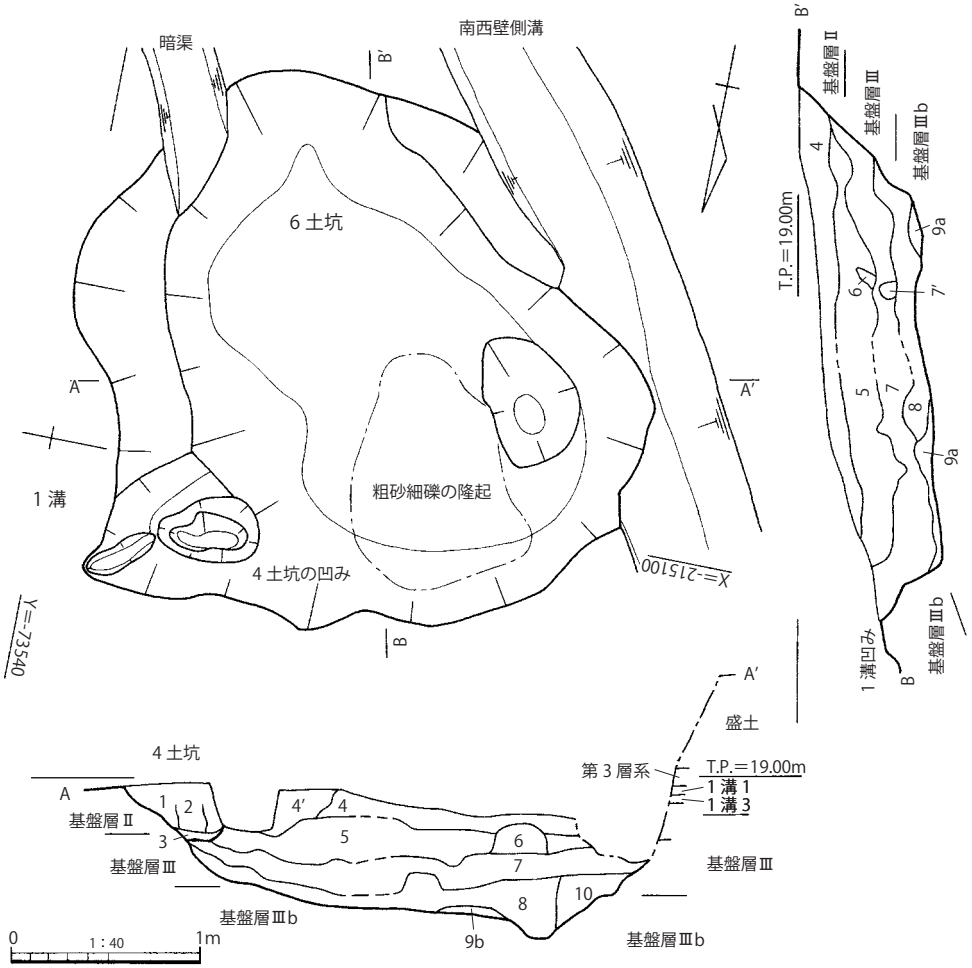


図 28　2007-Ⅲ区　6 土坑実測図

6土坑

4　10YR5/6 黄褐色シルト

4´　4の 10YR3/3 暗褐色ぎみ

5　7.5YR5/6 明褐色シルト　10YR4/6 褐色ぎみ
　基盤層Ⅲに類似

6　10YR5/6 黄褐色粗砂礫混シルト、礫３～４㎜まで
　10YR4/6 褐色ぎみ

7　10YR4/1 褐灰色シルト、基盤層Ⅲ中大ブロック多量
　10YR3/1 黒褐色シルト小ブロック少量

7´　粗砂礫ブロック

8　10YR3/1 ～ 3/2 黒褐色シルトまだら
　基盤層Ⅲ中大ブロック多量

9a　10YR5/6 黄褐色・5/1 褐灰色細粗砂、礫３～５㎜少量

9b　10YR5/2 ～ 4/2 灰黄褐色粗砂礫、礫１～３ｃｍ角礫まで

10　基盤層Ⅲ＋10YR5/1 褐灰色シルト中ブロック少量
　10YR3/1 黒褐色シルト中ブロック微量

4土坑

1　10YR5/6 黄褐色～ 5/2 灰黄褐色シルトまだら

2　10YR3/3 暗褐色～ 3/2 黒褐色シルト
　基盤層Ⅱ小ブロック中量

3　10YR4/1 褐灰色シルト
　基盤層Ⅲ中大ブロック少量

基盤層Ⅱ　10YR6/6 明黄褐色～ 6/4 にぶい黄橙色シルト

基盤層Ⅲ　7.5YR5/8 明褐色～ 10YR 4/6 褐色ぎみシルト

基盤層Ⅲb　7.5YR5/8 明褐色～ 10YR 4/6 褐色ぎみ細砂シルト

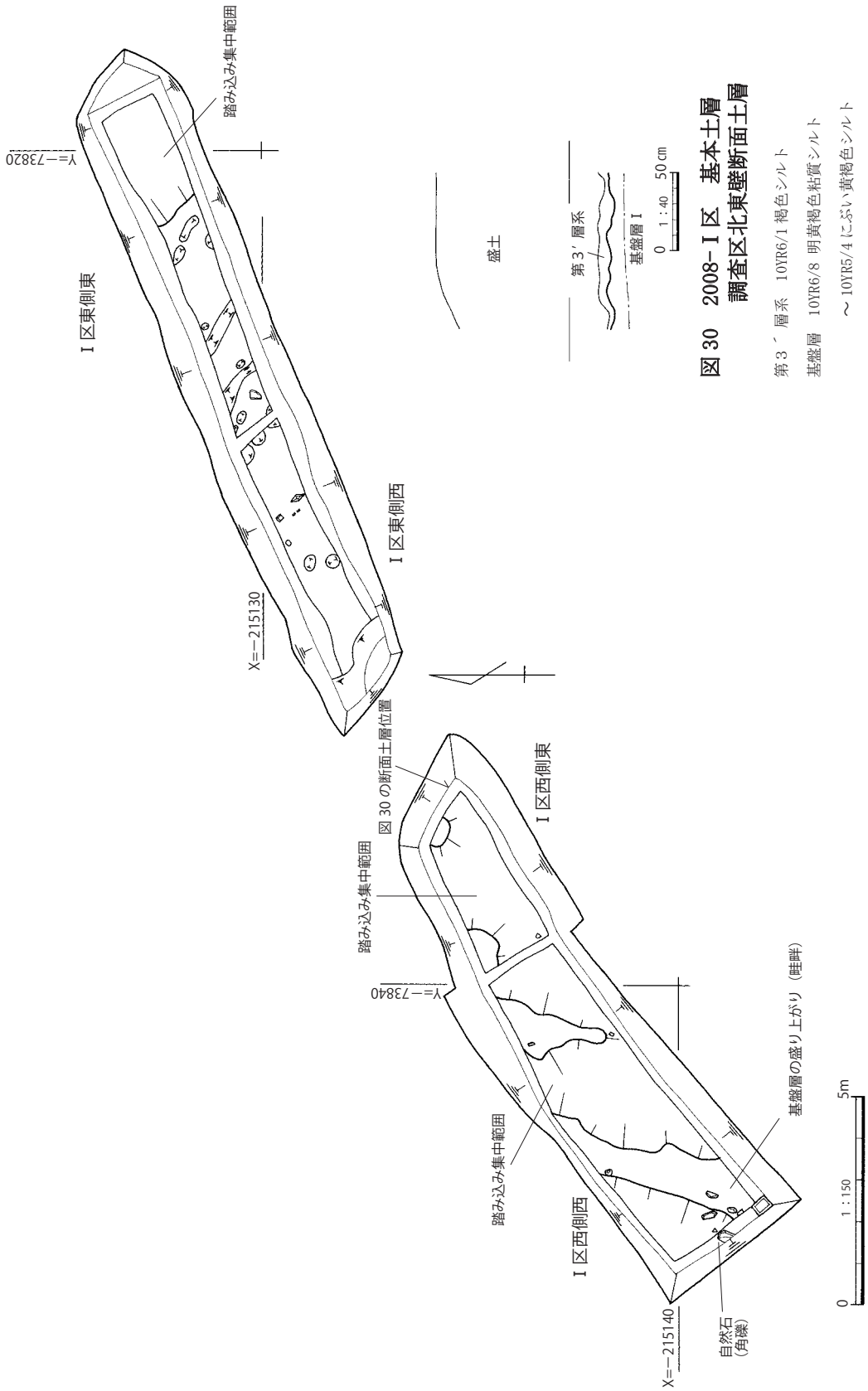


図 29　2008-Ⅰ区　調査遺構全体図

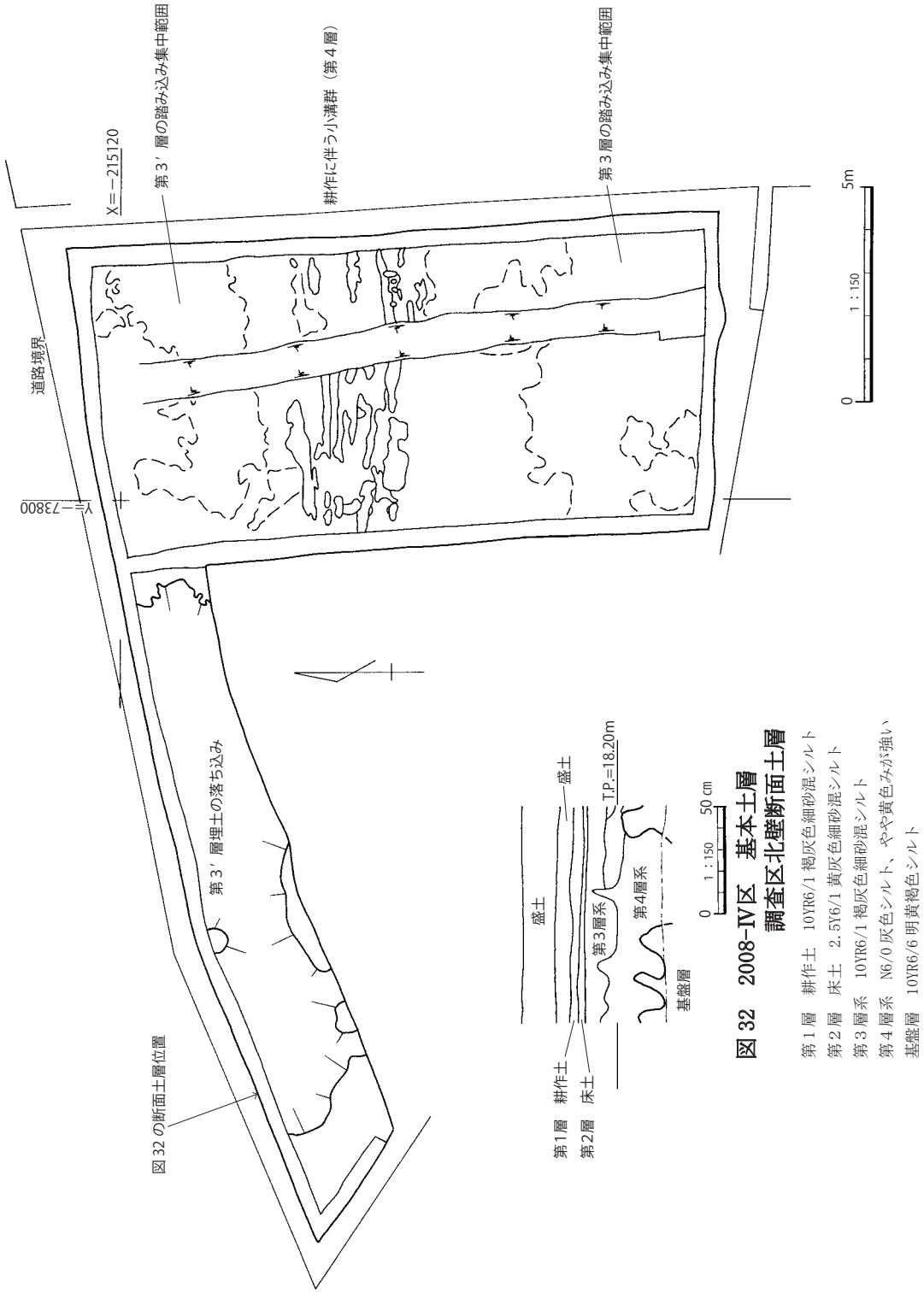


図31　2008-Ⅳ区　調査遺構全体図

図 34　2008-Ⅵ区　基本土層
調査区南東壁断面土層

第１層　耕作土　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
第２層　床土　10YR6/8 明黄褐色
～5/8 黄褐色砂質シルト
第３層系　10YR5/1 褐灰色シルト
～2.5Y5/1 黄灰色シルト
部分的に 10YR4/1 褐灰色を呈する
粗砂細礫φ2～5㎜主体中量含む
φ20㎜まで亜角礫主体
第４層系　黒褐色土踏み込み　N4/0 灰色～
明灰色粘質シルト小中ブロック多量
基盤層Ⅰの小ブロック少量
基盤層Ⅰ　2.5Y6/2 灰黄色
～6/3 にぶい黄色砂質シルト
基盤層Ⅲ　2.5Y6/1～5/1 黄灰色砂質シルト

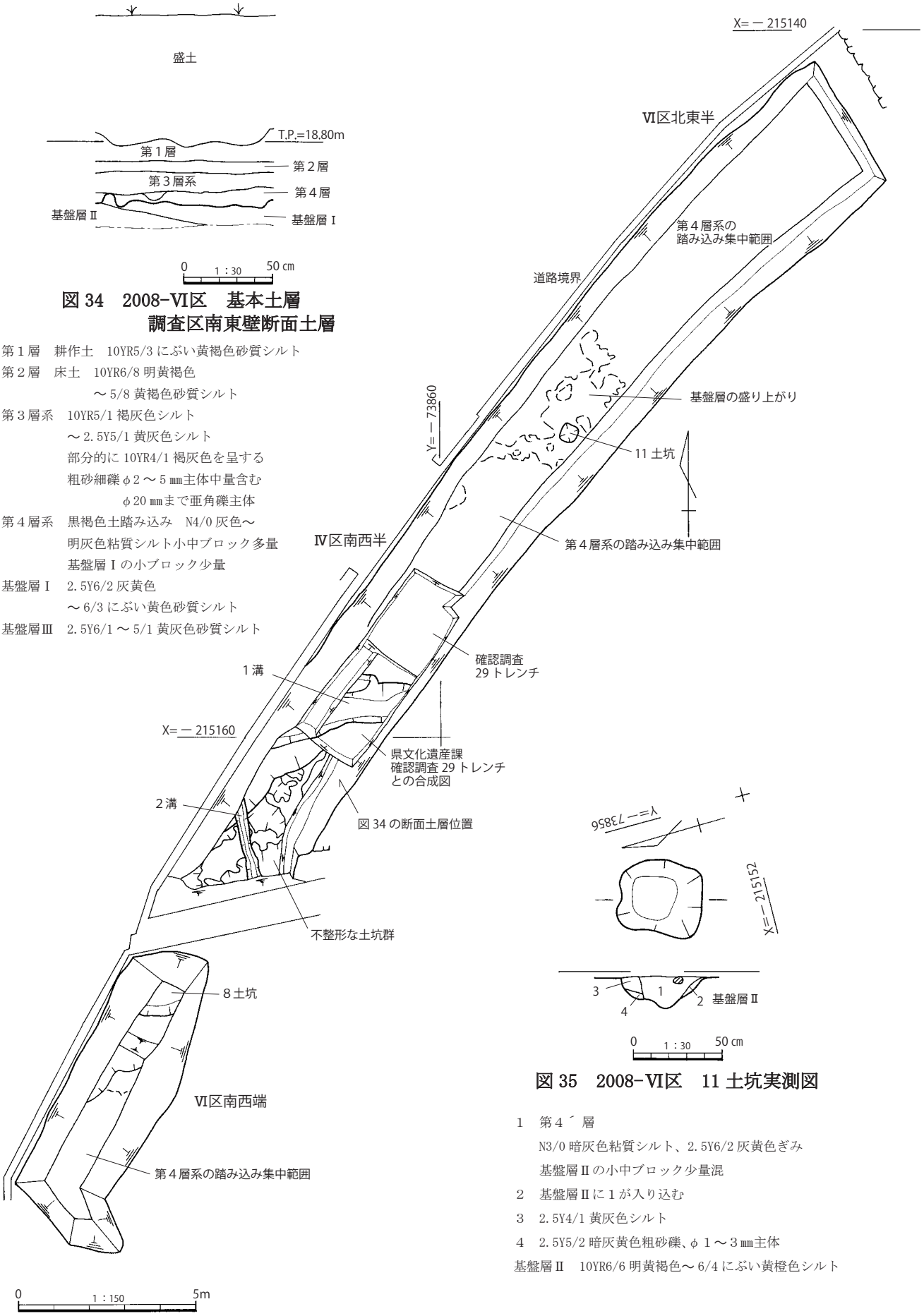


図 33　2008-Ⅵ区　調査遺構全体図

図 35　2008-Ⅵ区　11 土坑実測図

1　第４´層
N3/0 暗灰色粘質シルト、2.5Y6/2 灰黄色ぎみ
基盤層Ⅱの小中ブロック少量混
2　基盤層Ⅱに１が入り込む
3　2.5Y4/1 黄灰色シルト
4　2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂礫、φ１～３㎜主体
基盤層Ⅱ　10YR6/6 明黄褐色～6/4 にぶい黄橙色シルト

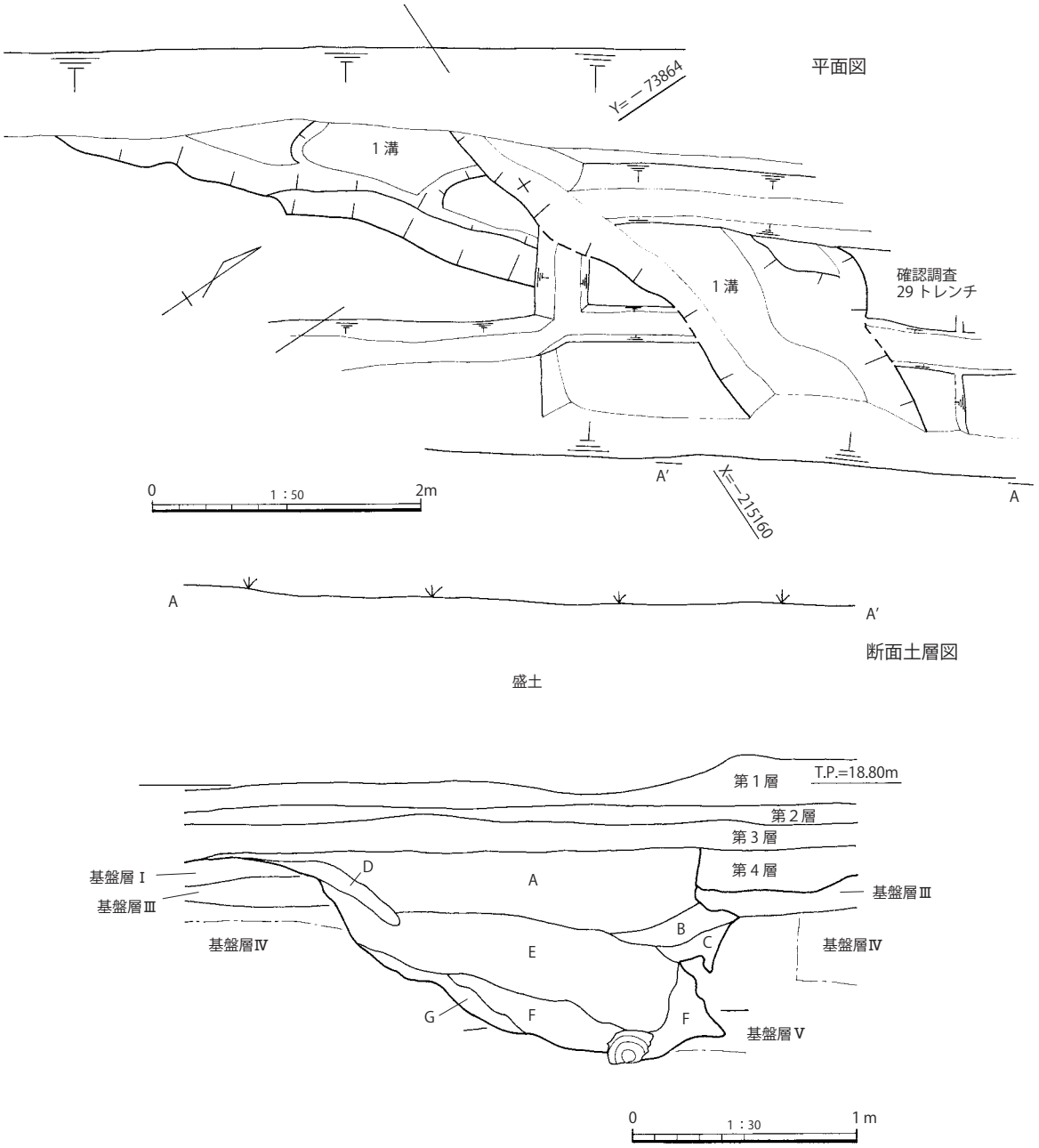


図 36　2008-Ⅵ区　１溝実測図

１溝

※全体に、2.5Y5/2 暗灰黄色ぎみを呈する、礫は殆んど皆無に等しい

A　N3/0 暗灰色～ 2/0 黒色粘泥
　5GY6/1 オリーブ灰色シルト小ブロック微量
　2.5Y6/1 黄灰色シルト小ブロック少量

B　A と N4/0 灰色細砂混シルト縞状に埋積する、細かい木屑が中量混じる

C　基盤層Ⅳに N3/0 暗灰色～ 2/0 黒色粘泥が入り込む、木屑が中量混じる

D　基盤層Ⅲに極めて類似する

E　7.5YR4/3 褐色砂泥（N3/0 暗灰色に変色）
　細かい木屑（木っ葉）極めて多量、腐った有機質状態
　φ３～５㎝の短寸の自然木少量・断面に対して直交するものが多い
　上端 15 ㎝層厚は、３～５㎜の縞状の層を成して木屑層が埋積する
　各木屑層間に細砂層が入り込む

F　基本的に C の逆転
　木屑中量、N3/0 暗灰色～ 2/0 黒色粘泥に基盤層Ⅳ中大ブロック少量入り込む

G　5Y6/1 灰色粘泥と 2.5Y5/1 黄灰色細砂が縞状に埋積する

第１層　耕作土　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト

第２層　床土　10YR6/8 明黄褐色～ 5/8 黄褐色砂質シルト

第３層系　10YR5/1 褐灰色シルト～ 2.5Y5/1 黄灰色シルト
　部分的に 10YR4/1 褐灰色を呈する
　粗砂細礫φ２～５㎜主体中量含む
　φ20 ㎜まで亜角礫主体

第４層系　N4/0 灰色～明灰色粘質シルト小中ブロック多量
　基盤層Ⅰの小ブロック少量

基盤層Ⅰ　2.5Y6/2 灰黄色～ 6/3 にぶい黄色砂質シルト

基盤層Ⅲ　2.5Y6/1 ～ 5/1 黄灰色砂質シルト

基盤層Ⅳ　10G6/1 ～ 5/1 緑灰色砂質シルト

基盤層Ⅴ　基盤層Ⅳに細・粗砂多量入る

Y=－73760

Ⅱ区西側

41

図 39 の断面土層位置

確認調査
12 トレンチ

掘立柱建物 1

Y=－73740

10 遺構

図 38 の範囲

Ⅰ区東側

第 4 層系遺物包含層の範囲

X=－215180

26

25

24

23

4

5

12

11

確認調査
18 トレンチ

21 土坑

22

7

6

2

8

3

補足調査の位置

0　1：200　10m

図 37　2008-Ⅱ区　調査遺構全体図

X=－215200

Y=－73748

X=－215172

0　1：200　3m

図 38　2008-Ⅱ区　第 3 層系包含層
下面遺構

盛土

第 3 層系

T.P.=19.00m

第 4 層系

基盤層Ⅰ

基盤層Ⅲ

0　1：30　50 ㎝

図 39　2008-Ⅱ区　基本土層
調査区北壁断面土層

第 3 層系　10YR5/2 灰黄褐色シルト

第 4 層系　10YR6/2 灰黄褐色シルト

基盤層Ⅰ　10YR5/6 黄褐色シルト

基盤層Ⅲ　10YR5/6 黄褐色微砂混シルト

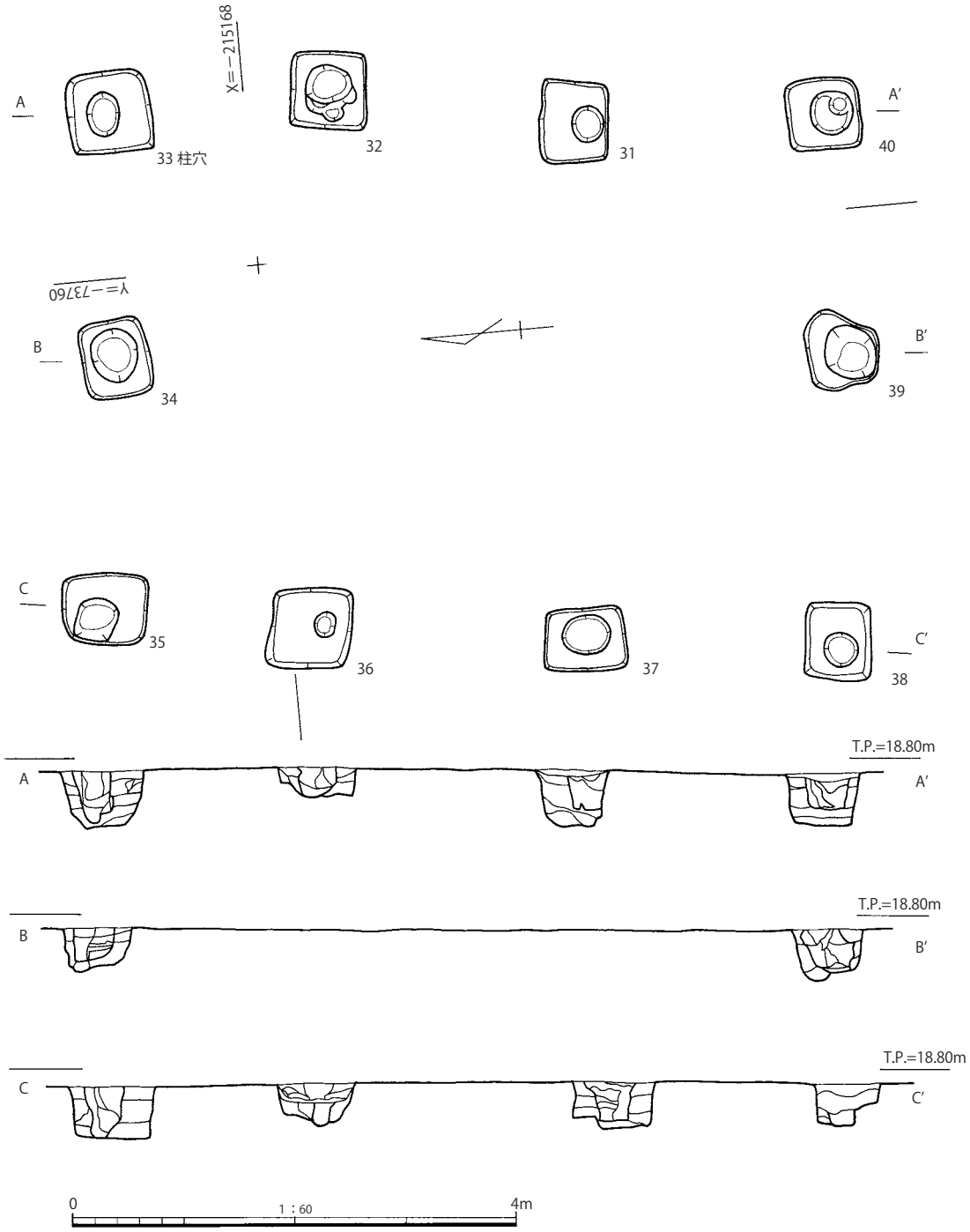
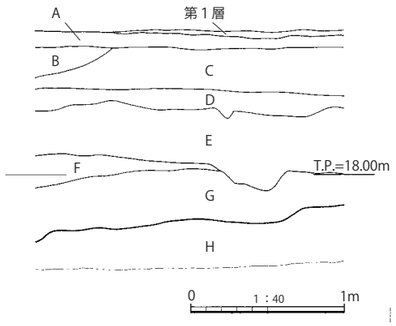


図 40　2008-Ⅱ区　掘立柱建物 1 実測図



補足調査Bの位置(写真図版31－２に対応)
第１層　耕作土
A　7.5YR6/8橙色～5/8明褐色粘質シルト(基盤層Ⅱ´+褐色粒)
A-C層界　暗褐色粒が西側に進むにつれ減少し、層界が明確でなくなる
B　10YR5/4にぶい黄褐色粗砂礫、粗砂主体、礫φ１～３㎜中量・４～５㎜少量
C　基盤層Ⅱ´に類似するが、7.5YR5/8明褐色シルト、10YR4/4～4/6褐色シルトぎみ
D　変な色の粘質シルト、2.5Y5/1～4/1黄灰色シルト
E　10YR6/4にぶい黄橙色～10YR6/6明黄褐色シルト
F　旧石器遺物を包含する、7.5Y4/2灰オリーブ粗砂礫
G　旧石器遺物を包含する、2GY3/1暗オリーブ灰色粗砂礫
当該地点33m以西は、10YR5/6黄褐色+4/6褐色+5/1褐灰色粗砂礫
H　N4/0灰色粘泥、砂礫を含まない
上半約20cmは上位層に影響されて変色2.5Y4/3オリーブ褐色

図 42　2008-Ⅶ区　基本土層 調査区南壁断面土層

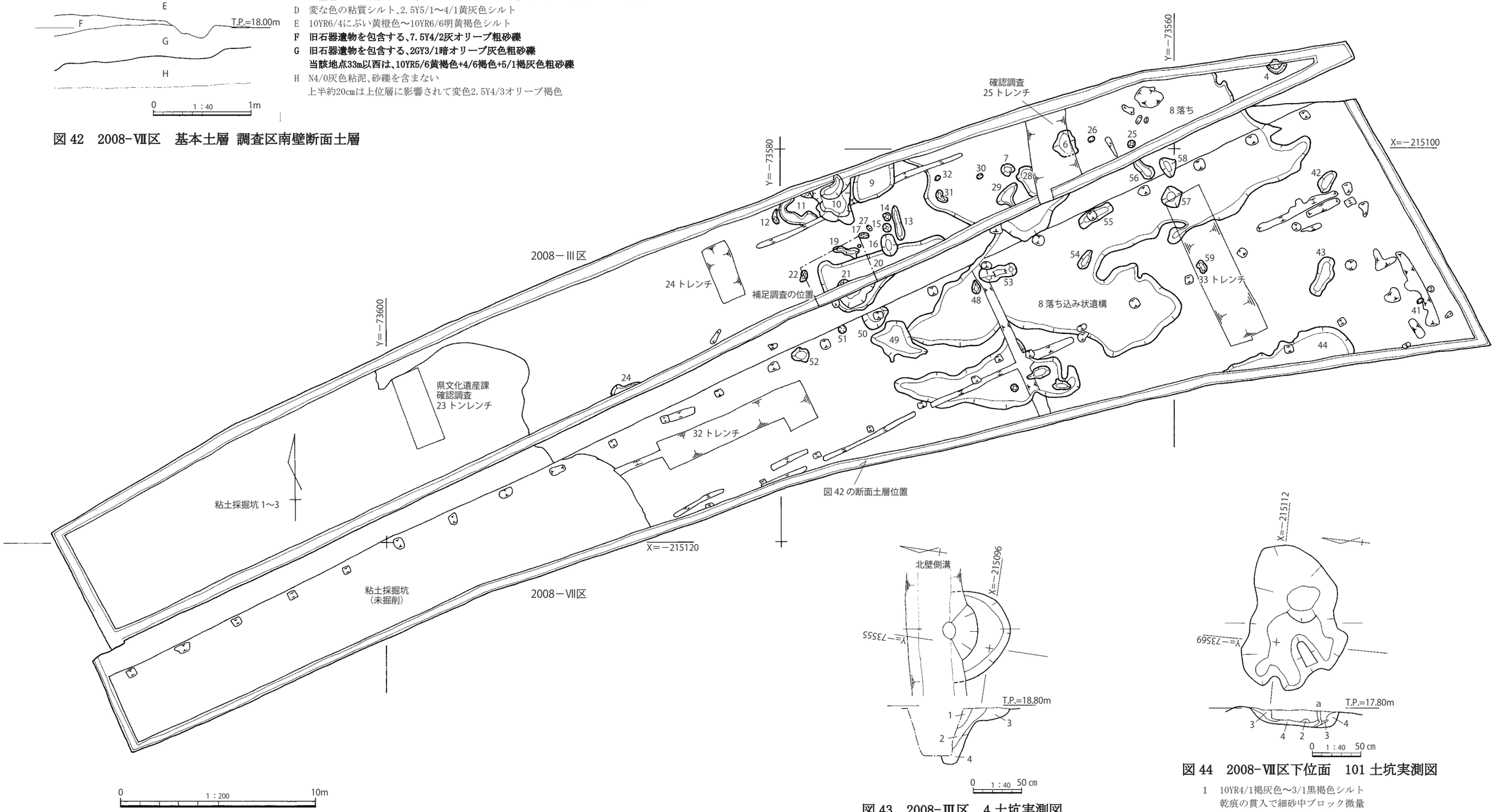


図 41　2008-Ⅲ区　Ⅶ区上位層　調査遺構全体図

図 43　2008-Ⅲ区　４土坑実測図

1　10YR5/2灰黄褐色シルト
2　10YR3/2黒褐色シルト
3　10YR5/2灰黄褐色シルト
4　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
１～４共に、基盤層Ⅲ黄褐色シルトをブロック状に含む

図 44　2008-Ⅶ区下位面　101 土坑実測図

1　10YR4/1褐灰色～3/1黒褐色シルト
乾痕の貫入で細砂中ブロック微量
2　5GY5/1オリーブ灰色細砂混シルト
3　10G5/1緑灰色～4/1暗緑灰色粗砂細礫、φ１～５㎜主体
4　基盤層灰色粘泥に細砂少量入り込む
a　乾痕　5Y灰色細砂・粗砂

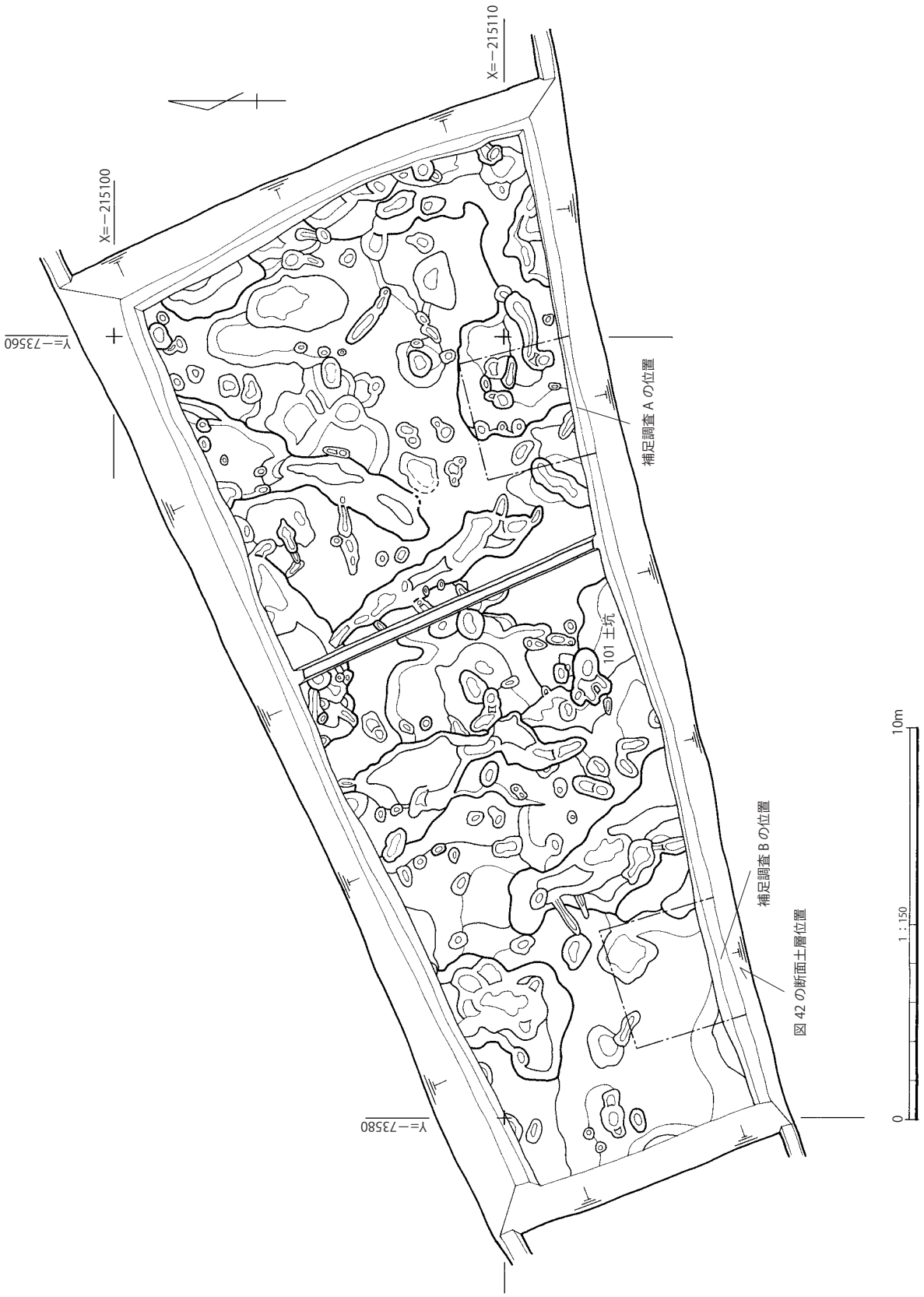


図 45　2008-Ⅶ区下位面　調査遺構全体図

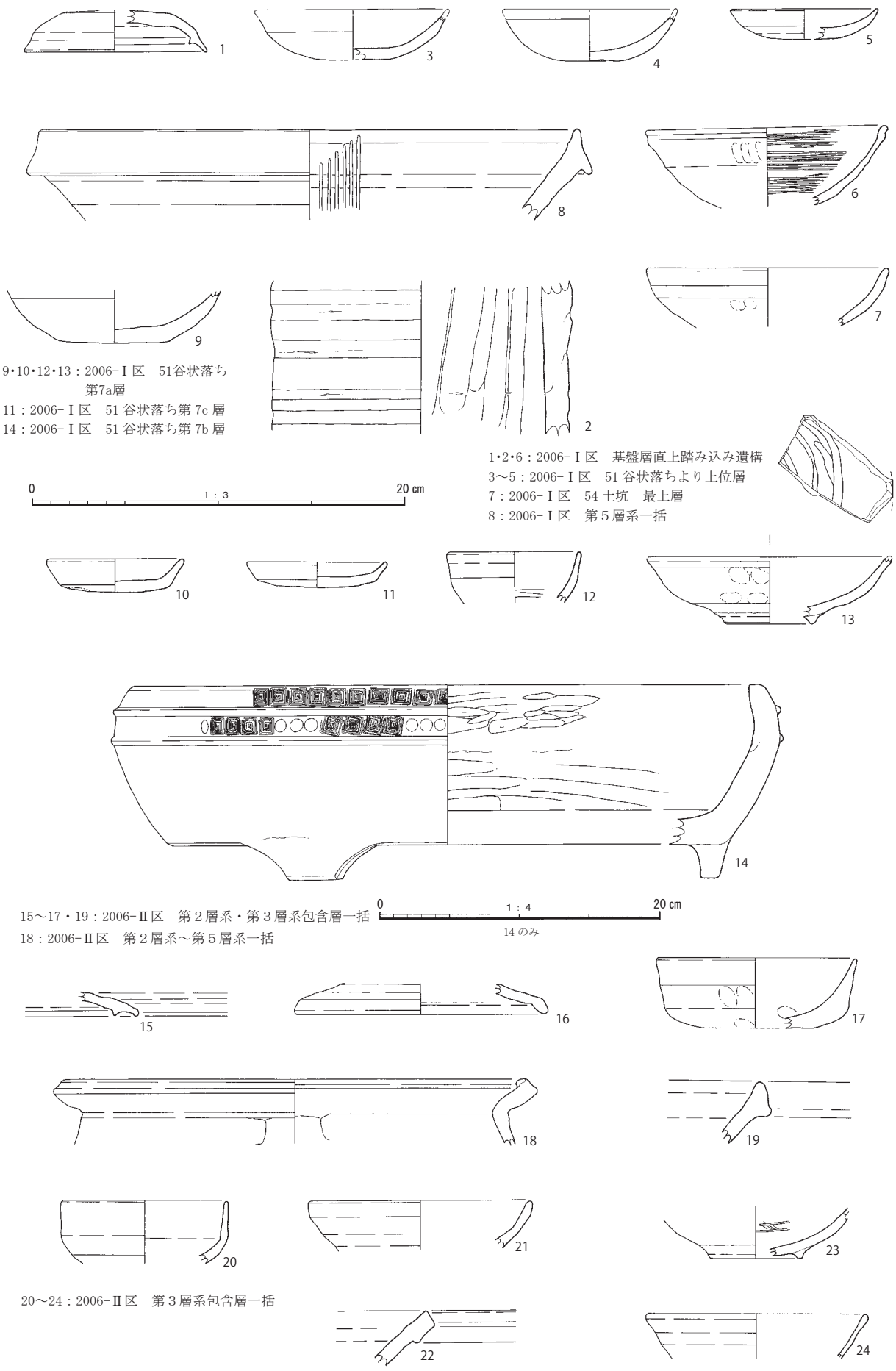


図 46　出土遺物実測図 1

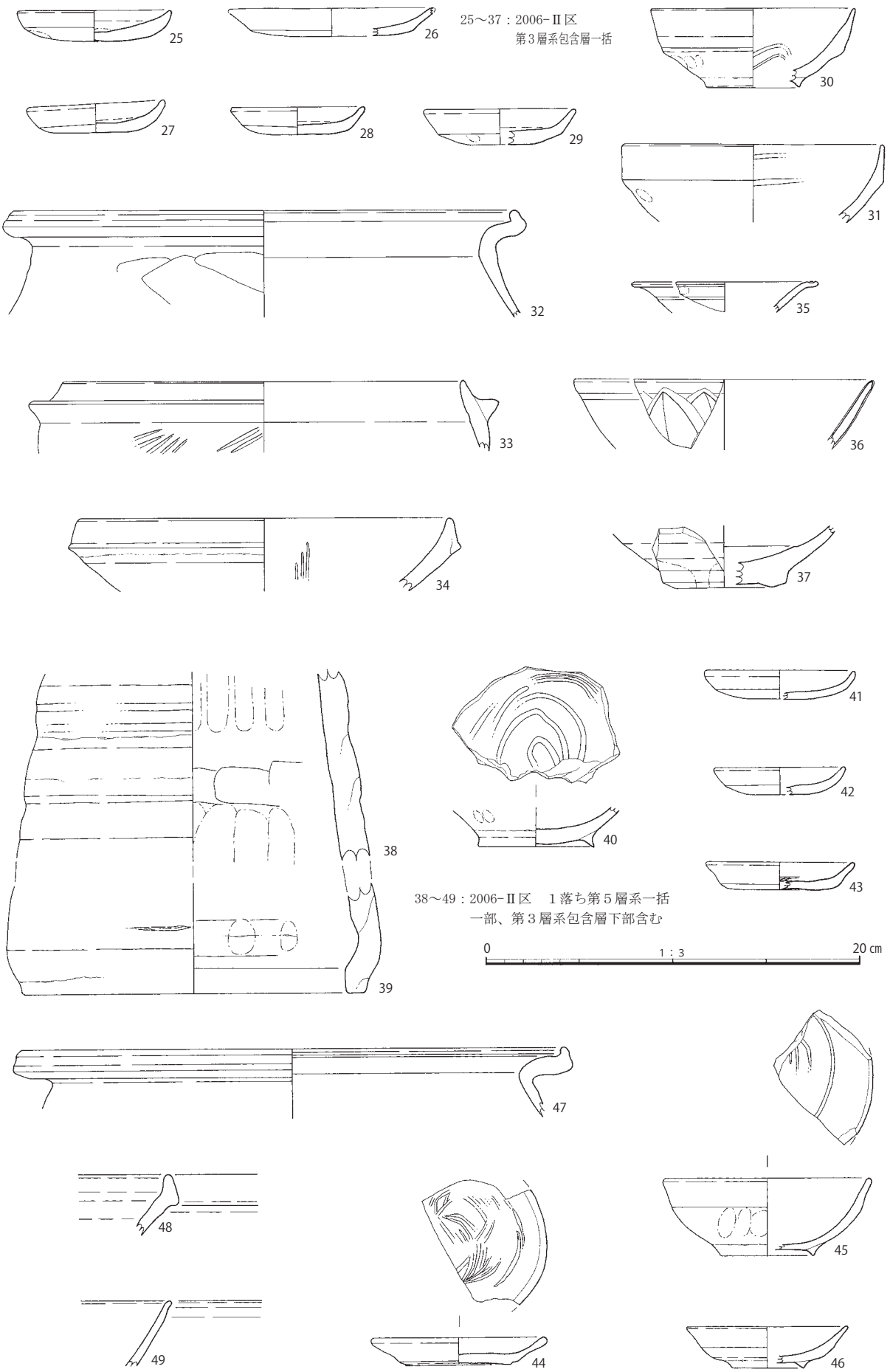


図 47　出土遺物実測図２

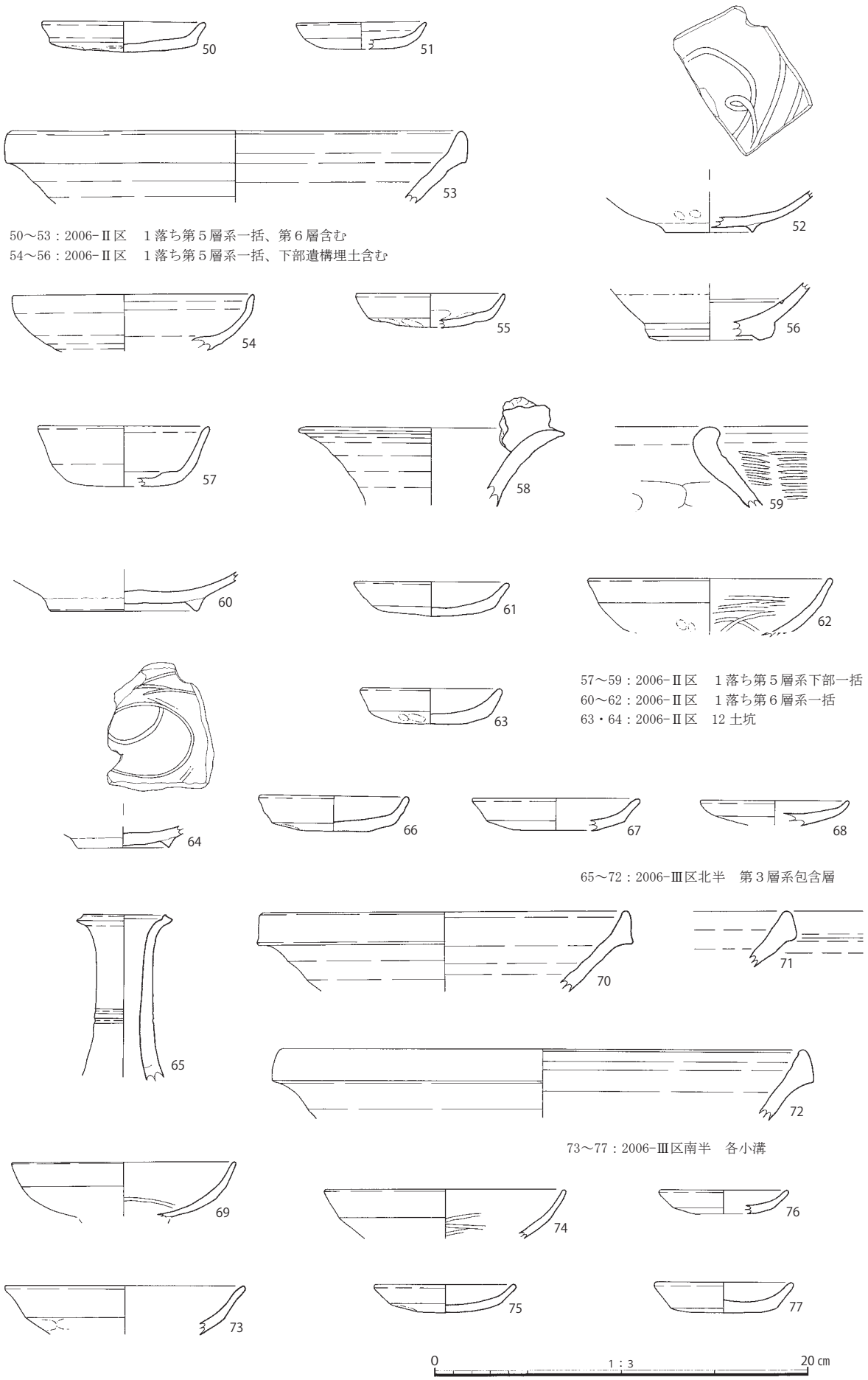


図 48　出土遺物実測図３

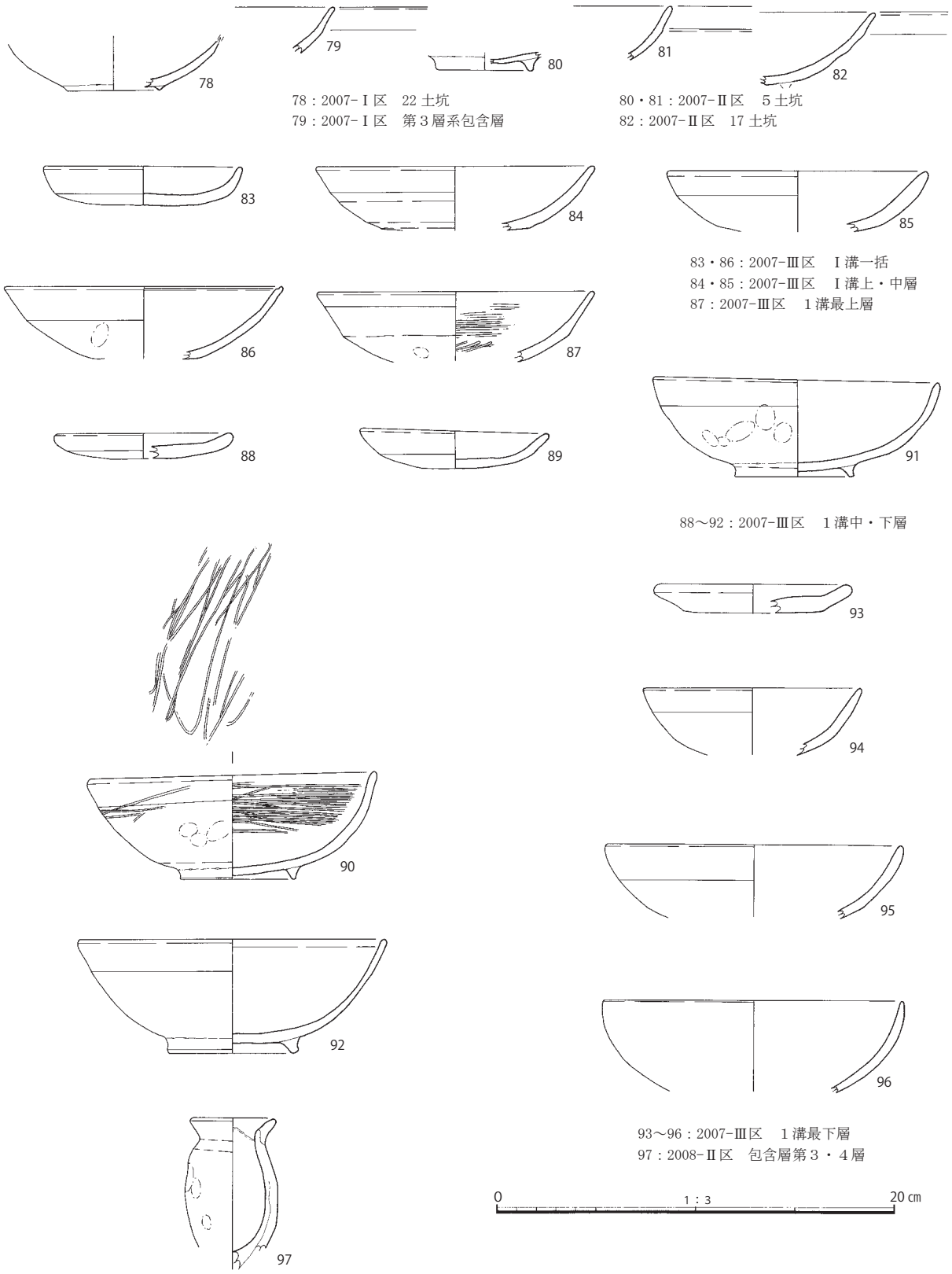
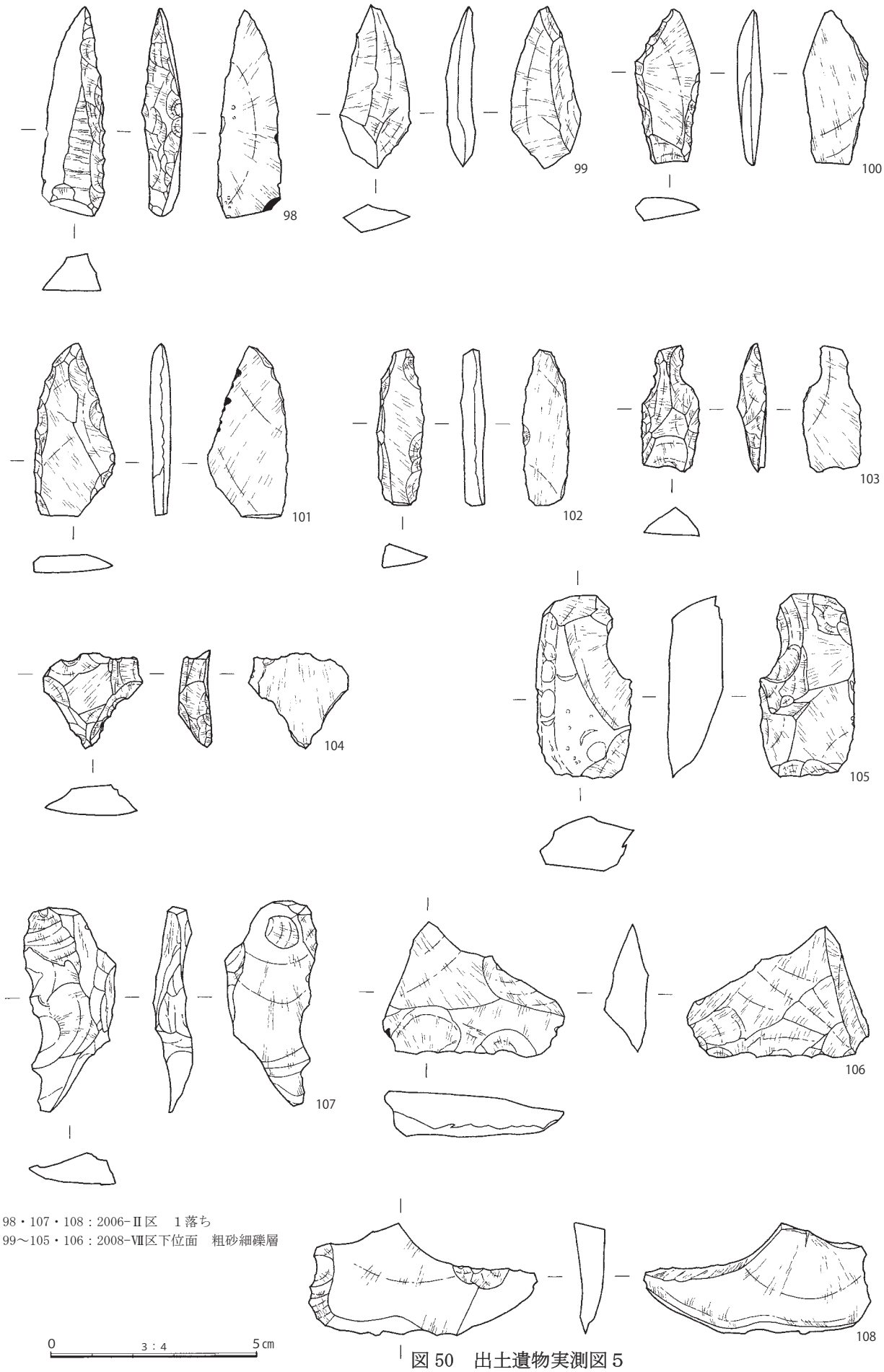
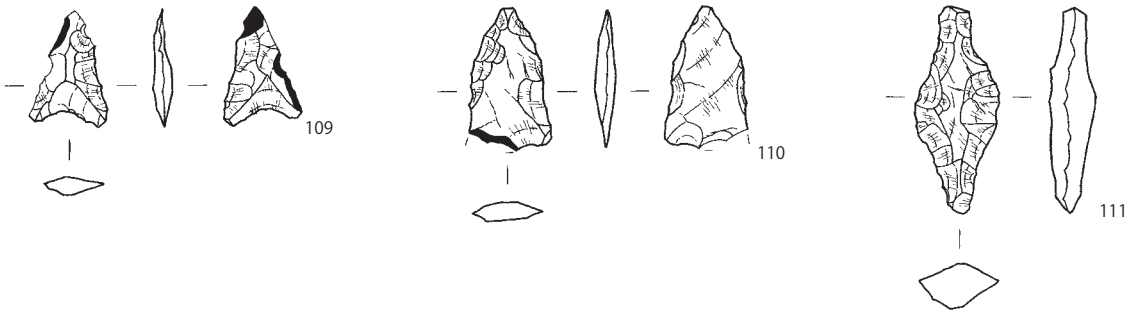


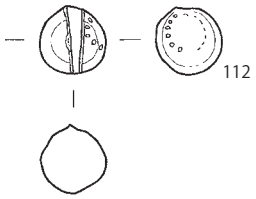
図 49　出土遺物実測図４



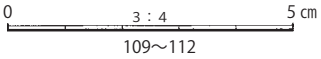
98・107・108：2006-Ⅱ区　1落ち
99～105・106：2008-Ⅶ区下位面　粗砂細礫層

図 50　出土遺物実測図 5





109：2006-Ⅱ区　１落ち
110：2006-Ⅱ区　第３層系包含層上部
111：2006-Ⅲ区北半　第３層系
112：2006-Ⅱ区　第３層系包含層下部
113・114：2006-Ⅱ区　第３層系包含層一括
115：2006-Ⅲ区北半　第３層系包含層下部一括
116：2006-Ⅲ区北半　15 土坑
117：2007-Ⅲ区　１溝最下層基底部



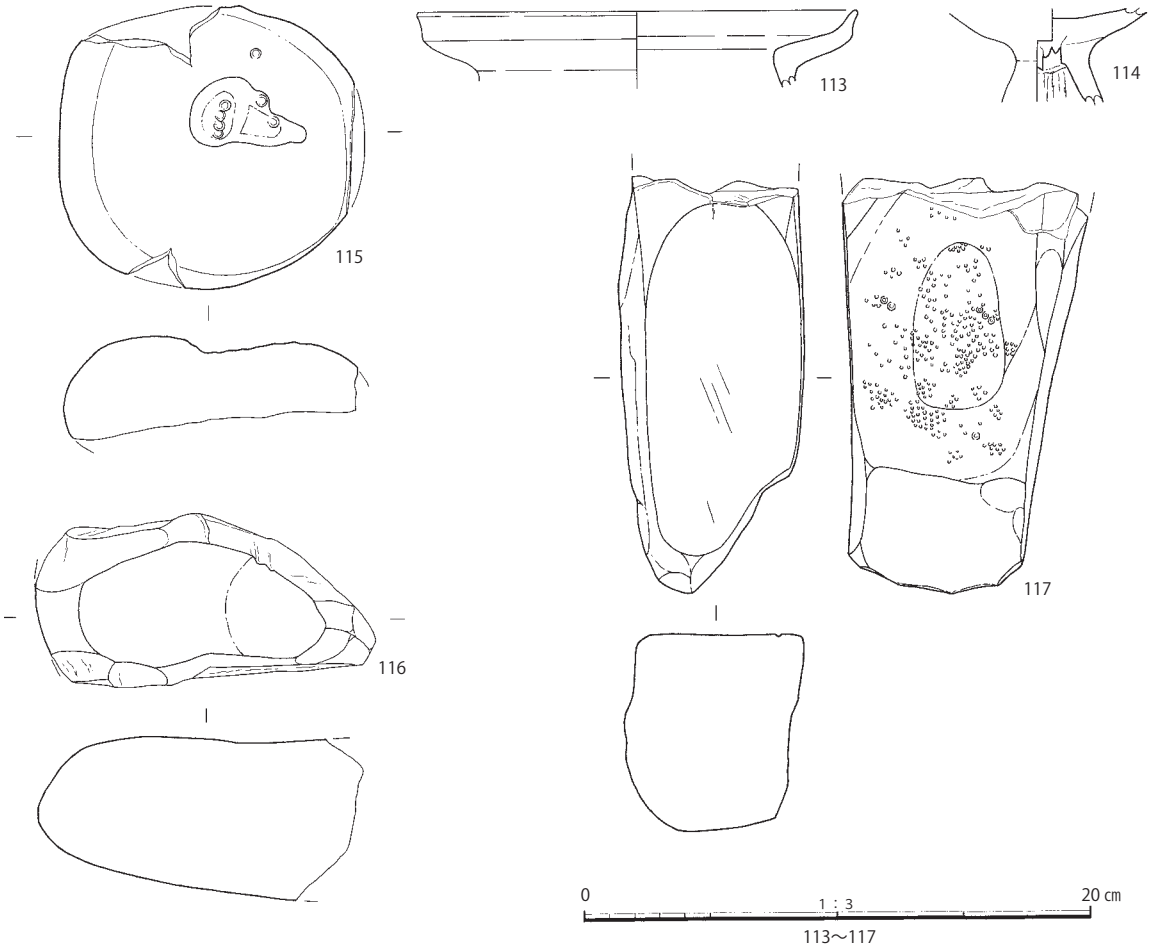


図 51　出土遺物実測図６

表３　藤並地区遺跡　各地区出土遺物数量（西端の地区から東側の地区へ）

大凡の時代		旧石器			縄文			弥生（庄内期含む）				飛鳥・奈良・平安						平安末・鎌倉・室町										江戸					不明	合計	備考
	地区	石器	剥片他	小計	縄文土器	石器剥片他	小計	弥生土器	石器剥片	その他	小計	土師器	黒色土器	須恵器	緑釉灰釉他	瓦	小計	土師器	瓦器	土釜	須恵質土器	瓦質土器	陶器	磁器	その他	瓦	小計	土師質土器	陶磁器	その他	瓦	小計			
1	２００８－Ⅵ区	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	5	0	54	0	2	61	20	161	4	9	0	2	3	2	1	202	0	0	0	0	0	0	267	
2	２００８－Ⅰ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	7	7	51	1	0	0	1	0	3	1	64	0	0	0	0	0	0	71	
3	２００８－Ⅳ区	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	37	0	0	37	7	236	3	6	0	1	1	3	4	261	0	0	0	0	0	0	299	
小計	Ａブロック	0	0	0	0	1	1	4	0	0	4	5	0	98	0	2	105	34	448	8	15	0	4	4	8	6	527	0	0	0	0	0	0	637	
4	２００６－Ⅰ区	0	0	0	0	1	1	1	1	0	2	0	0	34	0	20	54	19	384	32	11	12	3	1	1	1	464	0	0	0	0	0	6	527	
5	２００６－Ⅱ区	2	13	15	0	3	3	18	7	0	25	44	12	300	1	11	368	190	1050	70	34	23	26	17	35	13	1458	0	11	0	0	11	10	1890	
小計	Ｂブロック	2	13	15	0	4	4	19	8	0	27	44	12	334	1	31	422	209	1434	102	45	35	29	18	36	14	1922	0	11	0	0	11	16	2417	
6	２００８－Ⅴ区	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	15	0	0	17	0	91	1	5	0	1	1	0	2	101	0	1	0	1	2	0	121	平面的には未調査
7	２００８－Ⅱ区	0	0	0	0	1	1	4	1	0	5	51	2	221	1	8	283	122	790	29	13	2	9	8	2	18	993	0	2	0	0	2	6	1290	
小計	Ｃブロック	0	1	1	0	1	1	4	1	0	5	53	2	236	1	8	300	122	881	30	18	2	10	9	2	20	1094	0	3	0	1	4	6	1411	
8	２００７－Ⅰ区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	7	0	1	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	10	
9	２００７－Ⅱ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	64	0	0	0	0	0	0	0	67	0	1	0	0	0	0	69	
小計	Ｄブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	3	3	71	0	1	0	0	0	0	0	75	0	1	0	0	0	0	79	
10	２００６－Ⅲ区	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415	
小計	Ｅブロック	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415	
11	２００８－Ⅲ区	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	4	0	42	0	2	48	18	647	15	14	0	7	6	2	0	709	0	6	0	0	6	0	768	粘土採掘坑掘削
12	２００８－Ⅶ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	9	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	12	粘土採掘坑未掘削
13	２００７－Ⅲ区	0	5	5	0	3	3	6	0	0	6	281	125	58	2	4	470	67	200	23	1	0	0	0	1	0	292	0	0	0	0	0	9	785	
小計	Ｆブロック	0	10	10	0	3	3	6	0	0	6	285	125	103	2	6	521	85	856	38	15	0	7	6	3	0	1010	0	6	0	0	6	9	1565	
14	２００８－Ⅲ区下位面	0	12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	一部、補足調査のみ
15	２００８－Ⅶ区下位面	7	46	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53	部分的な調査 粗砂細礫層の一部
小計	Ｆブロック下位面	7	58	65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	
合計		9	82	91	0	9	9	36	19	0	55	388	140	814	4	52	1398	473	3987	189	106	38	56	37	57	41	4984	0	21	0	1	21	31	6589	

表４　各地区出土遺物接合関係一覧

出土遺物登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	出土遺物登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
151	2006－Ⅱ区 E12－ℓ2	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む	←→ 奈良　須恵質 陶棺脚部 （円筒状土製品）	163	2006－Ⅱ区 E12－k2	―――	第 2 層系一括 第 3 層系包含層上 部一括
153	2006－Ⅱ区 E12－m2	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む		172	2006－Ⅱ区 E12－	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む
162	2006－Ⅱ区 E12－j2	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む					
131	2006－Ⅱ区 E12－m3	1 落ち	第 5 層系下部一括	← 奈良　須恵器 長頸壺　口縁部	153	2006－Ⅱ区 E12－m2	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む
168	2006－Ⅱ区 E12－i1	1 落ち	第 5 層系一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む	→ 奈良　須恵器 甕　口線部	184	2006－Ⅱ区 E12－q5	1 落ち	第5層系一括 第6層含む
					186	2006－Ⅱ区 E12－q3	1 落ち	第5層系一括 第6層含む
190	2006－Ⅱ区 E12－o5	1 落ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む	奈良　須恵器 小型壺　体部	191	2006－Ⅱ区 E12－n5	1 落ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む
107	2006－Ⅱ区 E12－ℓ4	1 落ち一括	第 5 層一括 一部、第 3 層系包含層 下部含む？	← 奈良 平瓦	136	2006－Ⅱ区 E12－ℓ3	1 落ち	第 5 層系一括 下部遺構埋土含む
24	2008－Ⅱ区 1/2 東側 E12－m19	―――	包含層第 3 層	← 備前 甕　体部	28	2008－Ⅱ区 1/2 東側 E12－m18	―――	包含層第 3 層 包含層第 4 層
32	2008－Ⅱ区 1/2 東側 E12－ℓ20	―――	包含層第 3 層 包含層第 4 層	← 奈良　須恵器 短頸壺　口頸部	17	2008－Ⅱ区 1/2 東側 E12－ℓ19	―――	包含層第 3 層系 一部撹乱含む
107	2008－Ⅱ区 1/2 西側 E12－n20	暗渠・撹乱	埋土一括	→ 鎌倉　白磁 碗　底部	119	2008－Ⅱ区 1/2 西側 E12－o18	―――	包含層第 3･4 層
2	2008－Ⅵ区 南西半 F12－p16	1 溝 最上層含む	包含層第 3 層	→ 奈良　須恵器 中甕　体部	15	2008－Ⅵ区 南西半 F12－p16	1 溝 最上層	第 3 層含む
					20	2008－Ⅵ区 北東半 F12－n13	―――	第 2 層 包含層第 3･4 層
18	2008－Ⅵ区 北東半 F12－m12	―――	第 2 層 包含層第 3 層 南東壁側溝	← 奈良　須恵器 蓋　口縁部	31	2008－Ⅵ区 北東半 F12－m12	10 踏み込み	第 4' 層黒褐色土 第 4 層
					32	2008－Ⅵ区 北東半 F12－m11	10 踏み込み	第 4' 層黒褐色土 第 4 層

2006 ～ 2008 藤並地区遺跡　出土遺物一覧

No　1　.

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	図46	図版32	99	280	2006－Ⅰ区 E11－k24	基盤層直上	踏み込み状遺構 第６層系	須恵器	蓋	口縁部～ 天井部	約 50% 約 50%	口縁部内面の返りは短い、天井部外面回転ヘラケズリ、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式２段階、反転復元
2	図46	図版32	100	235	2006－Ⅰ区 E11－h25	基盤層直上	踏み込み状遺構 第６層系	須恵器	陶棺	脚部	不明	器形は円筒状を呈する、内面は横方向のナデ調整後縦方向の強いナデ調整、外面はユビオサエ後横方向のナデ調整、粘土の接合単位の位置に凹線様のナデ、焼成遺存やや軟質化、反転復元
3	図46	図版32	94	251	2006－Ⅰ区 E11－f21	第５層～第７層一括	―――	土師器	皿	口縁部～ 底部	5%以下 約 40%	厚みの整った底部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、口縁端部は欠損、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、反転復元
4	図46	図版32	95	239	2006－Ⅰ区 E11－g18	51 谷状落ちより上？	52 石列東側	土師器	皿	口縁部～ 底部	5%以下 約 30%	やや厚みのある腰部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、口縁端部は欠損、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、口径復元不明確、反転復元
5	図46	図版32	96	240	2006－Ⅰ区 E11－g17	51 谷状落ちより上？	52 石列東側	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 25% 約 25%	底部から緩やかに内湾して口縁部に延びる、磨滅のため調整不明瞭、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土 D）、反転復元
6	図46	図版32	98	278	2006－Ⅰ区 E11－f23	基盤層直上	踏み込み状遺構 第５層系	瓦器	椀	口縁部～ 腰部	約 20% 約 30%	内湾して体部から口縁部に延びる、口縁端部は強い横方向のナデにより丸く納める、口縁部外面連続する小ピッチの指頭圧痕、内面側壁幅 1㎜細かいミガキやや密、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、反転復元
7	図46	図版32	101	279	2006－Ⅰ区 E11－f･g23	基盤層直上	54 土坑 最上層	瓦器	椀	口縁部	約 20%	器形はかなり歪つ、細片のため口径・傾き不明確、口径実際は図より小さいか、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土 C）、反転復元
8	図46	図版32	93	268	2006－Ⅰ区 E11－j25	第５層系一括	―――	備前	擂鉢	口縁部	約 5%	擂り目６本 /2.2㎝、胎土に凝灰岩・流紋岩 L・LL 少量含む、ロクロ回転方向：右回り、乗岡編年中世 4a 期・間壁編年Ⅳ B 期、反転復元
9	図46	図版32	102	248	2006－Ⅰ区 E11－i20	―――	51 谷状落ち 第 7a 層	土師器	皿	体部～ 底部	約 20% 約 60%	厚い底部から内湾して体部に延びる、内外面共に磨滅著しく調整不明、反転復元
10	図46	図版32	107	264	2006－Ⅰ区 E11－i22	―――	51 谷状落ち 第 7a 層	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 80% 100%	厚みのある扁平な底部からやや外反ぎみの口縁部に延びる、器形の歪み著しい、焼成遺存極めて良好堅緻（胎土 A）
11	図46	図版32	113	281	2006－Ⅰ区 E11－i19	―――	51 谷状落ち 第 7c 層	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 25%	扁平な底部からやや外反ぎみの短い口縁部に延びる、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
12	図46	図版32	106	250	2006－Ⅰ区 E11－g21	―――	51 谷状落ち 第 7a 層	瓦器	小椀	口縁部	約 10%	緩やかに内湾する体部からやや強く立ち上がる口縁部に延びる、内面見込から側壁にかけて幅 2.5㎜やや粗いミガキ、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、反転復元
13	図46	図版32	104	248	2006－Ⅰ区 E11－i20	―――	51 谷状落ち 第 7a 層	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	5%以下 約 20%	緩やかに内湾する体部からやや外反する口縁部に延びる、体部外面２段の指頭圧痕、見込暗文は幅４㎜極めて粗く螺旋状、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、反転復元
14	図46	図版32	112	282	2006－Ⅰ区 E11－g19	―――	51 谷状落ち 第 7b 層？	瓦質	火舎 （浅鉢）	口縁部～ 底部	約 15% 約 10%	器壁の厚い底部、腰部から内湾する口縁部に延びる、体部内面下半は横方向の雑なナデ調整、上半は横方向の雑なヘラミガキ、体部外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁部上位に２条の突帯、突帯間の下段に雷文帯と貼付円形浮文痕跡・上段に雷文帯のみの構成、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
15	図46	図版33	4	158	2006－Ⅱ区 E12－m1	第２層系一括 第３層系包含層上部一括	―――	須恵器	蓋	口縁部	5%以下	胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅲ型式２段階、断面のみ
16	図46	図版33	3	122	2006－Ⅱ区 E12－n3	第２層系包含層 第３層系包含層上部一括	―――	須恵器	蓋	口縁部	約 10%	胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅳ型式３段階、反転復元
17	図46	図版33	5	125	2006－Ⅱ区 E12－k3	第２層系包含層一括 第３層系包含層上部一括	―――	土師器	皿	口縁部～ 底部	約 10% 約 20%	厚い腰部から直線的に上方に延びる口縁部へ続く、全体にやや歪つ、歪みのため口径不明確、磨滅著しい、反転復元
18	図46	図版33	2	212	2006－Ⅱ区 E12－n7	第２層系～第５層系一括	―――	土師器	土釜 A	口縁部	約 20%	体部内面板状工具によるナデ調整、胎土に石英・チャート・片岩 M・L 亜角礫中量含む、A 胎土に類似、反転復元
19	図46	図版33	1	97	2006－Ⅱ区 E12－m5	第２層系・第３層系 包含層一括 遺構埋土含む	―――	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁部端面に自然釉薄く付着、重ね焼痕あり、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅱ期第２段階の範疇か、断面のみ
20	図46	図版33	17	56	2006－Ⅱ区 E12－n6	第３層系包含層一括	―――	須恵器	坏 A	口縁部～底部	約 10%	未調整の底部から内湾して体部へ、口縁部は直線的に上方に延びる、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式２段階、反転復元
21	図46	図版33	18	14	2006－Ⅱ区 E12－k1	第３層系一括 遺構埋土含む	―――	須恵器	坏 A	口縁部	約 10%	体部から内湾して口縁部へ続く、胎土緻密、ロクロ回転方向：左回り、Ⅲ型式２段階、反転復元
22	図46	図版33	20	78	2006－Ⅱ区 E12－q4	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	須恵器	甕	口縁部	5%以下	Ⅲ型式２段階、断面のみ
23	図46	図版33	16	59	2006－Ⅱ区 E12－p6	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	黒色土器	椀	体部～ 底部（高台部）	約 25%	胎土は図 47－43（実 64）瓦器小皿に類似し 10YR6/6 明黄褐色、磨滅のため調整不明瞭、反転復元
24	図46	図版33	19	59	2006－Ⅱ区 E12－p6	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	灰釉陶器	山茶椀	口縁部	約 10%	外傾する口縁部、口縁端部は丸く納める、内面斑点状に薄く灰釉付着、胎土微密、北部系山茶椀東濃型７型式、反転復元
25	図47	図版33	21	76	2006－Ⅱ区 E12－ℓ7	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	土師器	小皿	口縁部～底部	約 25%	内湾する底部から外反する短い口縁部へ続く、底部未調整、胎土にチャート S 円礫微量含む、反転復元
26	図47	図版33	22	72	2006－Ⅱ区 E12－q4	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	土師器	皿	口縁部～底部	約 10%	全体に扁平な器形で口縁部は低く外方に延びる、磨滅のため調整不明瞭、反転復元
27	図47	図版33	23	33	2006－Ⅱ区 E12－r5	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～底部	約 90%	丸みのある底部からやや内湾ぎみに延びる口縁部へ続く、内外面ミガキなし、外面磨滅著しくやや軟質（胎土 B）、やや歪つ
28	図47	図版33	24	30	2006－Ⅱ区 E12－n2	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～底部	約 90%	見込に放射状の工具痕、底部外面に粘土の貼り足し痕、かなり歪つ、外面やや磨滅ぎみで焼成遺存良好堅緻（胎土 A）
29	図47	図版33	25	2	2006－Ⅱ区 E12－p9	第３層系	―――	瓦器	小皿	口縁部～底部	約 25%	口縁部は、強いヨコナデのためやや内湾ぎみに立ち上がる、外面磨滅で焼成遺存やや軟質（胎土 B）、反転復元
30	図47	図版33	30	66	2006－Ⅱ区 E12－ℓ8・9	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約 20% 約 20%	厚い体部から外方に延びる口縁部へ続く、内面側壁のミガキは太く幅 3㎜極めて粗く雑に施される、器形は極めて歪つ、焼成堅緻（胎土 A）、反転復元
31	図47	図版33	31	20	2006－Ⅱ区 E12－n2	第３層系一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	椀	口縁部～ 底部	約 5% 約 10%	歪つな体部から上方に直線的に延びる口縁部へ続く、内面側壁のミガキは太く幅 3㎜極めて粗く施される、焼成遺存（胎土 B）、細片のため口径不明確、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
32	図47	図版34	32	89	2006－Ⅱ区 E12－ℓ5	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	土師器	土釜Ａ	口縁部	約 20%	外面頸部以下板状工具によるナデ、口縁端部は内方に摘み上げる、胎土に長石・チャート SS ～ M 亜円礫多量･石英･片岩 SS ～ M 角礫少量含む（A 胎土）、反転復元
33	図47	図版34	34	88	2006－Ⅱ区 E12－m6	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	土師器	土釜Ｂ	口縁部～ 鍔部	5%以下 約 20%	鍔より下に斜め右上がりのタタキ、胎土に石英・チャート・長石 SS 角礫多量、M ～ LL 角礫少量（C 胎土）、鍔以下に煤薄く付着、反転復元
34	図47	図版34	37	56	2006－Ⅱ区 E12－n6	第３層系包含層一括	―――	備前	擂鉢	口縁部	約 20%	内外面 5PB5/1 青灰色・断面 2.5YR5/4 にぶい赤褐色を呈する、ロクロ回転方向：右回り、乗岡編年中世 4b 期、間壁編年Ⅳ B 期、反転復元
35	図47	図版34	40	72	2006－Ⅱ区 E12－q4	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	白磁	碗	口縁部～体部	約 10%	口縁端部を上方に摘み上げる、施釉は内面均一、外面むら有り、大宰府分類白磁碗Ⅳ 1b 類に該当か、反転復元
36	図47	図版34	41	33	2006－Ⅱ区 E12－r5	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	青磁	碗	口縁部～体部	約 10%	色調 5G7/1 明緑灰色を呈する、幅の広い片切り彫りによる縞蓮弁文、太宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ 5b 類、反転復元
37	図47	図版34	43	66	2006－Ⅱ区 E12－ℓ8・9	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	白磁	碗	体部～ 底部（高台部）	約 25%	内面見込と体部の境目に圏線１条、底部畳付露胎、太宰府分類白磁碗Ⅳ 1a 類、反転復元
38	図47	図版35	56	151 (153)	2006－Ⅱ区 E12－ℓ2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	須恵器	陶棺	脚部	不明	全体にやや内傾して立ち上がる、内面は下端の縦方向のナデ調整のち上半の横方向のナデ調整、外面は全体に横方向のナデ調整、全体に磨滅・軟質化が著しい、反転復元
39	図47	図版35	57	172	2006－Ⅱ区 E12－	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	須恵器	陶棺	脚部	不明	全体に歪つに内湾して立ち上がる、内面は横方向の雑なナデ調整・外面は磨滅のため調整不明、全体に粘土の接合痕が顕著、軟質化が著しい、反転復元
40	図47	図版35	55	151	2006－Ⅱ区 E12－ℓ2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	土師器	椀	体部～ 底部（高台部）	約 50%	器壁の厚い底部から内湾して体部に延びる、高台は断面逆三角形、見込暗文は太く幅２～ 3㎜粗く螺旋状に施される、本来は瓦器椀か、燻しなし、反転復元
41	図47	図版35	60	172	2006－Ⅱ区 E12－	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 20%	薄い底部から内湾して短い口縁部に延びる、内面 10YR7/6 明黄褐色で軟質化、磨滅著しい、瓦器小皿胎土 D の可能あり、反転復元
42	図47	図版35	61	164	2006－Ⅱ区 E12－k2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約 25% 約 25%	薄い底部からやや外傾して短い口縁部に延びる、色調は図 47－41（実 60）に類似し軟質化、磨滅著しい、反転復元
43	図47	図版35	64	127	2006－Ⅱ区 E12－k3	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 20%	見込暗文磨滅のため不明確、ミガキ幅約 2㎜、断面 10YR6/6 明黄褐色で軟質化（胎土 C）、反転復元
44	図47	図版35	63	141	2006－Ⅱ区 E12－j2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 25%	平坦な底部からやや内湾ぎみの口縁部に延びる、口縁部の強い横方向のナデにより端部は大きく丸みをもつ、見込幅約 2㎜乱雑なミガキ、底部外面静止糸切り、焼成遺存極めて良好堅緻（胎土 A）、反転復元
45	図47	図版35	66	144	2006－Ⅱ区 E12－j2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約 10% 約 20%	底部から内湾して口縁部に延び端部を丸く納める、見込暗文は幅 2㎜極めて粗く螺旋状に内面側壁に及ぶ、焼成遺存極めて良好堅緻（胎土 A）、反転復元
46	図47	図版35	68	166	2006－Ⅱ区 E12－i2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	瓦器	小椀	口縁部～ 底部（高台部）	5%以下 約 10%	底部からやや内湾して口縁部に延び端部で僅かに外反する、やや磨滅ぎみで軟質化（胎土 C）、反転復元
47	図47	図版35	62	162	2006－Ⅱ区 E12－j2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第５層系一括	土師器	土釜Ａ	口縁部	約 10%	「く」字に折れ曲がる頸部からやや外反ぎみの口縁部に延びる、口縁端部は上方に摘み上げる、胎土に片岩・チャート・長石・石英 M ～ LL 中量含む（A 胎土）、全体に磨滅著しい、反転復元
48	図47	図版35	69	151	2006－Ⅱ区 E12－ℓ2	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち一括 第５層系一括	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部で上方･下方に肥厚する、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第２段階、断面のみ
49	図47	図版35	70	114	2006－Ⅱ区 E12－m4	一部、第３層系包含 層下部含む	１落ち 第４層一部	白磁	碗	口縁部～体部	不明	緩やかに内湾する口縁部、口縁端部は外方に緩く折れ曲がる、外面口縁端部に釉溜りが認められる、太宰府分類白磁碗Ⅴ 1a 類、断面のみ
50	図48	図版36	74	187	2006－Ⅱ区 E12－r4	―――	１落ち 第５層系一括 第６層含む 下部遺構含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 40% 約 50%	やや内湾する底部から緩やかに外反する短い口縁部に延びる､焼成遺存磨滅著しくやや軟質化（胎土 B）、反転復元
51	図48	図版36	75	186	2006－Ⅱ区 E12－q3	―――	１落ち 第５層系一括 第６層含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 30% 約 30%	やや厚い底部からやや内湾して立ち上がる短い口縁部に延びる、口縁部は強いナデ調整、焼成遺存やや軟質化の部分も認められるが良好堅緻（胎土 A）、反転復元
52	図48	図版36	72	187	2006－Ⅱ区 E12－r4	―――	１落ち 第５層系一括 第６層含む 下部遺構含む	瓦器	椀	体部～ 底部（高台部）	約 50%	厚みの整った腰の低い体部、高台は低く逆台形状を呈する、見込暗文は幅 3㎜極めて粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続する､焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、反転復元
53	図48	図版36	77	187	2006－Ⅱ区 E12－r4	―――	１落ち 第５層系一括 第６層含む 下部遺構含む	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	約 10%	口縁端部で上方に軽く肥厚する、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅲ期第１段階、反転復元
54	図48	図版36	78	137	2006－Ⅱ区 E12－k4	―――	１落ち 第５層系一括 下部遺構含む	須恵器	坏Ａ	口縁部～ 腰部	約 10% 約 10%	やや厚めの底部から内湾して立ち上がり口縁部に延びる、内外面共に自然釉薄く付着、焼成遺存良好、反転復元
55	図48	図版36	79	137	2006－Ⅱ区 E12－k4	―――	１落ち 第５層系一括 下部遺構含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 50% 約 50%	やや内湾する底部から緩やかに内湾する口縁部に延びる、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土 B）、反転復元
56	図48	図版36	80	190	2006－Ⅱ区 E12－o5	―――	１落ち 第５層系一括 下部遺構含む	白磁	碗	腰部～ 底部（高台部）	約 30%	内面見込と体部の境目に片切り彫りによる圏線１条、腰部下位から露胎、太宰府分類白磁碗Ⅳ 1a 類、ロクロ回転方向：右回り、反転復元
57	図48	図版36	81	131	2006－Ⅱ区 E12－m3	―――	１落ち 第５層系下部 一括	須恵器	坏Ａ	口縁部～ 底部	5%以下 約 25%	見込は強い回転ナデにより凹みを呈する、全体に磨滅著しくやや軟質化、反転復元
58	図48	図版36	82	131	2006－Ⅱ区 E12－m3	―――	１落ち 第５層系下部 一括	須恵器	長頸壺	口縁部	約 20%	大きく外反する口縁部、口縁端部は丸く納める、内面にスサ入り粘土の融着あり、断面 5YR6/2 灰褐色、出土登録 153（E12－m2　１落ち　第５層系一括　一部、第３層系包含下部含む）と接合、反転復元
59	図48	図版36	83	131	2006－Ⅱ区 E12－m3	―――	１落ち 第５層系下部 一括	瓦質	甕	口縁部	不明	器壁の薄い肩部から内傾して口縁部に延びる、口縁端部は、肥厚して外方に短く折り返す、内面はナデ調整、外面はタタキ調整、断面のみ
60	図48	図版36	84	178	2006－Ⅱ区 E12－r4 西半	―――	１落ち 第６層系一括	土師器	高台付 皿	底部（高台部）	約 20%	やや突出ぎみの見込から緩やかに内湾して体部に延びる、内外面共に磨滅ぎみ、反転復元
61	図48	図版36	85	178	2006－Ⅱ区 E12－r4 西半	―――	１落ち 第６層系一括	瓦器	小皿	口縁部～底部	約 80%	やや内湾する底部から緩やかに外反する口縁部に延びる、器形はかなり歪つ、焼成遺存内外面共に磨滅著しく軟質化（胎土 B）
62	図48	図版36	86	178	2006－Ⅱ区 E12－r4 西半	―――	１落ち 第６層系一括	瓦器	椀	口縁部～体部	約 10%	体部から内湾して口縁部に延びる、口縁端部は丸く納める、見込暗文は幅 3㎜極めて粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続する、器形はやや歪つ、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
63	図48	図版36	88	210	2006－Ⅱ区 E12－q4	基盤層直上	12 土坑 土層 4	土師器	小皿	口縁部～底部	約 40%	やや厚い底部から内湾して立ち上がる口縁部に延びる、内外面共に磨滅著しく焼成遺存やや軟質化、反転復元
64	図48	図版36	90	203	2006－Ⅱ区 E12－q4	基盤層直上	12 土坑一括	瓦器	椀	底部（高台部）	約 60%	見込暗文は幅 2㎜やや粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続か、高台断面逆三角形状を呈する、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
65	図48	図版37	133	47	2006－Ⅲ区北半 E13－n25	第 3 層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	―――	須恵器	細頸壺	口縁部～ 頸部	約 40% 約 90%	筒状に延びる頸部から屈曲して外方に延びる口縁部に続く、口縁端部は内側上方に摘み上げる、頸部に 2 条の凹線、ロクロ回転方向：右回り、Ⅳ型式 3 段階
66	図48	図版37	126	18	2006－Ⅲ区北半 E14－n2	第 3 層系包含層 撹乱含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 10% 約 25%	やや厚みのある底部から軽く内湾する口縁部に延びる、口縁部の残存率が低いため口径不明確、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
67	図48	図版37	127	24	2006－Ⅲ区北半 E14－m1	第 3 層系包含層一括 撹乱含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 10%	凹み状の底部からやや外反ぎみの口縁部に延びる、器形全体が歪つ、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
68	図48	図版37	135	48	2006－Ⅲ区北半 E13－o25	第 3 層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 10% 約 20%	扁平な底部からやや内湾する口縁部に延びる、焼成遺存やや磨滅ぎみのため調整不明瞭（胎土 B）、反転復元
69	図48	図版37	125	36	2006－Ⅲ区北半 E13－m24	第 3 層系包含層一括 上部	―――	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約 20% 約 10%	内湾ぎみの体部からそのまま口縁部に延びる、体部内面側壁のミガキは太く幅 3㎜極めて粗く施される、焼成遺存堅緻（胎土 A）、同一個体数片接合不可、反転復元
70	図48	図版37	130	3	2006－Ⅲ区北半 E13－m24	第 3 層	―――	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部で上下に肥厚する、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：右回り、細片のため口径不明瞭、第Ⅲ期第 1 段階、反転復元
71	図48	図版37	129	1	Ⅲ区　北半 E13－m22	第 3 層	―――	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	口縁端部で上下に肥厚ぎみ、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：右回り、第Ⅱ期第 2 段階、断面のみ
72	図48	図版37	136	39	2006－Ⅲ区北半 E13－m24	第 3 層系包含層 下部一括 基盤層遺構含む	―――	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	約 10%	口縁端部で上下に肥厚する、外面に重ね焼痕、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第 1 段階、反転復元
73	図48	図版37	138	63	2006－Ⅲ区南半 E14－m6·7	基盤層直上	41 小溝	瓦器	椀	口縁部	約 10%	外反ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅のため調整不明瞭（胎土 B）、細片のため口径不明瞭、反転復元
74	図48	図版37	139	64	2006－Ⅲ区南半 E14－n7	基盤層直上	35b 小溝	瓦器	椀	口縁部	約 10%	内湾ぎみの口縁部、内面側壁のミガキは太く幅 3㎜極めて粗く施される、焼成遺存堅緻（胎土 A）、細片のため口径不明瞭、反転復元
75	図48	図版37	140	59	2006－Ⅲ区南半 E14－m5·6 n6	基盤層直上	40b 小溝	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	5%以下 約 25%	やや内湾ぎみの底部から緩く外反する口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土 C）、細片のため口径不明瞭、反転復元
76	図48	図版37	141	61	2006－Ⅲ区南半 E14－m6·n7	基盤層直上	36b 小溝	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 10% 約 10%	内湾ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土 C）、細片のため口径不明瞭、反転復元
77	図48	図版37	142	68	2006－Ⅲ区南半 E14－m·n5	基盤層直上	42 小溝一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	5%以下 約 20%	厚みのある底部から斜め上方に直線的に延びる口縁部に続く、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、反転復元
78	図49	－	147	6	2007－Ⅰ区南半 E13－x10	―――	22 土坑 一括	瓦器	椀	体部～ 底部	約 10% 約 5%	内湾ぎみの薄い体部、高台は低い逆三角形状を呈する、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土 D）、反転復元
79	図49	－	146	2	2007－Ⅰ区北半 E13－y2	第 3 層系包含層	―――	瓦器	椀	口縁部	不明	器壁の薄い外反ぎみの口縁部、焼成遺存磨滅著しく軟質化（胎土 C）、断面のみ
80	図49	－	149	3	2007－Ⅱ区 E13－o6	―――	5 土坑 一括	瓦器	椀	底部（高台部）	約 20%	器壁の薄い底部に丸みのある逆台形状の高台が付く、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土 B）、反転復元
81	図49	－	148	3	2007－Ⅱ区 E13－o6	―――	5 土坑 一括	瓦器	椀	口縁部	不明	外反ぎみの口縁部、焼成遺存摩滅のため調整不明瞭（胎土 B）、断面のみ
82	図49	－	150	4	2007－Ⅱ区 E13－o·p10	―――	17 土坑 一括	瓦器	椀	口縁部～体部	不明	内湾ぎみの体部から緩く外反する口縁部に延びる、焼成遺存磨滅のため調整不明瞭（胎土 B）、断面のみ
83	図49	図版38	152	1	2007－Ⅲ区 C11－k25	―――	1 溝 一括	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 30%	扁平な底部から内湾ぎみの口縁部に延びる、底部と口縁部の境は不明確、口縁部やや歪つのため口径不明瞭、反転復元
84	図49	図版38	153	11	2007－Ⅲ区 C12－i2	―――	1 溝 上・中層 図の 2,3	土師器	坏	口縁部～ 体部	約 20% 約 10%	平安、内湾する体部から口縁部に延びる、体部から口縁部にかけて三段の横ナデ、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
85	図49	図版38	154－ 1	25	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	1 溝分岐点 上・中層 図の 2,3	土師器	皿	口縁部～ 体部	約 10% 約 10%	器壁の厚い体部から斜め外方に延びる口縁部に続く、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
86	図49	図版38	154－ 2	1	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	1 溝 一括	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約 10% 約 10%	器壁の薄い体部からやや内湾ぎみの口縁部に延びる、口縁端部内面に浅い沈線、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土 B）、反転復元
87	図49	図版38	155	10	2007－Ⅲ区 c12－i2	―――	1 溝 最上層第 3 層系 図の 1	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約 5% 約 10%	内面側壁のミガキはやや細く 1,5㎜雑に施される、焼成遺存やや磨滅ぎみ（胎土 B ぎみ）、反転復元
88	図49	図版38	158	15	2007－Ⅲ区 c12－j·i1	―――	1 溝 中層・下層 図の 3 以下	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 20%	扁平な厚い底部からそのまま低く延びる口縁部へ続く、焼成遺存二次焼成のため赤変、反転復元
89	図49	図版38	159	15	2007－Ⅲ区 c12－j·i1	―――	1 溝 中層・下層 図の 3 以下	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 98% 100%	扁平な薄い底部から斜め外方に開く口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しく調整不明瞭（胎土 C）
90	図49	図版38	160	18	2007－Ⅲ区 c12－j2	―――	1 溝 中層・下層 図の 3 以下	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約 95% 100%	緩やかに内湾する底・体部からやや外反する口縁部に延びる、口縁部 1/2 はかなり歪つ、見込暗文は幅 1㎜細くジグザグ状、内面側壁のミガキは幅 1㎜比較的密に施される、口縁部外面に幅 1 ～ 1,5㎜細いミガキ僅かに施される、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、外面重ね焼痕
91	図49	図版38	161	17	2007－Ⅲ区 c12－i2	―――	1 溝 中層・下層 図の 3 以下	瓦器	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約 70% 100%	緩やかに内湾する底・体部からやや直立する口縁部に延びる、見込暗文は不明、内面側壁のミガキは密であるが磨滅のため単位不明、焼成遺存軟質化（胎土 B）
92	図49	図版38	162	34	2007－Ⅲ区 c11－j·k25	―――	1 溝 中層・下層 一部最下層含む	黒色土器 A 類	椀	口縁部～ 底部（高台部）	約 20% 約 60%	内湾ぎみの底・体部からそのまま内湾する口縁部に延びる、口縁部外面の一部まで黒色化、高台は大きく逆台形状を呈する、内外面共に磨滅著しく調整不明瞭、反転復元
93	図49	図版39	166	38	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	1 溝 最下層より下位 黄褐色粗砂	土師器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 20%	厚い底部から斜め外方に低く延びる口縁部に続く、底部は平坦であるが糸切りは認められない、内外面共に磨滅のため調整不明瞭、反転復元
94	図49	図版39	165	23	2007－Ⅲ区 c12－j·i1	―――	1 溝 最下層	土師器	皿	口縁部～ 体部	約 10% 約 5%	緩やかに内湾する体部から斜め外方に延びる口縁部に続く、器面の磨滅著しいため調整不明、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
95	図49	図版39	167	36	2007－Ⅲ区 c11－j･k25	――	1 溝 最下層	黒色土器 A 類	椀	口縁部～ 体部	約 10% 約 5%	緩やかに内湾する体部から、そのまま口縁部に続く、口縁部はやや肥厚ぎみ、全体に燻しは非常に薄く土師器の可能性もあり、反転復元
96	図49	図版39	168	36	2007－Ⅲ区 c11－j･k25	――	1 溝 最下層	黒色土器 A 類	椀	口縁部～ 体部	約 10% 約 5%	体部から口縁部にかけて内湾して延びる、口縁部は体部に比してやや肥厚ぎみ、内外面共に磨滅のため調整不明瞭、燻しはやや薄い、反転復元
97	図49	図版39	229	124	2008－Ⅱ区 1/2 西側 E12－m17	包第 3･4 層	――	瓦器	小壺	口縁部～ 底部	約 20% 約 70%	器壁の厚い底・体部に口縁部を貼り足す、縦長の体部から外傾する口縁部に延びる、焼成遺存やや軟質（胎土 B）、底部欠損、一部反転復元
98	図50	図版39	115	162	2006－Ⅱ区 E12－j2	――	1 落ち 第 5 層系一括 一部、第 3 層系 包含層 下部含む	旧石器	ナイフ形 石器	有底剥片	約 100%	表面に石核底面あり、側縁は背腹両面側から急角度の打面調整が認められる、刃部に刃毀れとみられる小打痕が認められる、長さ 5.1㎝・幅 1.5㎝・厚さ 0.9㎝・重量 6.0 g・石材：サヌカイト
99	図50	図版39	287	12	2008－Ⅶ区 C12－p1 地点 6	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	調整痕の ある剥片	完形	100% 完形	刃縁部に細かい刃毀れ痕が認められることからナイフ形石器としての使用も考えられる、右側下端部に角度の浅い調整痕（二次加工痕）、左側側縁の裏面に浅い調整痕、典型的なナイフ形石器でない故に「調整痕のある剥片」と記述した方がよい、長さ 4.0㎝･幅 1.7㎝･厚さ 0.6㎝・重量 3.4 g・石材：サヌカイト
100	図50	図版39	288	15	2008－Ⅶ区 C12－o1 地点 9	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	ナイフ形 石器	完形	100% 完形	刃縁部下半に調整痕、上半部は加工痕が認められない、左側一側縁全体に調整痕、主剥離面となる面にバルブが認められる、長さ 3.8㎝・幅 1.6㎝・厚さ 0.6㎝・重量 3.6 g・石材：サヌカイト
101	図50	図版39	289	24	2008－Ⅶ区 C12－q3 地点 22	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	ナイフ形 石器	完形	100% 完形	刃縁部に浅い角度の剥離を丁寧に施す、左側一側縁全体に急角度な背部調整、特徴として器厚が薄く幅広である、典型的なナイフ形石器ではないが刃縁部を作り出すためナイフ形石器に分類する、長さ 4.2㎝・幅 2.0㎝・厚さ 0.4㎝・重量 4.4 g・石材：サヌカイト
102	図50	図版39	290	36	2008－Ⅶ区 C12－t3 地点 35	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	ナイフ形 石器	完形	100% 完形	自然縁辺のまま素材として利用、主剥離面側に加工痕・調整痕が認められる、自然縁辺の一部に微細な刃こぼれ痕が認められる、長さ 3.8㎝・幅 1.1㎝・厚さ 0.6㎝・重量 2.8 g・石材：サヌカイト
103	図50	図版39	292	30	2008－Ⅶ区 C12－s2 地点 30	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	スクレイ パー	完形	100% 完形	表面先端部に刃部、両側縁全体に片面からの調整痕、長さ 3.1㎝･幅 1.4㎝･厚さ 0.7㎝･重量 2.8 g･石材：サヌカイト
104	図50	図版39	291	20	2008－Ⅶ区 C12－p2 地点 16	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	錐状石器	完形	100% 完形	上側に打撃点があり上端部は凹面状を呈する、両側縁に片面からの調整痕、長さ 2.3㎝・幅 2.4㎝・厚さ 0.7㎝・重量 4.2 g・石材：サヌカイト
105	図50	図版39	293	16	2008－Ⅶ区 C12－p1 地点 10	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	スクレイ パー	完形	100% 完形	横長剥片石核と思われる、短軸の一端に調整を施したスクレイパー、末端に調整痕、表面に自然面が遺存する、長さ 4.5㎝・幅 2.4㎝・厚さ 1.3㎝・重量 16.2 g・石材：サヌカイト
106	図50	図版39	294	40	2008－Ⅶ区 C12－t4 地点 38	下位面 粗砂細礫層	――	旧石器	スクレイ パー	完形	100% 完形	刃部に僅かな調整痕が認められる、スクレイパーの可能性あり、長さ 3.2㎝・幅 4.5㎝・厚さ 1.0㎝・重量 11.2 g・石材：サヌカイト
107	図50	図版39	116	184	2006－Ⅱ区 E12－q5	――	1 落ち 第 5 層系一括 第 6 層含む	旧石器	縦長剥片	剥片	100% 完形	表面の一部は自然面の可能性あり、打面の新しい割れにより打点が不明瞭となる、調整痕が認められない、長さ 5.0㎝･幅 2.1㎝･厚さ 0.8㎝･重量 6.6 g･石材：チャート
108	図50	図版39	117	178	2006－Ⅱ区 E12－r4 西半	――	1 落ち 第 6 層系一括	旧石器	横長剥片	剥片	100% 完形	表面に横 90°からの打面調整、打点部分がカットされている可能性あり（ナイフ形石器を作る素材の可能性あり）、長さ 5.6㎝･幅 2.7㎝･厚さ 0.5 ～ 0.8㎝･重量 9.2 g・石材：サヌカイト
109	図51	図版40	122	124	2006－Ⅱ区 E12－n3	――	1 落ち 第 4 層一括	石器	石鏃	――	約 95%	縄文、先端部･基部の一部欠損、凹基式、長さ（2.0㎝）・幅 1.1㎝・厚さ 0.3㎝・重量（0.4 g）・石材：サヌカイト
110	図51	図版40	121	43	2006－Ⅱ区 E12－p8.9	第 3 層系包含層 上部一括	――	石器	石鏃	――	約 95%	縄文、先端部僅かに欠損か、腹部の両側縁に浅い快り状の剥離痕、平基式、長さ（2.5㎝）・幅 1.3㎝・厚さ 0.3㎝・重量（1.2 g）・石材：サヌカイト
111	図51	図版40	145	8	2006－Ⅲ区北半 E13－n･o25	第 3 層系	――	石器	石錐	――	100% 完形	全体に粗い細部調整、先端部は使用による欠損あり、長さ 3.1㎝･幅 1.4㎝･厚さ 0.8㎝･重量 3.0 g･石材：サヌカイト
112	図51	図版40	49	35	2006－Ⅱ区 E12－q5	第 3 層系包含最下部 南壁側溝内断面	――	鉛製品	鉄砲弾	――	完形	型合せ痕が明確に残る、2 分割する位置に 2 条の高い線状の盛り上がり、そこから 90°の位置に低い線状の盛り上がり、径 1.15㎝・重量 8.88 g
113	図51	図版40	13	58	2006－Ⅱ区 E12－o6	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	――	弥生土器	甕	口縁部	5%以下	弥生時代後期中葉、胎土に石英・チャート・長石・砂岩・花崗片麻岩 M ～ LL 円礫多量含む、反転復元
114	図51	図版40	14	68	2006－Ⅱ区 E12－o4	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	――	弥生土器	高坏	基部	不明	弥生時代後期、胎土に花崗片麻岩・長石・チャート・石英 M ～ LL 極めて多量含む、磨滅著しい、脚部反転復元
115	図51	図版40	131	49	2006－Ⅲ区北半 E13－n24	第 3 層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	――	礫石器	凹石	凹部	不明	縄文、石材の磨滅・風化著しいため敲打痕不明瞭、長さ（11.1㎝）･幅（11.5㎝）･厚さ（2.7 ～ 3.5㎝）･重量（663 g）・石材：砂岩
116	図51	図版40	137	56	2006－Ⅲ区北半 E14－n1	第 3 層系包含層除去面 基盤層直上	15 土坑一括	礫石器	石皿	――	不明	弥生か、砥石として兼用か、長さ（13.4㎝）･幅（6.8㎝）・厚さ 6.3㎝・重量（804 g）・石材：砂岩
117	図51	図版40	175	46	2007－Ⅲ区 c12－i2	――	1 溝 最下層 基底部	礫石器	砥石	――	不明	砥面は四面、図示した一面がもっとも滑らかで凹面を成す、その対称となる裏面も滑らかになるが凸面が残る、一面は凹面を成し多数の敲打痕が残る、長さ（16.5㎝）・幅 6.5㎝・厚さ 7.8㎝・重量（1489 g）・石材：砂岩
201	―	図版32	91	268	2006－Ⅰ区 E11－j25	第 5 層系一括	――	須恵器	蓋	口縁部	約 10%	やや厚みのある天井部から厚く丸みのある口縁端部に延びる、天井部外面はヘラケズリか、ロクロ回転方向：左回り、天井部外面に自然釉薄く付着、未実測
202	―	図版32	92	268	2006－Ⅰ区 E11－j25	第 5 層系一括	――	土師器	小椀	底部（高台部）	約 50%	外面に大きく広がる高台部、焼成遺存やや軟質化、未実測
203	―	図版32	97	238	2006－Ⅰ区 E11－g19	51 谷状落ちより上？	52 石列西側	白磁	碗	底部（高台部）	約 30%	内面見込と体部の境目に圏線 1 条、内面に細かい貫入多数あり、外面露胎、太宰府分類白磁碗Ⅴ 1a 類、ロクロ回転方向：左回り、未実測
204	―	図版32	103	250	2006－Ⅰ区 E11－g21	――	51 谷状落ち 第 7a 層	瓦器	椀	底部（高台部）	約 90%	凹み底状の平均した厚みの底部から腰部に延びる、見込暗文は幅 2 ～ 3㎜整った連結輪状、内面側壁のミガキは不明、焼成遺存やや磨滅ぎみ（胎土 A> 胎土 B）、未実測

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
205	—	図版32	105	245	2006－Ⅰ区 E11－h19	———	51 谷状落ち 東側肩口 第 7a 層	瓦器	椀	底部（高台部）	約 50%	平均した厚みの底部から腰部に延びる、見込暗文は幅 3㎜粗く乱雑な連結輪状、内面側壁のミガキは不明、高台は逆台形状、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、未実測
206	—	図版32	108	285	2006－Ⅰ区 E11－g19	———	52 石列状遺構 第 5 層礫多量	瓦質	三足釜	口縁部	5%以下	内湾して立ち上がり、口縁端部で内側に丸く肥厚する、胎土に流紋岩・長石・石英 S・M 多量含む、焼成遺存二次焼成のため硬化、未実測
207	—	図版32	109	285	2006－Ⅰ区 E11－g19	———	52 石列状遺構 第 5 層礫多量	瓦質	三足釜	脚部	不明	206（実 108）と同一個体、脚部外側に縦方向のヘラナデ調整、焼成遺存二次焼成のため硬化、未実測
208	—	図版32	110	257	2006－Ⅰ区 E11－h23	———	51 谷状落ち 第 7a 層～ c 層 一括	須恵器	蓋	天井部～ 口縁部	約 10% 約 10%	整った器形、天井部の約 2/3 は軽い回転ヘラケズリ、胎土は極めて緻密、焼成遺存良好堅緻、ロクロ回転方向：右回り、未実測
209	—	図版32	111	269	2006－Ⅰ区 E11－i18･19	———	51 谷状落ち 第 7a 層～ c 層 一括	瓦器	椀	底部（高台部）	約 50%	平均した厚みの底部から腰部に延びる、見込暗文は太く幅 2 ～ 3㎜丁寧な連結輪状、高台は逆三角形状、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、未実測
210	—	図版33	7	102	2006－Ⅱ区 E12－n4	第 2 層系・第 3 層系 包含層一括 遺構埋土含む	———	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	器壁が薄く小型品、ロクロ回転方向：左回り、第Ⅲ期第 1 段階、未実測
211	—	図版33	8	126	2006－Ⅱ区 E12－n2	第 2 層系包含層一括 第 3 層系包含層上部 一括	———	備前	擂鉢	口縁部	5%以下	胎土に凝灰岩質 3 L 微量含む、乗岡編年中世 5a 期、間壁編年Ⅳ B 期、未実測
212	—	図版33	9	125	2006－Ⅱ区 E12－k3	第 2 層系包含層 第 3 層系包含層上部 一括	———	備前	擂鉢	体部～底部	5%以下	胎土に凝灰岩・流紋岩 S ～ 3 L 多量含む、内面使用磨滅痕あり、擂り目 7 条、ロクロ回転方向 : 左回り、未実測
213	—	図版33	10	171	2006－Ⅱ区 E12－k1	第 2 層系一括 第 3 層系包含層上部 一括	———	青磁	碗	口縁部	5%以下	色調明オリーブ灰 5GY7/1 を呈する、浅い縞蓮弁文、太宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ 5 b 類、未実測
214	—	図版33	11	143	2006－Ⅱ区 E12－m1	第 2 層系一括 第 3 層系包含層上部 一括	———	土師器	管状土錘	———	約 40%	外径 1.3㎝・内径 0.5㎝・長さ（3.3㎝）・重量（4.6 g）未実測
215	—	図版33	26	32	2006－Ⅱ区 E12－q5	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	———	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 50%	平坦な底部から内湾ぎみに延びる口縁部へ続く、口縁端部は工具によるナデのため内傾する面を成す、焼成遺存良好堅緻（胎土 A）、未実測
216	—	図版33	27	89	2006－Ⅱ区 E12－ℓ 6	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	———	瓦器	小皿	口縁部～底部	約 25%	斜め外方に延びる口縁部、磨滅ぎみで焼成遺存やや軟質（胎土 B.）、未実測
217	—	図版33	28	93	2006－Ⅱ区 E12－n6	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	———	瓦器	椀	口縁部～ 体部	5%以下 約 10%	口縁端部は緩やかに外反ぎみ、内面側壁のミガキは比較的細く幅 1㎜やや粗く施こされる、見込暗文は不明、外面磨滅ぎみで焼成遺存堅緻（胎土 A> 胎土 B）、未実測
218	—	図版33	29	51	2006－Ⅱ区 E12－p7	第 3 層系包含層一括	———	瓦器	椀	口縁部～ 体部	約 10% 約 10%	内面側壁のミガキはやや太く幅 2㎜、かなり粗く施こされる、口縁部かなり歪つ、内外面共に磨滅ぎみで焼成遺存やや堅緻（胎土 B）、未実測
219	—	図版34	33	74	2006－Ⅱ区 E12－n7	第 3 層系包含層一括 遺構埋土含む	———	土師器	土釜 A	口縁部	約 20%	図 47－32（実 32）と同形態・同胎土（A 胎土）、口縁部端面以下の外面に煤薄く付着、未実測
220	—	図版34	35	56	2006－Ⅱ区 E12－n6	第 3 層系包含層一括	———	瓦質	土釜	鍔部	約 10%	胎土に長石・石英・チャート SS ～ LL 中量含む、磨滅著しい、未実測
221	—	図版34	36	50	2006－Ⅱ区 E12－n7	第 3 層系包含層一括	———	瓦質	火舎	底部	5%以下	厚い底部から斜め外方に直線的に延びる体部、磨滅著しいため調整不明、未実測
222	—	図版34	38	12	2006－Ⅱ区 E12－k3	第 3 層系一括 遺構埋土含む	———	須恵器 東播系	捏鉢	口縁部	5%以下	やや軟質、第Ⅱ期第 2 段階、未実測
223	—	図版34	39	14	2006－Ⅱ区 E12－k1	第 3 層系一括 遺構埋土含む	———	須恵器 東播系	捏鉢	体部～底部	5%以下	底部外面の一部に布目状圧痕が認められる、ロクロ回転方向：右回り、未実測
224	—	図版34	42	9	2006－Ⅱ区 E12－k6	第 3 層系一括 遺構埋土含む	———	青磁	小碗？	口縁部～体部	5%以下	外面体部に 1 条の圏線様の線あり、未実測
225	—	図版34	48	46	2006－Ⅱ区 E12－o8・9	第 3 層系包含層下部 大半、遺構埋土？	———	瀬戸美濃	おろし皿	底部	5%以下	見込におろし目、外底は静止糸切り、未実測
226	—	図版34	50	43	2006－Ⅱ区 E12－p8・9	第 3 層系包含層 上部一括	———	白磁	角坏	腰部～体部	不明	遺存部が少ないが五角坏か、釉調は乳濁色、底部に露胎部分有り、未実測
227	—	図版35	51	123	2006－Ⅱ区 E12－n3	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層	須恵器	坏	口縁部～腰部	約 10%	口縁部はやや内湾して立ち上がり端部を丸く納める、内外面共に自然釉薄く付着、焼成良好、未実測
228	—	図版35	52	144	2006－Ⅱ区 E12－j2	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層系	須恵器	蓋	天井部～摘み部	遺存部位 100%	扁平な天井部に扁平な摘み部を付す、外面に自然釉薄く付着、Ⅳ型式 1 段階の範疇か、未実測
229	—	図版35	53	136	2006－Ⅱ区 E12－ℓ 3	下部遺構埋土含む	1 落ち 第 5 層系一括	須恵器	高坏	基部～脚柱部	不明	杯部内面 N4/0 灰色、杯部～脚柱部外面に自然釉薄く付着、未実測
230	—	図版35	54	133	2006－Ⅱ区 E12－n3	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層系一括	須恵器	甕	口縁部	不明	口縁部は大きく外反し端部は下方に肥厚する、口縁部端面及び肥厚部下面以外に自然釉やや厚く付着、未実測
231	—	図版35	58	107 (136)	2006－Ⅱ区 E12－ℓ 4	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層一括	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は布目痕のち左下側から右上がり斜め方向の粗いハケ調整、凸面は格子叩きのち右下側から左上がり斜め方向の粗いハケ調整、焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
232	—	図版35	59	174	2006－Ⅱ区 E12－n7	第 5 層除去面 ベース直上	踏み込み一括	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は布目痕のち下側から上方向の粗いハケ調整、凸面は格子叩きのち下側からやや斜め上方向の粗いハケ調整、焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
233	—	図版35	65	156	2006－Ⅱ区 E12－ℓ 2 北半	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層系一括	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	5%以下 約 20%	やや扁平な底部から緩く内湾して短い口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化（胎土 B）、未実測
234	—	図版35	67	104	2006－Ⅱ区 E12－k4	一部、第 3 層系包含 層下部含む？	1 落ち一括 第 5 層一括	瓦器	椀	口縁部	約 10%	薄い体部からやや内湾ぎみの口縁部に延びる、口縁端部に内傾する面を成す、燻しは殆ど遺存しないが焼成遺存極めて良好堅緻、未実測
235	—	図版36	71	168	2006－Ⅱ区 E12－i1	一部、第 3 層系包含 層下部含む	1 落ち 第 5 層系一括	須恵器	甕	頸部	不明	緩やかに外反する頸部、強い回転ナデのち一本引き波状文、胎土は緻密、焼成やや軟質化、ロクロ回転方向：右回り、Ⅲ型式 2 段階、出土登録 184、186 と同一個体、未実測
236	—	図版36	73	183	2006－Ⅱ区 E12－q4	———	1 落ち 第 5 層系一括 第 6 層含む	瓦器	椀	底部（高台部）	約 30%	厚みの整った体部、高台は低く逆三角形状を呈する、見込暗文は幅 2㎜やや粗く連結輪状から内面側壁のミガキに連続する、焼成遺存やや軟質化（胎土 B）、未実測
237	—	図版36	76	185	2006－Ⅱ区 E12－p3	———	1 落ち 第 5 層系一括 第 6 層含む	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 10% 約 20%	整った底部からやや外反して短い口縁部に延びる、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化（胎土 B）、未実測
238	—	図版37	123	23	2006－Ⅲ区北半 E14－n1	第 3 層系包含層一括 撹乱含む	———	須恵器	坏？	口縁部	不明	直線的に外傾する口縁部、口縁端部は外側に軽く摘み出し上端に面を成す、内面に自然釉薄く付着、未実測

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 整地層・堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
239	—	図版37	124	16	2006－Ⅲ区北半 E14－n4	第３層系 遺構埋土含む？	―――	須恵器	坏Ｂ	底部（高台部）	約 95%	厚みのある高台、腰部から屈曲して体部に続く、外面全体に自然釉薄く付着、ロクロ回転方向：右回り、未実測
240	—	図版37	128	31	2006－Ⅲ区北半 E13－n24 北半	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	約 20% 約 20%	やや内湾ぎみの底部から器壁の薄い短い口縁部に延びる、焼成遺存軟質化（胎土 B）、未実測
241	—	図版37	134	47	2006－Ⅲ区北半 E13－n25	第３層系包含層 下部一括 遺構埋土含む	―――	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面細かい布目痕、凸面は格子叩き、焼成遺存極めて堅緻、未実測
242	—	図版37	143	57	2006－Ⅲ区南半 E14－n7	基盤層直上 中世包含層含む	―――	土師器	土釜Ａ	口頸部	不明	「く」の字に屈曲する口頸部、口縁端部は内側上方に摘み上げる、胎土に長石・片岩・チャートＭ・Ｌ角礫を極めて多量含む、焼成遺存二次焼成のため硬化、未実測
243	—	図版37	144	58	2006－Ⅲ区南半	埋土	36（スキ溝）	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面細かい布目痕、凸面は細かめの格子叩き、焼成遺存極めて堅緻、未実測
244	—	図版38	151	33	2007－Ⅲ区 C11－j･k25	―――	１溝 上層、中層	黒色土器Ａ類	椀	体部	不明	器壁の厚い体部、二段の横ナデ、未実測
245	—	図版38	156	21	2007－Ⅲ区 c11－j25	―――	１溝 中層・下層 図の３以下	須恵器	坏	口縁部	約 5%	ロクロ回転方向：右回り、Ⅱ型式６段階、未実測
246	—	図版38	157	34	2007－Ⅲ区 c11－j･k25	―――	１溝 中層・下層 一部最下層含む	土師器	甕	口頸部	不明	奈良、器壁の厚い「く」の字に屈曲する口頸部、内面体部はヘラ状具によるナデ、口縁部は歪つ、胎土に 8㎜の砂岩を含む、未実測
247	—	図版38	163	14	2007－Ⅲ区 c12－i2	―――	１溝 中層・下層 図の３以下	瓦器	椀	体部～ 底部（高台部）	約 40% 100%	緩やかに内湾する底・体部、見込暗文は不明、内面側壁のミガキは太く幅 4㎜、内外面磨滅著しく調整不明瞭、焼成遺存軟質化（胎土 B）、未実測
248	—	図版39	169	39	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	１溝北側 最下層	黒色土器Ａ類	椀	口縁部～ 体部	約 5% 約 5%	やや内湾ぎみの底部から緩やかに体部・口縁部へ続く、口縁部はやや肥厚ぎみ、内外面共に磨滅著しいため調整不明瞭、未実測
249	—	図版39	171	47	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	１溝重複部 最下層より下位	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は摸骨痕＋細かい布目痕、凸面は斜格子叩き、焼成遺存良好堅緻、厚み２～ 2.2㎝、未実測
250	—	図版39	172	36	2007－Ⅲ区 c11－j･k25	―――	１溝 最下層	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は細かい布目痕、後縦方向のヘラ状工具の当たり、凸面は非常に粗い格子状の浅い叩き、厚さ２～ 2.2㎝、未実測
251	—	図版39	181	3	2008－Ⅰ区 西側 1/4 西 F12－ℓ 10･11	包含層第３層系	―――	土製品	土錘	―――	100% 完形	細長い管状土錘、焼成遺存良好堅緻、巻き上げ成形痕残る、長さ 3.8㎝・外径 0.7㎝・内径 0.25㎝・重量 2.2 ｇ、未実測
301	—	図版39	118	81	2006－Ⅱ区 E12－p4	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	旧石器	縦長剥片	剥片	100% 完形	非常に形の整った縦長剥片、背面に放散虫化石が認められる、長さ 3.1㎝・幅 2.2㎝・厚さ 1.1㎝・重量 5.0 ｇ・石材：赤色チャート、未実測
302	—	図版39	119	71	2006－Ⅱ区 E12－r5	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	旧石器	横長剥片	剥片	100% 完形	長さ 3.7㎝・幅 4.9㎝・厚さ 0.6㎝・重量 19.2 ｇ・石材：サヌカイト、未実測
303	—	図版39	120	31	2006－Ⅱ区 E12－ｑ６	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	旧石器	縦長剥片	剥片	100% 完形	幅広の石刃状縦長剥片、長さ 3.7㎝・幅 3.1㎝・厚さ 0.8㎝・重量 10.2 ｇ・石材：凝灰岩、未実測
304	—	図版39	264	50	2008－Ⅲ区 C12－r1	―――	30 土坑 埋土一括北半 撹乱？	旧石器	錐状石器	完形	100% 完形	長さ 3.7㎝・幅 2.5㎝・厚さ 1.6㎝・重量 13.6 ｇ・石材：サヌカイト、未実測
305	—	図版39	265	59	2008－Ⅲ区 C12－t2	調査区南壁 補足調査	自然流路	旧石器	縦長剥片	―――	不明	長さ（2.5㎝）・幅 4.5㎝・厚さ 0.8 ～ 0.9㎝・重量（11.8 ｇ）・石材：凝灰岩、未実測
306	—	図版40	234	147	2008－Ⅱ区 1/2 西側 E12－q18 東端	―――	踏み込み？ 第４層系 or ベースⅠ？	石器	石鏃	―――	約 98% ほぼ完形	縄文、凹基無茎式、裏面の主稜線は弱い、先端一部欠損、長さ（2.3㎝）･幅 1.4㎝･重量（0.8 ｇ）･石材：サヌカイト、未実測
307	—	図版40	210	39	2008－Ⅱ区 1/2 東側 E12－k20	包含層第４層	―――	銭貨	―――	―――	約 90%	□宋通寶、磨滅のため銭文不明瞭、外径 2.4㎝・輪幅 0.35㎝・内径 1.6㎝・郭 0.65㎝・厚さ 0.1㎝・重量（2.8 ｇ）未拓本
308	—	図版40	15	82	2006－Ⅱ区 E12－p3	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	弥生土器	高坏	基部	不明	脚台部基部側は中実、胎土に長石・チャートＳ少量含む、未実測
309	—	図版40	132	51	2006－Ⅲ区北半 E14－m1	第３層系包含層 下部一括	―――	弥生土器	甕	底部	不明	弥生前期か、ややくびれ底、胎土にチャート･長石･石英Ｓ・Ｍ亜円礫を多量含む、二次焼成にて赤変、未実測
310	—	図版40	12	139	2006－Ⅱ区 E12－m2	第２層系一括 第３層系包含層上部 一括	―――	礫石器	敲石	完形	100% 完形	両側縁に細かい敲打痕あり、幅 4.3㎝・長さ 5.1㎝・厚さ 2.7㎝・重量 84.8 ｇ・石材：粗粒砂岩、未実測
311	—	図版40	114	256	2006－Ⅰ区 E11－g23	―――	51 谷状落ち 第 7a 層～ｃ層 一括	礫石器	石皿	―――	不明	全体形がないが弥生時代の石皿と判断、縄文時代の可能性もあり、石材の両面に磨り減りが認められる、長さ（6. 4㎝）･幅（4.8㎝）･厚さ（2.4 ～ 4.1㎝）･重量（214 ｇ）、石材：細粒砂岩（石英粒多い）、未実測
312	—	図版40	44	60	2006－Ⅱ区 E12－n5	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	礫石器	砥石	―――	不明	中世、遺存三面使用、石材:細粒砂岩、幅（2.4㎝）･長さ（4.5㎝）･厚さ（0.3 ～ 1.4㎝）･重量（15 ｇ）、未実測
313	—	図版40	45	87	2006－Ⅱ区 E12－ℓ７	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	礫石器	台石	―――	不明	弥生、中央部に細かい敲打痕が集中して認められる、石材:中粒砂岩､幅（6.7㎝）･長さ（9.8㎝）･厚み（1.8㎝）・重量（146 ｇ）、未実測
314	—	図版40	46	58	2006－Ⅱ区 E12－o6	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	礫石器	砥石	―――	不明	中世か？、二面使用、一部被熱、石材：中粒砂岩、幅（4.3㎝）･長さ（7.7㎝）･厚さ（1.2㎝）･重量（53 ｇ）、未実測
315	—	図版40	47	76	2006－Ⅱ区 E12－ℓ７	第３層系包含層一括 遺構埋土含む	―――	礫石器	砥石	―――	不明	中世か？二面使用、石材：中粒砂岩、石材として軟質、幅（3.0 ～ 8.0㎝）・長さ（9.8㎝）・厚さ（2.5㎝）・重量（228 ｇ）、未実測
316	—	図版40	164	21	2007－Ⅲ区 c11－j25	―――	１溝 中層・下層 図の３以下	石製品	石棒？	―――	不明	先端部がやや平坦な面を成す、長さ（21.7㎝）・幅（7.0 ～ 8.5㎝）・厚さ（5.3㎝）・重量（1570 ｇ）・石材：砂質片岩、未実測
317	—	図版40	173	39	2007－Ⅲ区 c11－k25	―――	１溝北側 最下層	礫石器	敲石	―――	100% 完形	片側の先端部に敲打痕あり、長さ 16.5㎝･幅 7.2㎝･厚さ 3.8㎝・重量 56 ｇ・石材：砂岩、未実測
318	—	図版40	174	31	2007－Ⅲ区 c12－j1	―――	１溝 最下層 図 8･9	礫石器	砥石	―――	不明	砥面は二面、一面は凸面が残るが滑らか、一面はザラつくが平坦面を成す、被熱痕のため一部黒ずむ、長さ（11.5㎝）・幅 7.0㎝・厚さ 4.8㎝・重量（548 ｇ）・石材：砂岩、未実測
319	—	図版40	256	14	2008－Ⅲ区 C12－x4	―――	１粘土採掘坑 埋土一括上位	礫石器	砥石	―――	不明	裏面剥離のため欠損、上下両端面・側面片面に成形痕あり、長さ 9.2㎝・幅 3.2㎝・厚さ（1.0㎝）・重量（60.4 ｇ）・石材：粘板岩、未実測

報告書抄録

ふりがな	ふじなみちくいせき
書名	藤並地区遺跡
副書名	県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	土井孝之
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8404　和歌山市湊571－1　TEL　073-433-3843
発行年月日	西暦2012年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふじなみちくいせき 藤並地区遺跡	わかやまけんありだぐん 和歌山県有田郡 ありだがわちょう 有田川町 はぶ・みょうおうじ・みずじり 土生・明王寺・水尻	303666	吉備地区 32	34° 3′ 22″	135° 12′ 2″	第1次調査 20061219～ 20070316	1,807	吉備金屋線 道路改良工事
						第2次調査 20070502～ 20070713	608	
						第3次調査 20080501～ 20080815	1,472	
						第4次調査 20081017～ 20081226	765	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤並地区遺跡	散布地	旧石器時代	自然流路（土砂流による粗砂細礫層堆積）、土坑	ナイフ形石器・スクレイパー・錐状石器、縦長剥片・横長剥片など	少量ながら、ナイフ形石器が主体となる石器群。
		飛鳥・奈良時代	掘立柱建物	土師器（椀・甕）、黒色土器（椀）、須恵器（坏・蓋・壺・甕・陶棺）、瓦（平瓦）など	遺物の殆んどが、中世の水田耕作土・踏み込みから出土。
		平安時代	掘立柱穴、溝、井戸	土師器（椀・小皿）、黒色土器（坏・椀）など	当該期の出土遺物の地区が2007－Ⅲ区に限定。
		鎌倉時代	粘土採掘土坑、谷状落ち込み、水田跡	土師器（皿・小皿・土釜）、瓦器（椀・小椀・小皿・甕）、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁碗、白磁碗）など	遺物全体の中では、比率的に最も多い段階。二次的な水田耕作土からの出土。
		室町時代	井戸、石列状遺構、水田跡、噴砂	土師器（土釜）、瓦質（甕・火舎）、陶器（備前・志野）、鉄砲弾	二次的な水田耕作土からの出土。

要約

2007－Ⅲ区、2008－Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅶ区の下位層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する1990年調査M地区及び土生池遺跡（25）周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器石器群という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうることができる。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイト製ナイフ形石器・サヌカイト製横長剥片・チャート若しくは凝灰岩（硬質頁岩）製縦長剥片・サヌカイト製錐状石器、その他のサヌカイト・凝灰岩（硬質頁岩）・チャート製剥片がある。

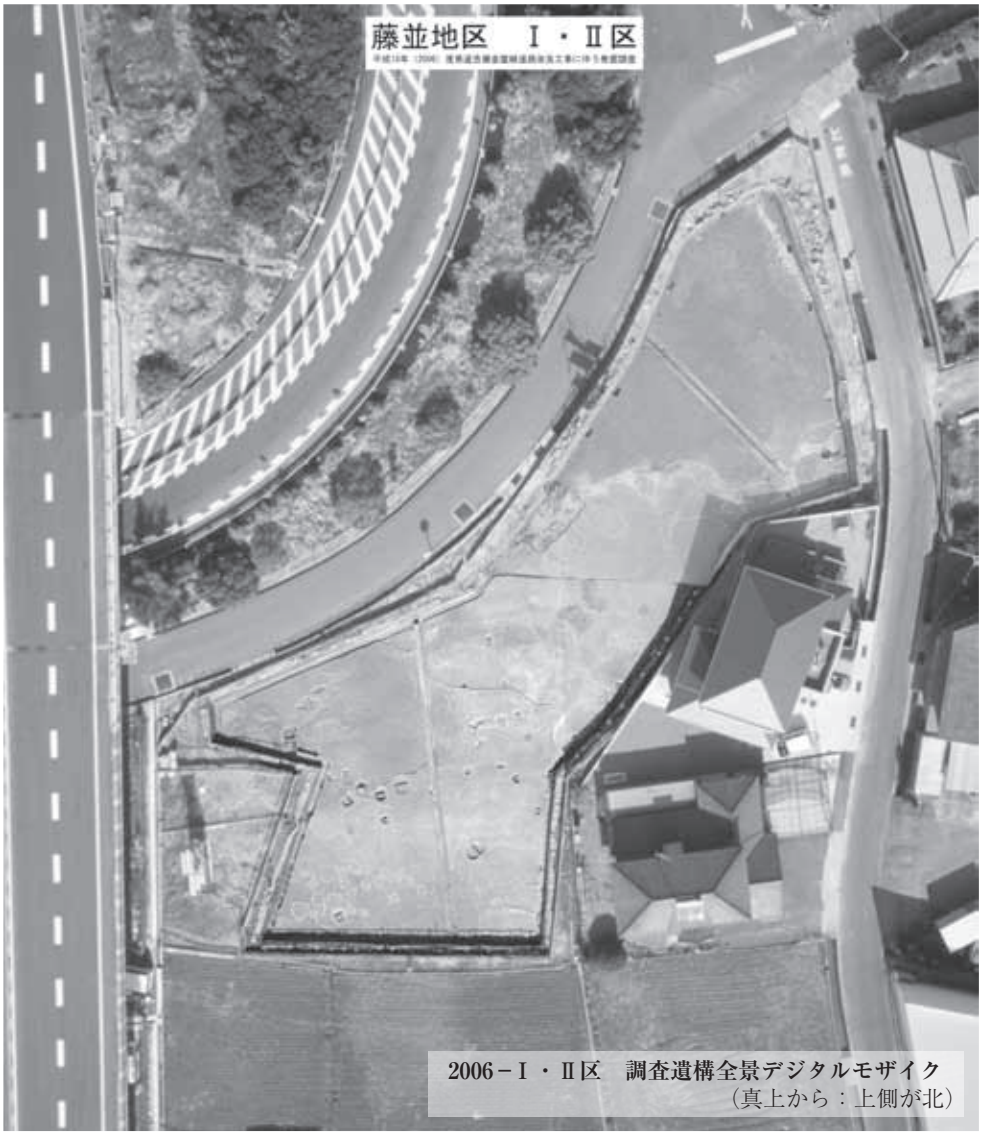
飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包含層（水田耕作土）からの出土であるため、全ての地区において窯場からの集積を反映したものでないことが確実視されることとなった。出土遺物の中には飛鳥Ⅱの段階の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008－Ⅱ区において、単独で検出した奈良時代の掘立柱建物は、関連時期の遺構が全くないことからその位置付けを明確にすることができていない。

平安時代後期は、掘立柱や溝を検出した2007－Ⅲ区のみに当該期の遺構・遺物が集中して認められることから、東側に水路を挟んで展開する未周知の遺跡に関与することが濃厚であると考えられる。

平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007－Ⅲ区の良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007－Ⅲ区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含（包含層第3層・第4層）として位置付け理解しうる。

写　真　図　版

2006－Ⅰ区　調査遺構全景と湯浅御坊道路
（北北東上空から）

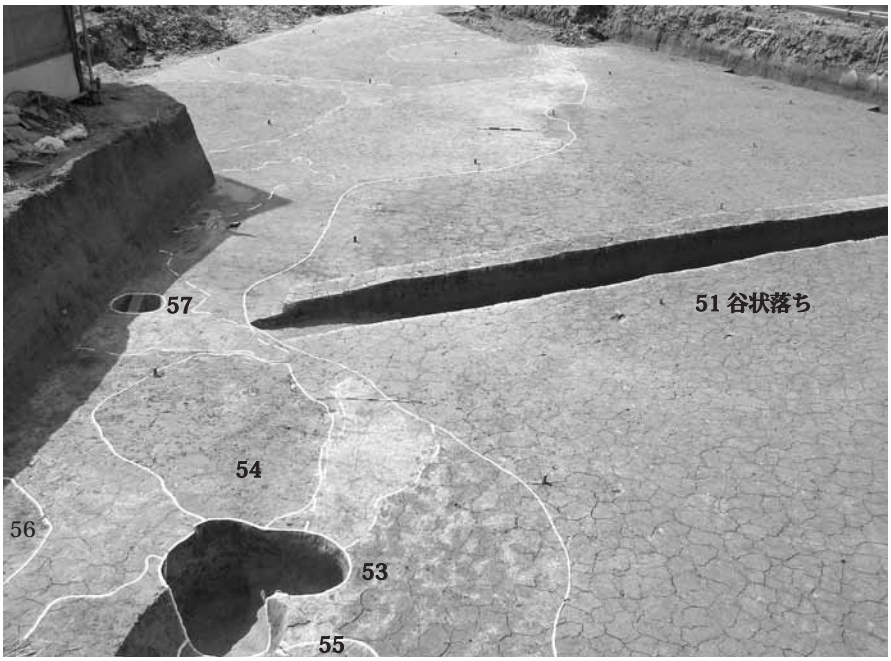


2006－Ⅰ・Ⅱ区　調査遺構全景デジタルモザイク
（真上から：上側が北）

2006－Ⅲ区　調査遺構全景デジタルモザイク
（真上から：上側が北）

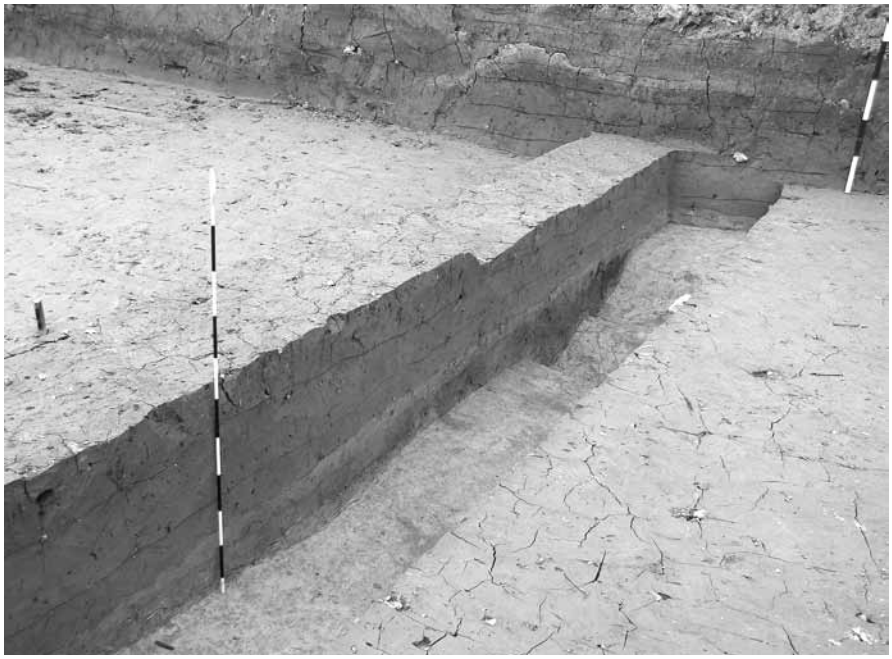
1　2006－Ⅰ区　調査遺構全景（北東上空から）

2　2006－Ⅰ区　調査遺構全景（南西から）

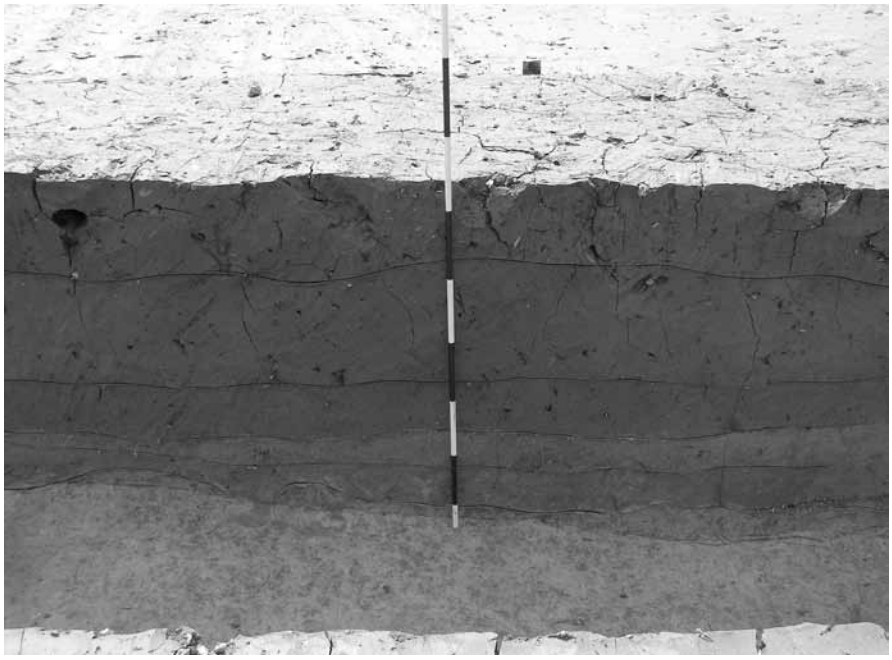


3　2006－Ⅰ区　粘土採土掘坑群と51谷状落ち肩部（東北東から）

1　2006－Ⅰ区　51谷状落ち断面土層全景（東南東から）

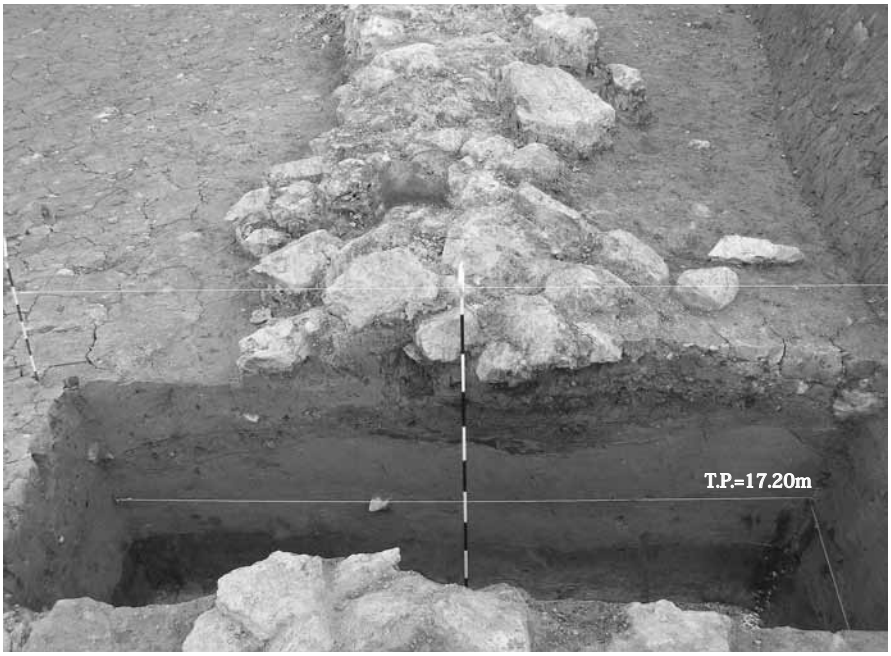


2　2006－Ⅰ区　51谷状落ち北半部断面土層細部（東南東から）



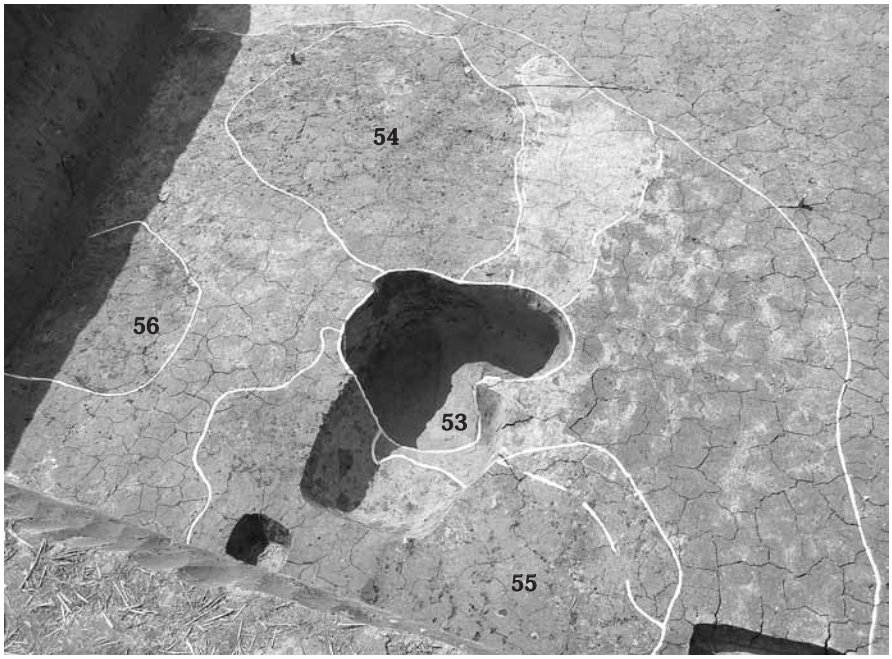
3　2006－Ⅰ区E11－h・i22　51谷状落ち断面土層細部（北東から）

1　2006－Ⅰ区　52石列状遺構（南南東から）

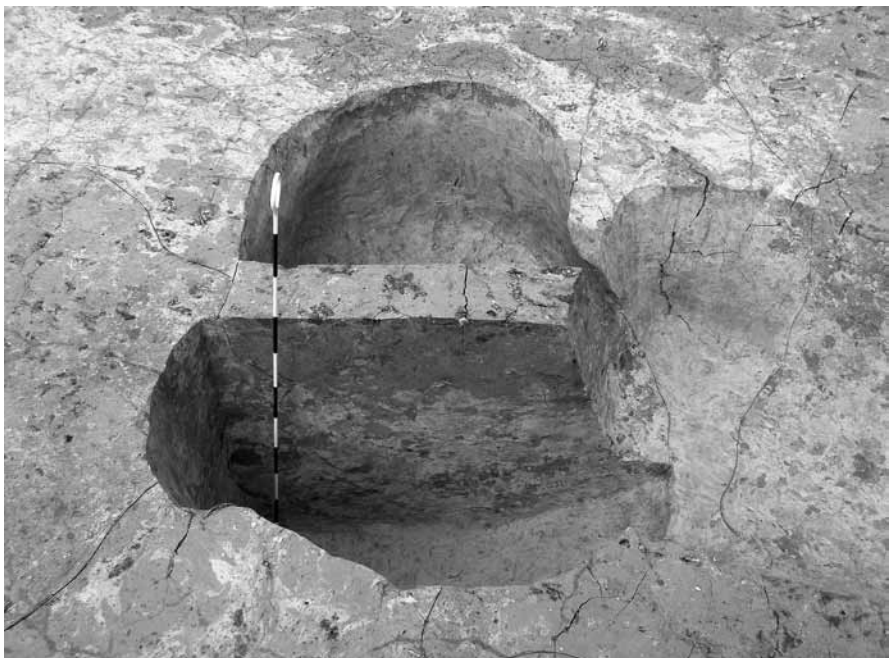


2　2006－Ⅰ区E11－g19　52石列状遺構の断面状況（南南東から）

3　2006－Ⅰ区E11－g19　52石列状遺構に関係する遺物出土状況（西南西から）



1　2006－Ⅰ区E11－f23　粘土採掘土坑群の状況（東北東から）



2　2006－Ⅰ区E11－f23　53粘土採掘土坑東西断面土層（南南東から）

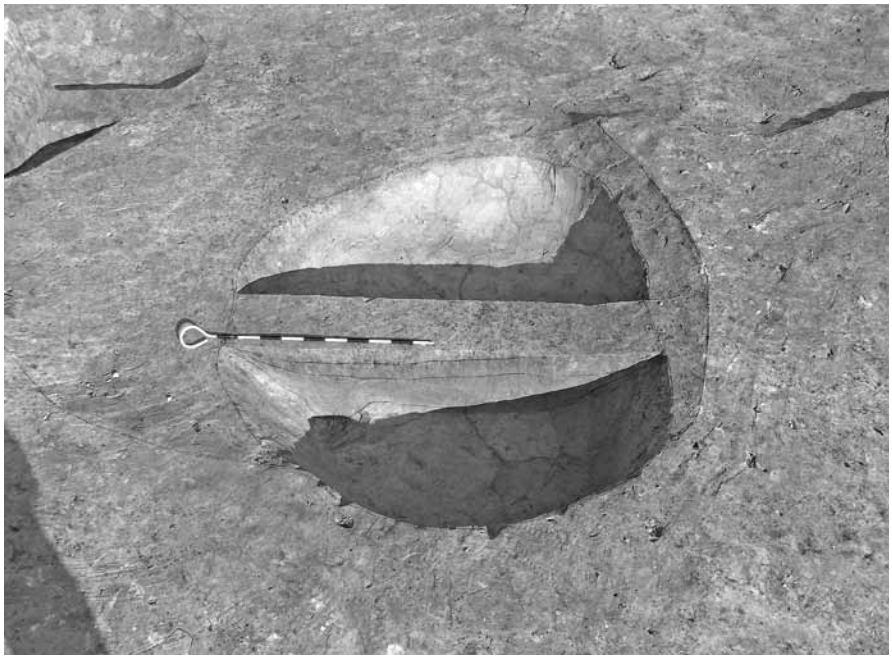
3　2006－Ⅰ区E11－h25　調査区南東壁第６層系踏み込み遺構の遺物出土状況（北西から）

1　2006－Ⅱ区　調査遺構全景（真上から：右側が北）

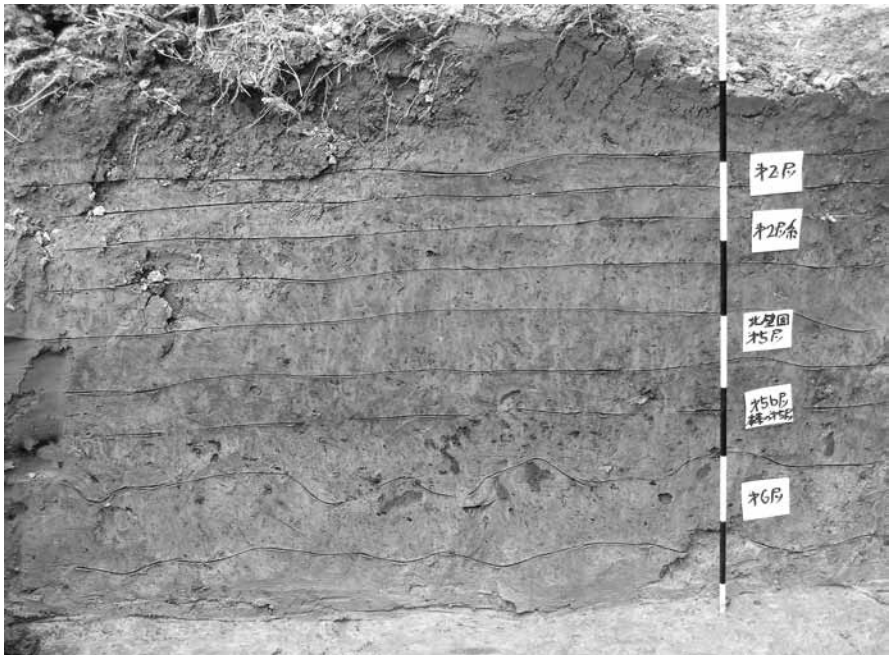
2　2006－Ⅱ区　調査遺構全景（北東から）

3　2006－Ⅱ区　土坑群の堀削状況（西南西から）

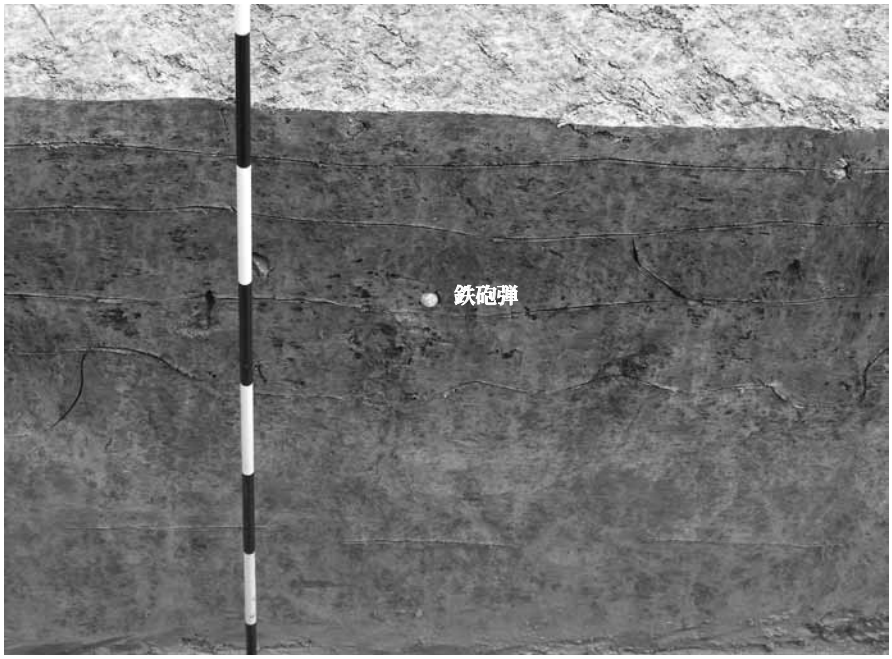
写真図版6　2006－Ⅱ区　検出遺構



1　2006－Ⅱ区E12－o5・6　6土坑東西断面土層（南から）

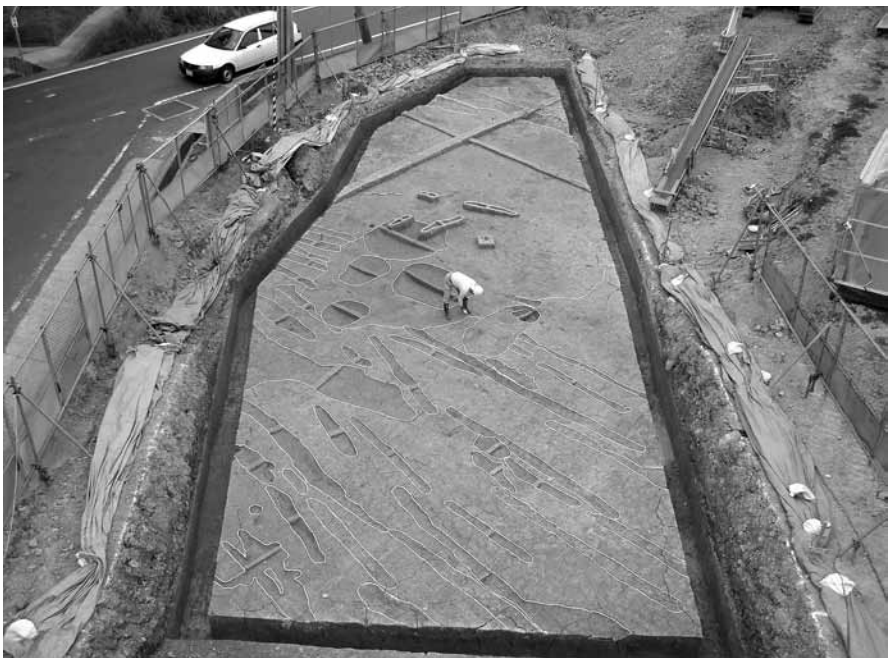


2　2006－Ⅱ区E12－i1　調査区北壁断面土層細部（南から）

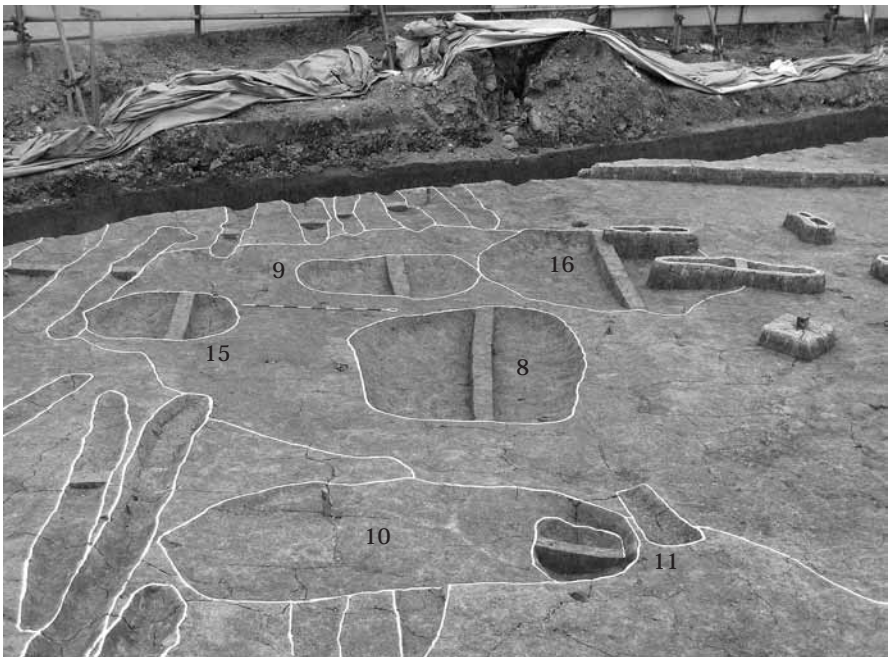


3　2006－Ⅱ区E12－q5　鉄砲弾出土状況細部（南南西から）

1　2006－Ⅲ区北半　調査遺構全景（真上から：右側が北）



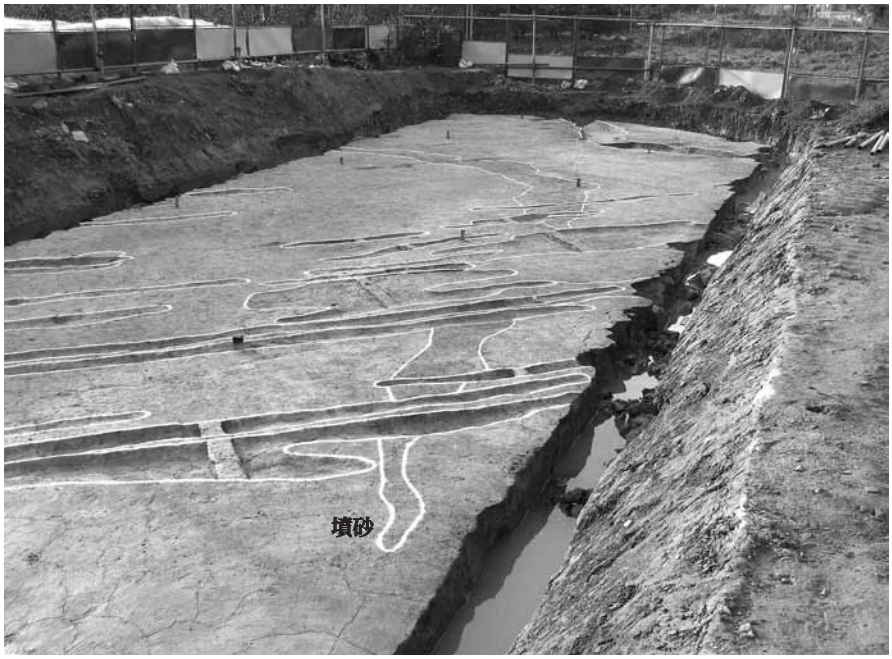
2　2006－Ⅲ区北半　調査遺構全景（南から）



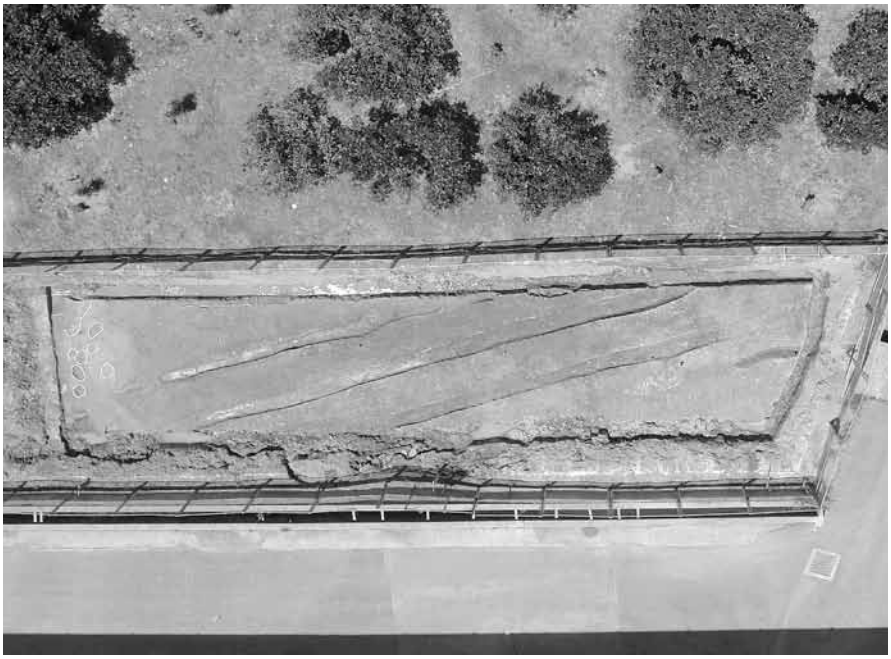
3　2006－Ⅲ区北半　土坑群掘削状況（南東から）

1　2006－Ⅲ区南半　調査遺構全景（真上から：左側が北）

2　2006－Ⅲ区南半　調査遺構検出状況：小溝群（北北東から）

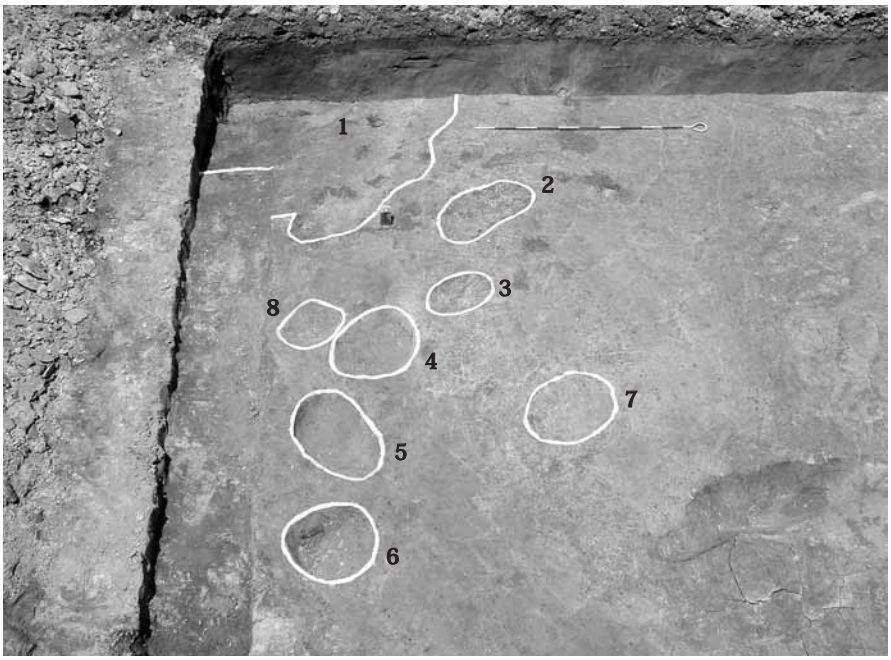


3　2006－Ⅲ区南半　地震による液状化の砂脈（北北西から）



1　2007－Ⅰ区北半　調査遺構全景（真上から：右側が北）

2　2007－Ⅰ区北半　調査遺構全景（南から）



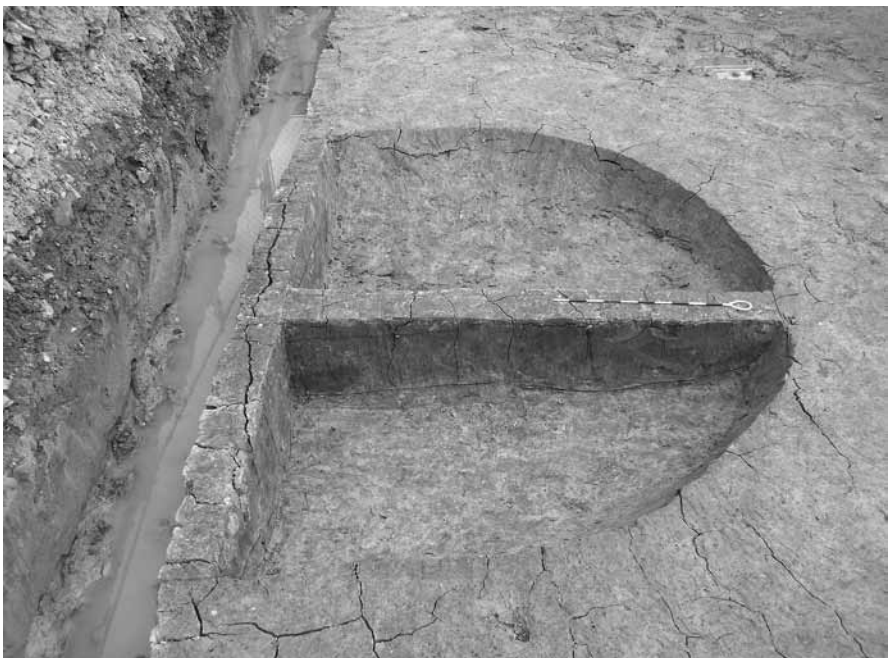
3　2007－Ⅰ区北半E13－x・y・6・7　土坑群（東から）

1　2007－Ⅰ区北半E13－y7　1土坑調査区西壁断面土層（東から）

2　2007－Ⅰ区北半E13－x・y1　調査区北壁断面土層（南から）

3　2007－Ⅰ区南半　調査遺構全景（北上空から）

1　2007－Ⅰ区南半　調査遺構全景(南から)

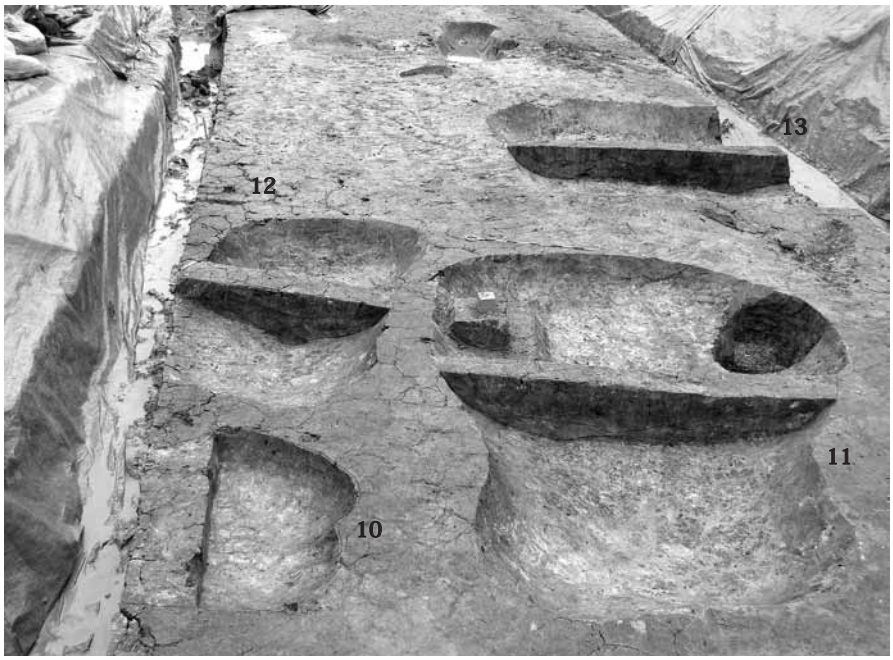


2　2007－Ⅰ区南半E13－x9･10　13土坑東西断面土層(北から)

3　2007－Ⅰ区南半E13－y7　23土坑断面土層:調査区西壁(東から)

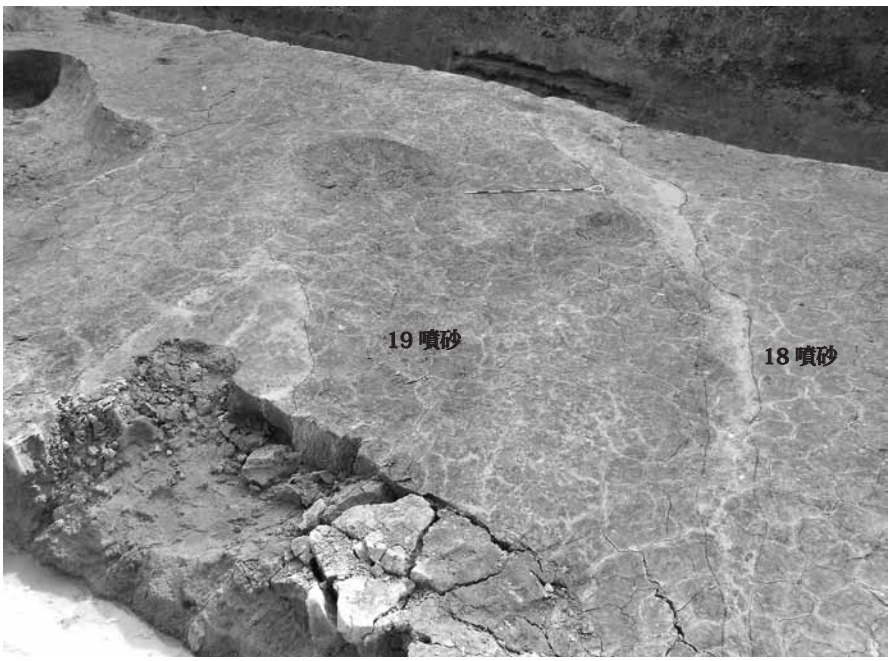
1　2007－Ⅱ区　調査遺構全景（北上空から）

2　2007－Ⅱ区　調査遺構全景（南から）

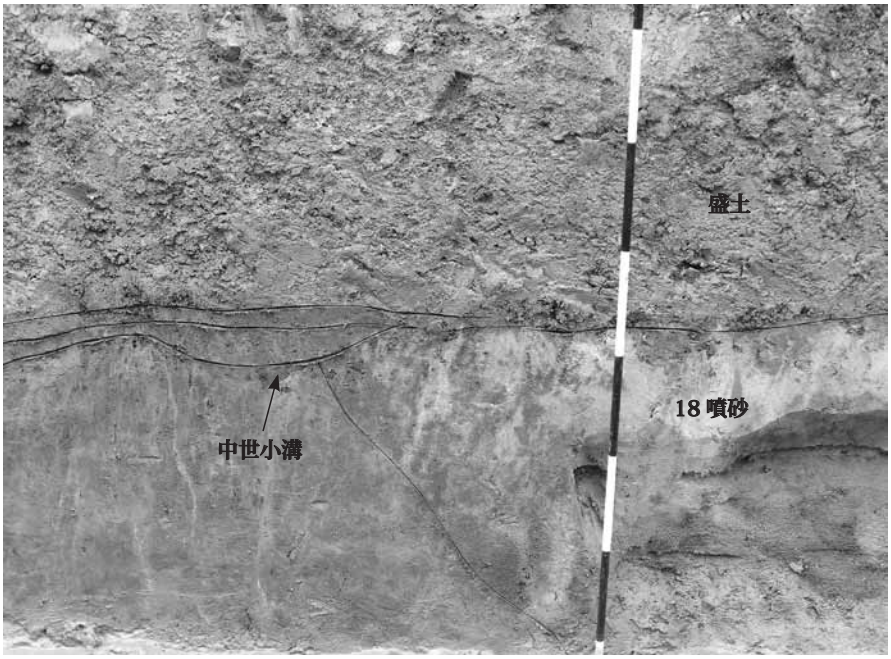


3　2007－Ⅱ区　土坑群東西断面土層（北北東から）

1　2007－Ⅱ区E13－o6　5土坑東西断面土層（北北東から）

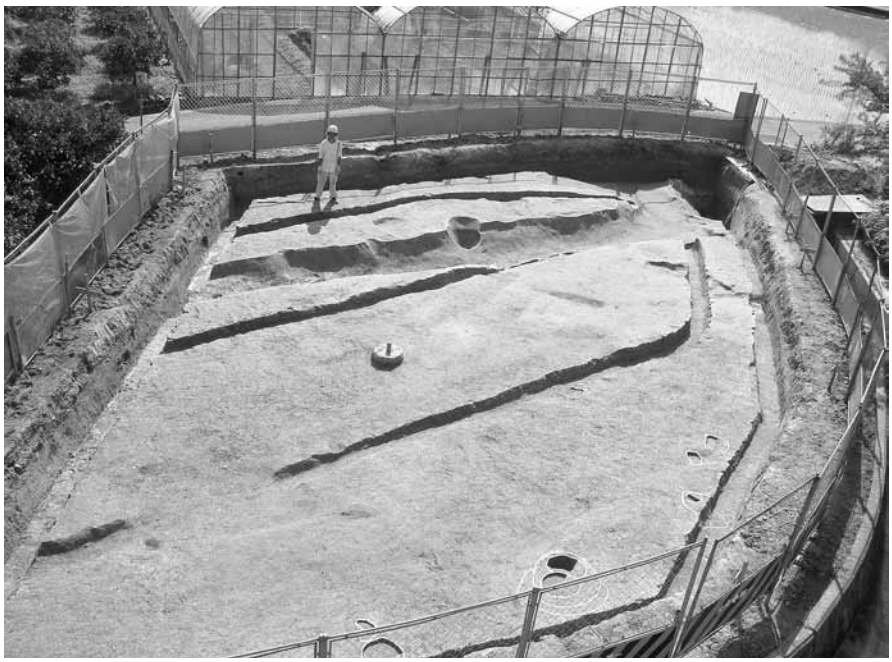


2　2007－Ⅱ区E13－o・p6・7　19・18噴砂の砂脈検出状況（北東から）

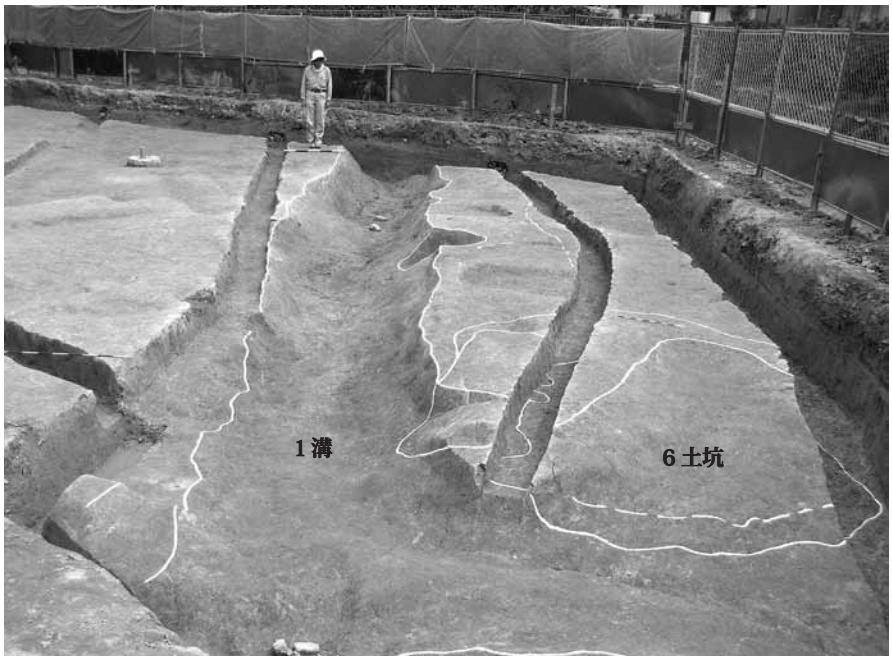


3　2007－Ⅱ区E13－p7　18噴砂と中世小溝の関係細部：調査区西壁断面土層（東から）

1　2007－Ⅲ区　調査遺構全景（真上から：下側が北）

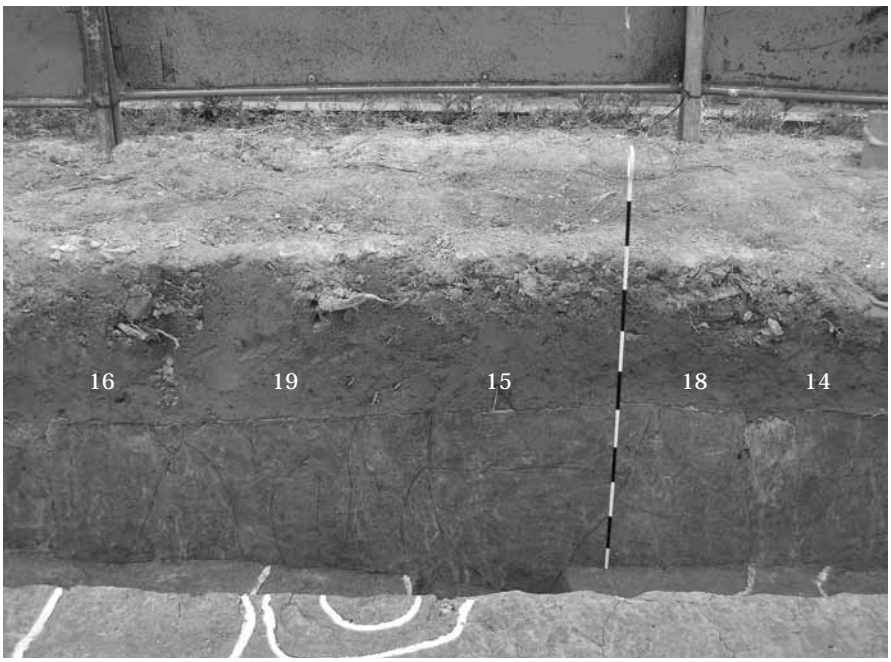


2　2007－Ⅲ区　調査遺構全景（東から）



3　2007－Ⅲ区　1溝完掘状況と6土坑検出状況（北西から）

1　2007－Ⅲ区C12－j1・2　1溝断面土層（北西から）



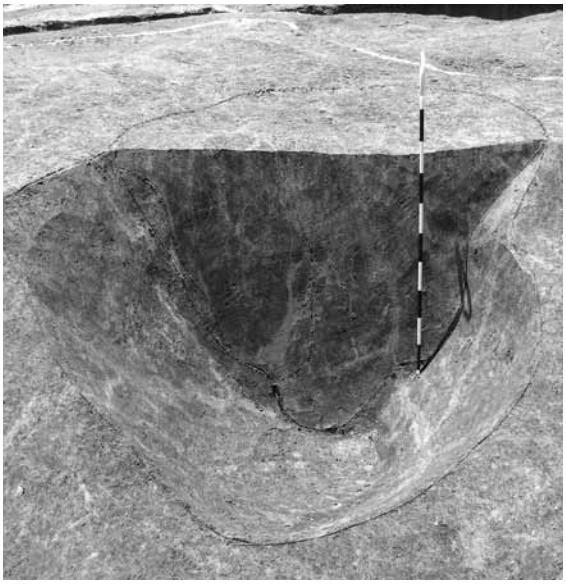
2　2007－Ⅲ区C12－g1　柱穴群断面土層：調査区北東壁（西南西から）

3　2007－Ⅲ区C11－k25　5井戸掘削状況と調査区北壁断面土層（南東から）

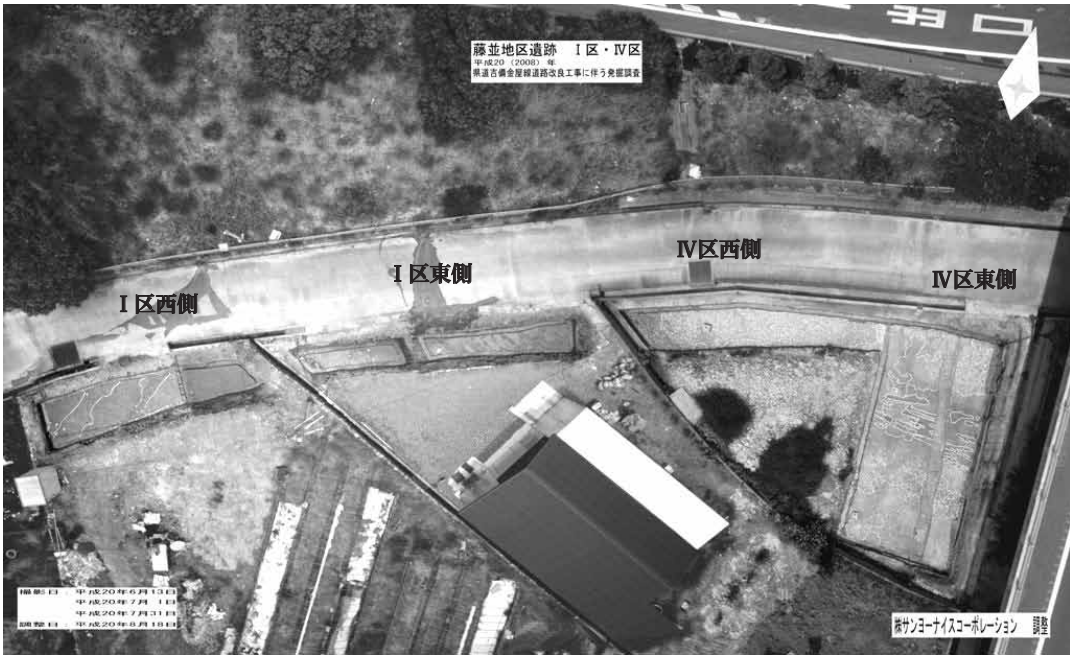
1　2007－Ⅲ区C11－k25・C12－k1　6土坑掘削状況（北北東から）

2　2007－Ⅲ区C11－k25・C12－k1　6土坑断面土層（北北東から）

3　2007－Ⅲ区C12－j1　3土坑（東から）



4　2007－Ⅲ区C12－j1
3土坑南北断面土層（東から）

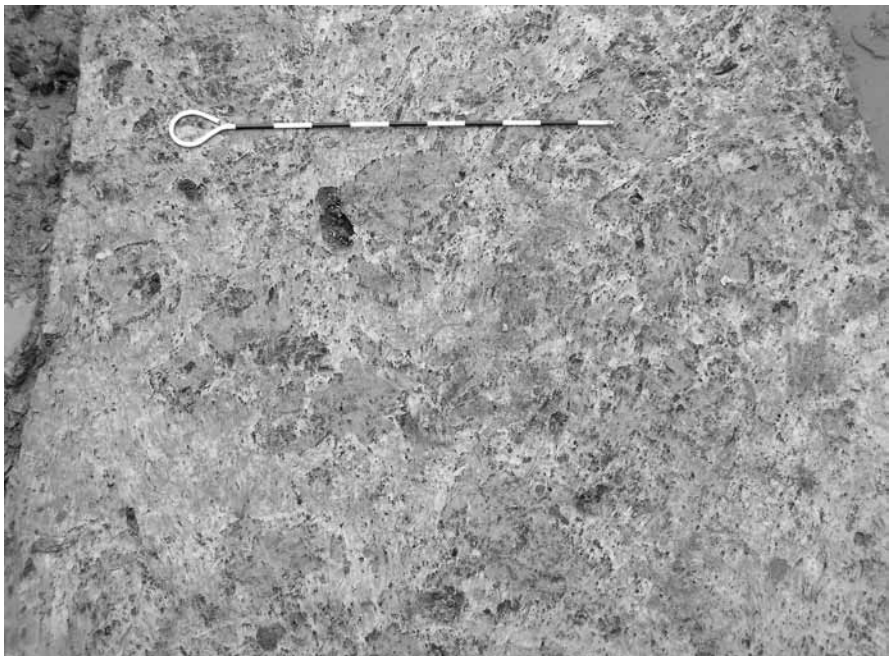


1　2008－Ⅰ区・Ⅳ区　調査遺構全景デジタルモザイク（真上から：上側が北）

2　2008－Ⅰ区西側西　水田区画検出状況（南南西から）

3　2008－Ⅰ区西側東　水田踏み込み検出状況（東から）

1　2008－Ⅰ区東側東　水田踏み込み検出状況（東北東から）



2　2008－Ⅰ区東側東F12－e7　水田踏み込み検出状況細部（東北東から）

3　2008－Ⅰ区西側東　調査区北東壁断面土層細部（南西から）

1　2008－Ⅳ区　調査遺構全景（真上から：上側が北）

2　2008－Ⅳ区　水田面掘下げ状況（西北西から）

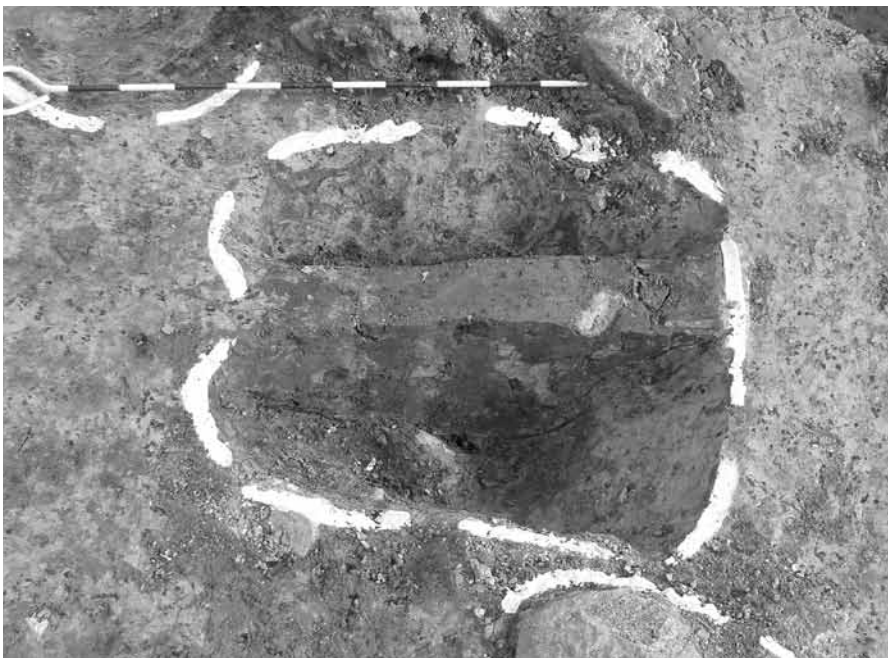
3　2008－Ⅳ区東側　調査遺構全景（北から）

1　2008－Ⅵ区南西半・南西端　調査遺構全景（北上空から）

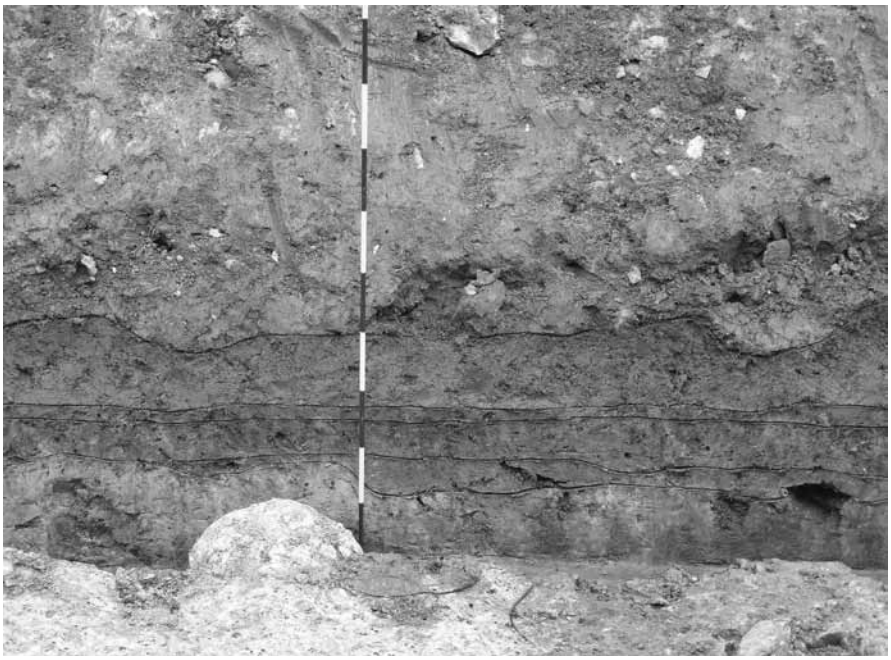
2　2008－Ⅵ区南西半　1溝全景（西南西から）

3　2008－Ⅵ区南西端　調査遺構全景（南南西から）

1　2008－Ⅵ区北東半　遺構検出状況全景（南西から）



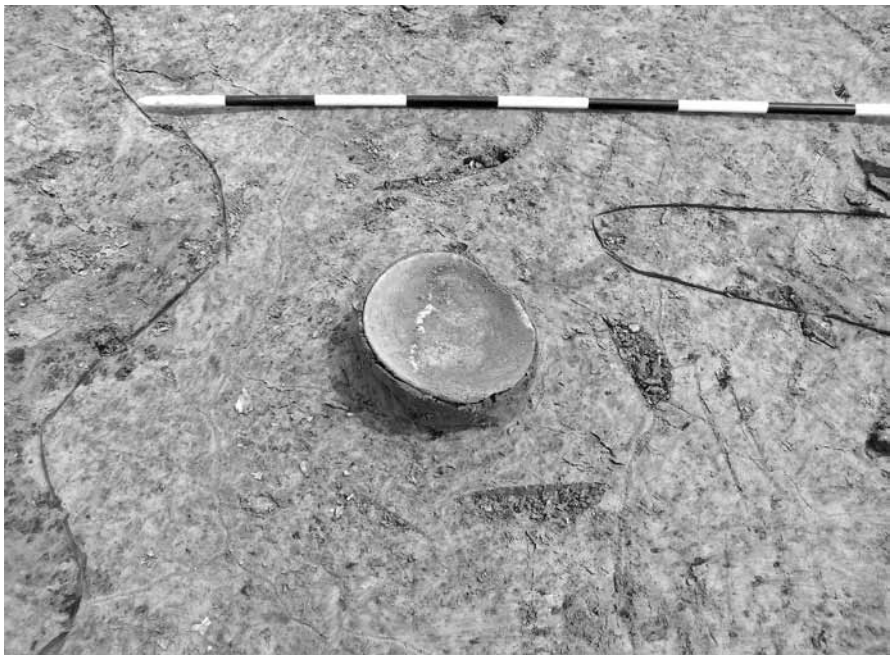
2　2008－Ⅵ区北東半F12－o13　11土坑掘削状況・南北断面土層（北寄り西から）



3　2008－Ⅵ区北東半F12－n13・o14　調査区南東壁断面土層（北西から）

1　2008－Ⅱ区東側　調査遺構全景（北から）

2　2008－Ⅱ区東側E12－m19周辺　第３層下面遺構（西から）

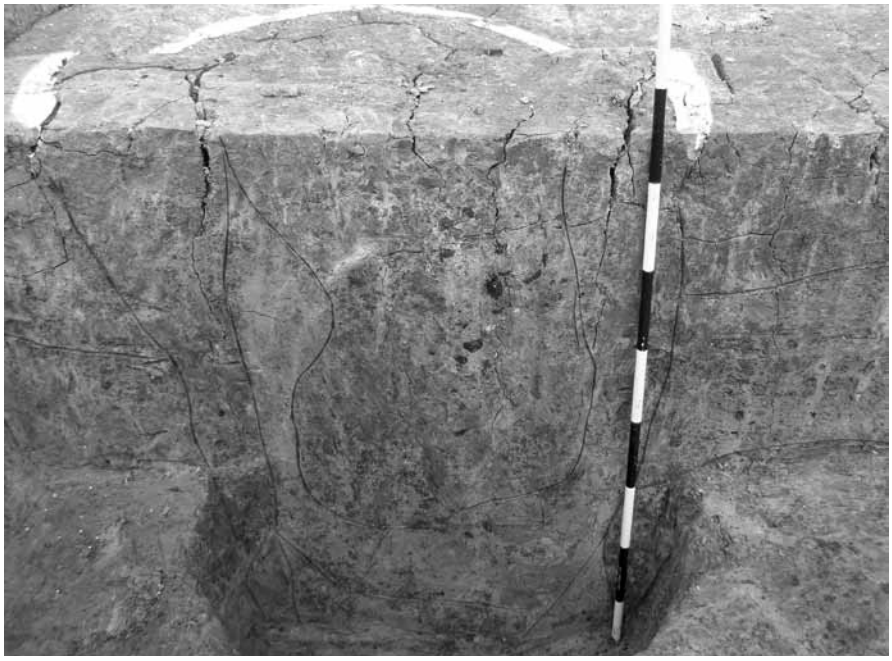


3　2008－Ⅱ区東側E12－m19　包含層第３層内遺物出土状況（北から）

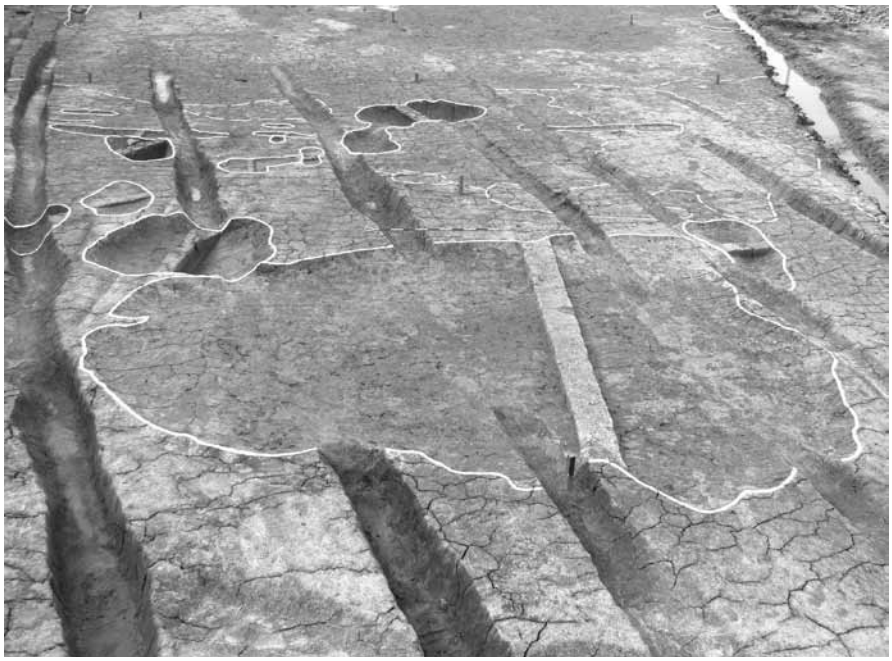
1　2008－Ⅱ区西側　調査遺構全景（東上空から：右側が北）

2　2008－Ⅱ区西側　調査遺構全景（北から）

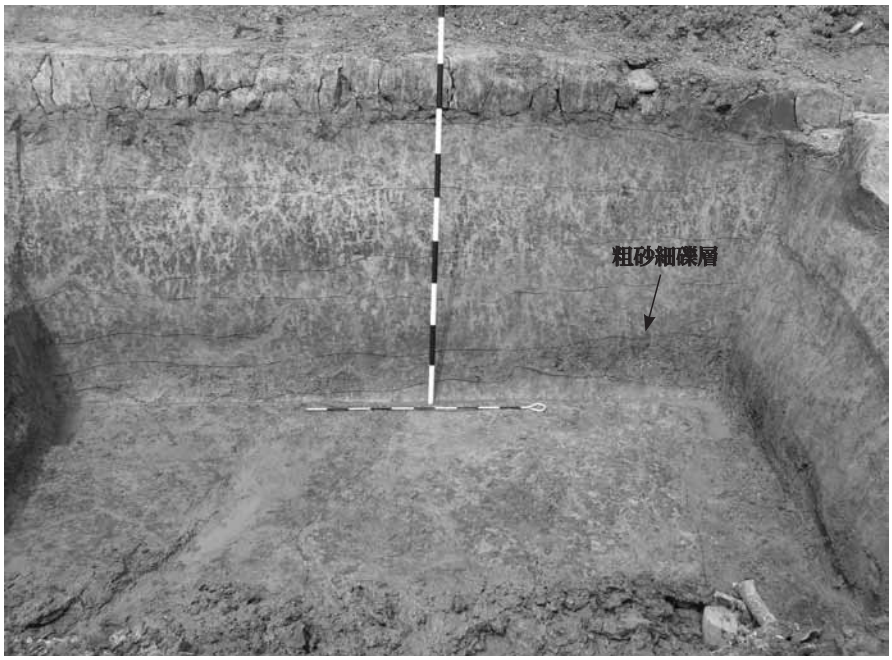
3　2008－Ⅱ区西側E12－o・p17～19　掘立柱建物１（東から）



1　2008－Ⅱ区西側E12－o17　掘立柱建物１　33柱穴南北断面土層（西から）

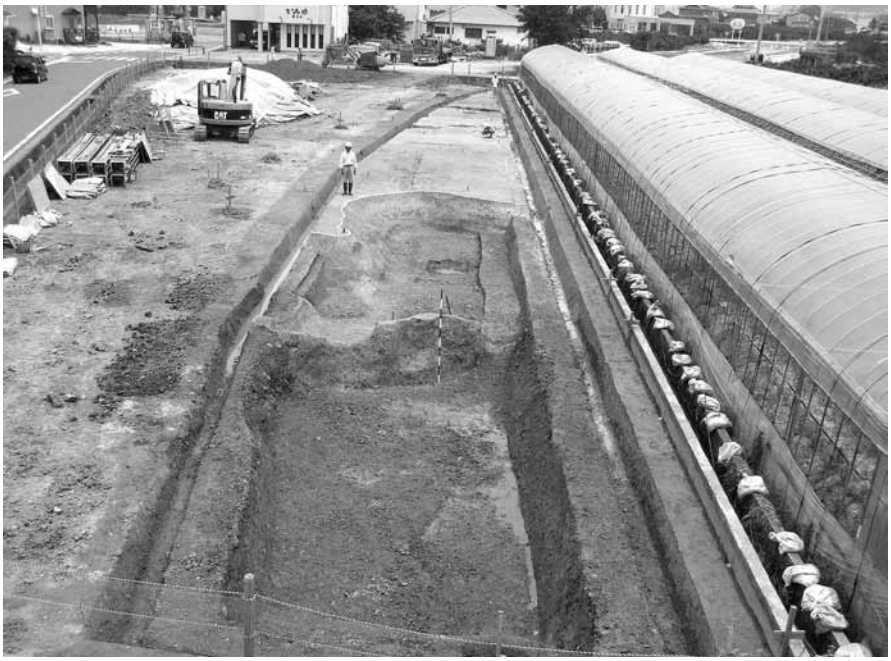


2　2008－Ⅱ区西側E12－o・p22　21土坑（南南西から）



3　2008－Ⅱ区西側E12－q22・23　補足調査　調査区西壁断面土層（東から）

1　2008－Ⅲ区　調査遺構全景（真上から：手前右下が北）



2　2008－Ⅲ区　調査遺構全景（西南西から）

3　2008－Ⅲ区　調査遺構全景（東北東から）

1　2008－Ⅲ区東半　土坑群・落ち遺構全景（西南西から）

2　2008－Ⅲ区C12－t1　10土坑（東北東から）

3　2008－Ⅲ区C12－s・t2　補足調査　21土坑調査区南壁断面土層（北北西から）

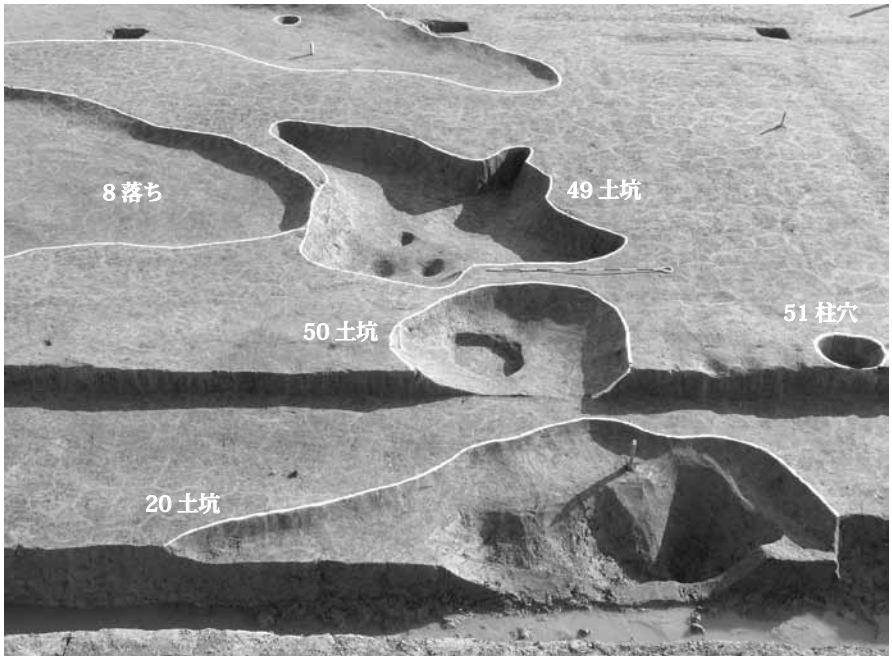
1　2008－Ⅶ区上位面　調査遺構全景（東北東から）

2　2008－Ⅶ区上位面東半部　土坑群・落ち遺構全景（西から）

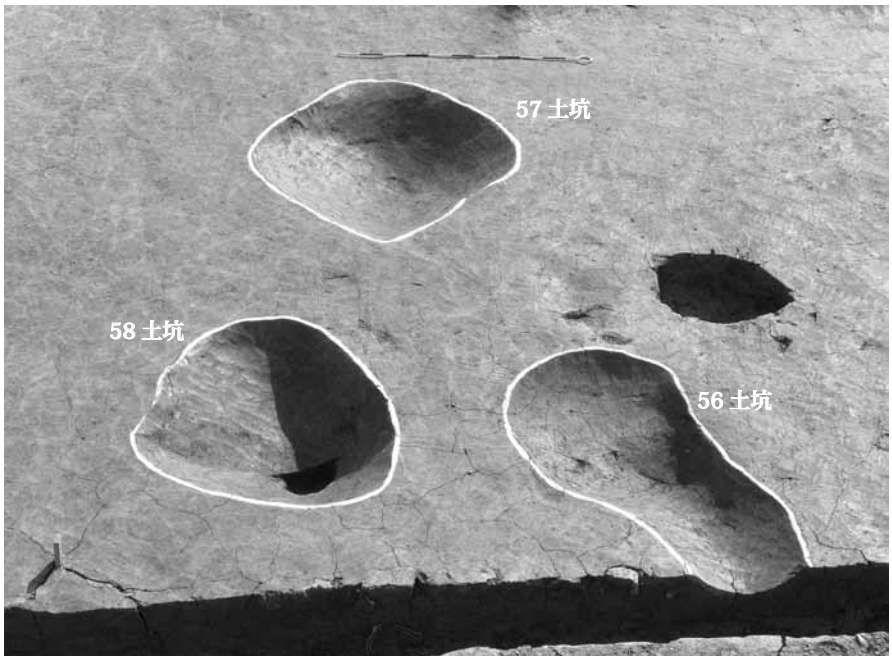
3　2008－Ⅶ区上位面東半部　調査遺構全景（西南西から）

写真図版28　2008－Ⅶ区上位面　検出遺構

1　2008－Ⅶ区上位面　８落ち・８落ち埋土掘削後の遺構（東北東から）



2　2008－Ⅶ区上位面C12－s2・3周辺　20・49・50土坑・51柱穴（北北西から）



3　2008－Ⅶ区上位面C12－o・p1　56・57・58土坑（北北西から）

1　2008－Ⅶ区下位面　調査遺構全景（真上から：手前が北北西）

2　2008－Ⅶ区下位面　粗砂細礫層下面遺構全景（東北東から）

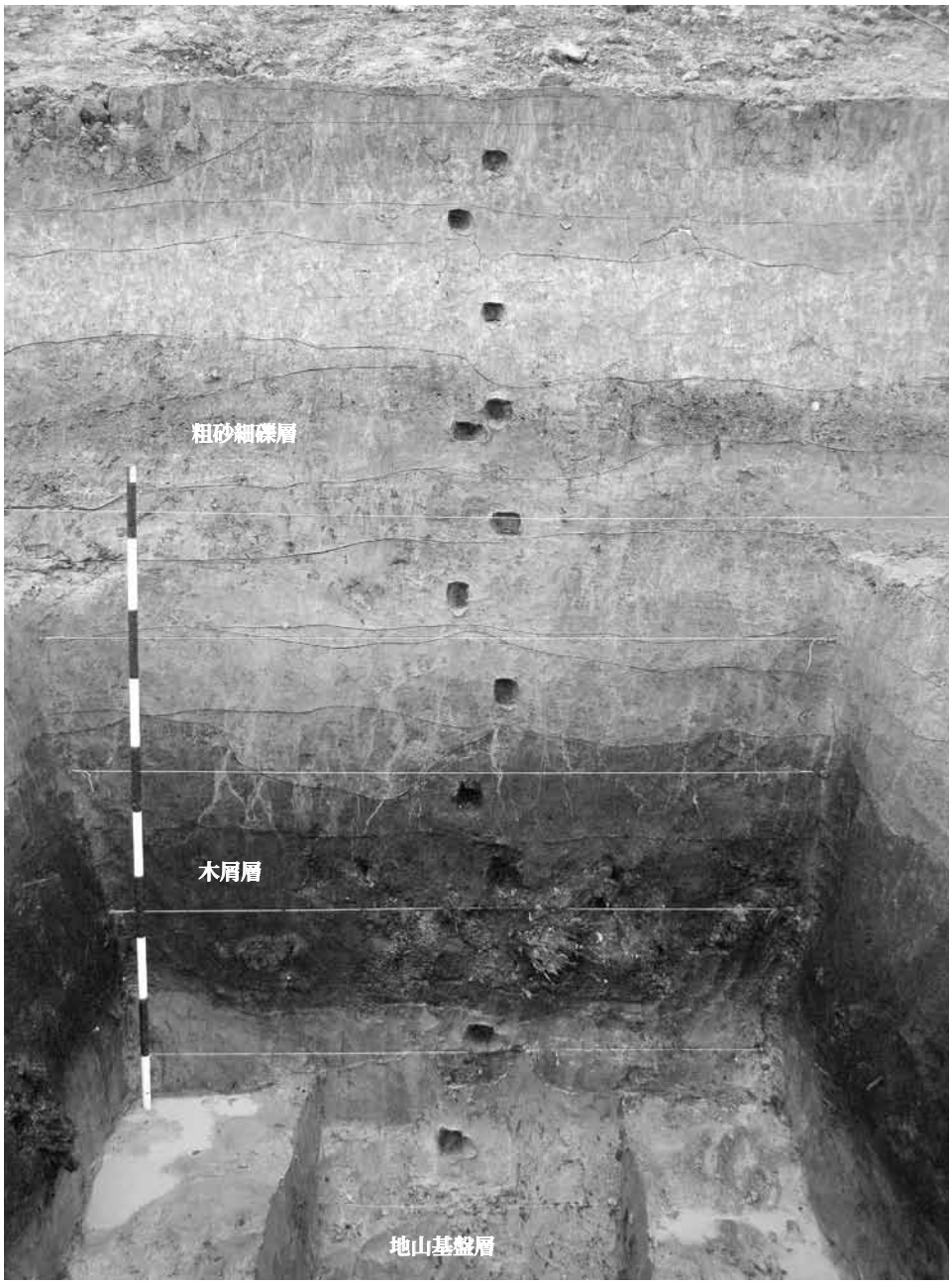
3　2008－Ⅶ区下位面C12－r3・4　101土坑（南寄り西から）

1　2008－Ⅶ区下位面　調査区北壁断面土層（南南西から）

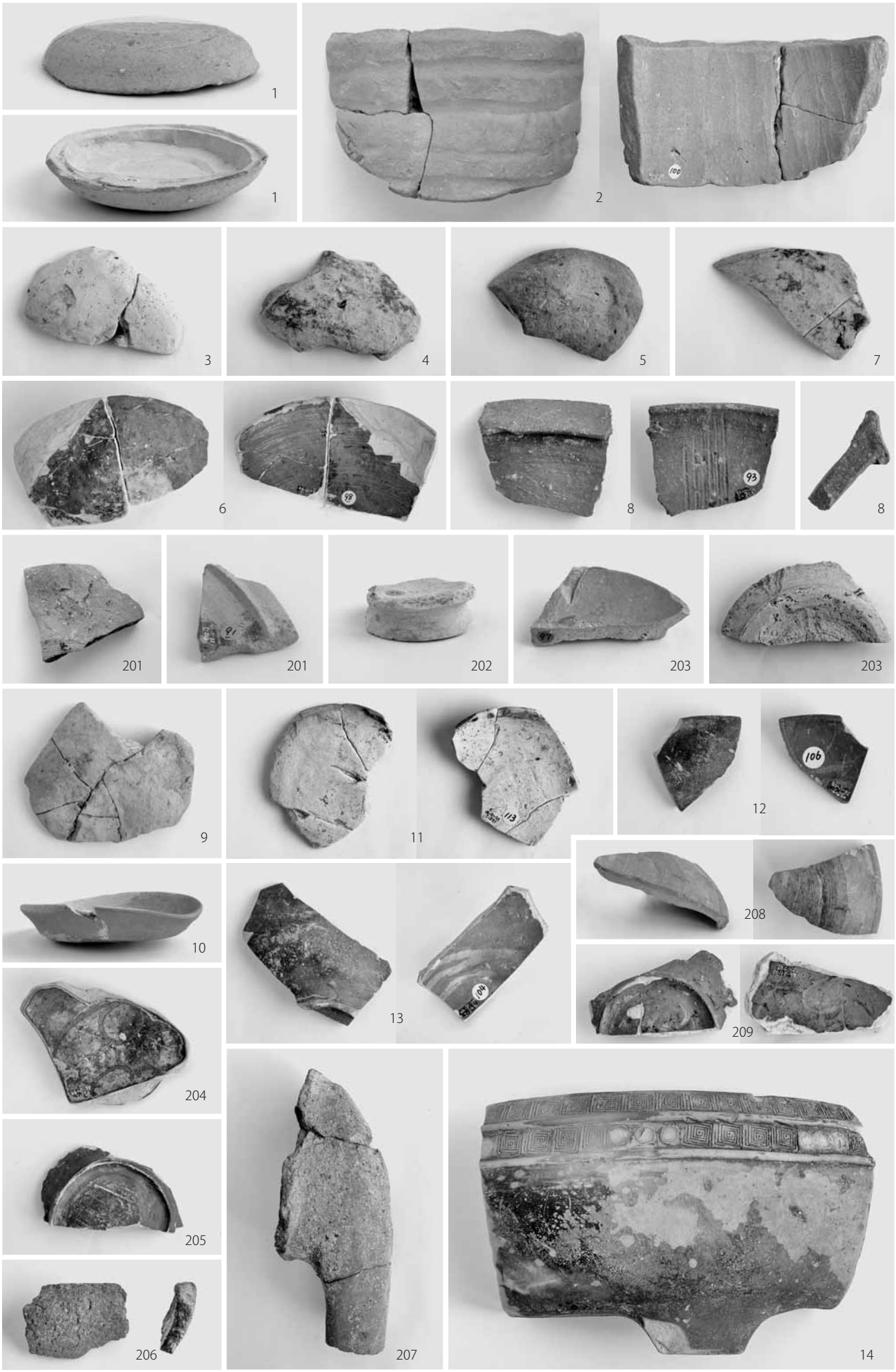
2　2008－Ⅶ区下位面　調査区南壁断面土層　調査区東端から10～20m（西北西から）

3　2008－Ⅶ区下位面　調査区南壁断面土層　調査区東端から20～35m（西北西から）

1　2008－Ⅶ区下位面C12－p3　補足調査A　調査区南壁断面土層（北北西から）

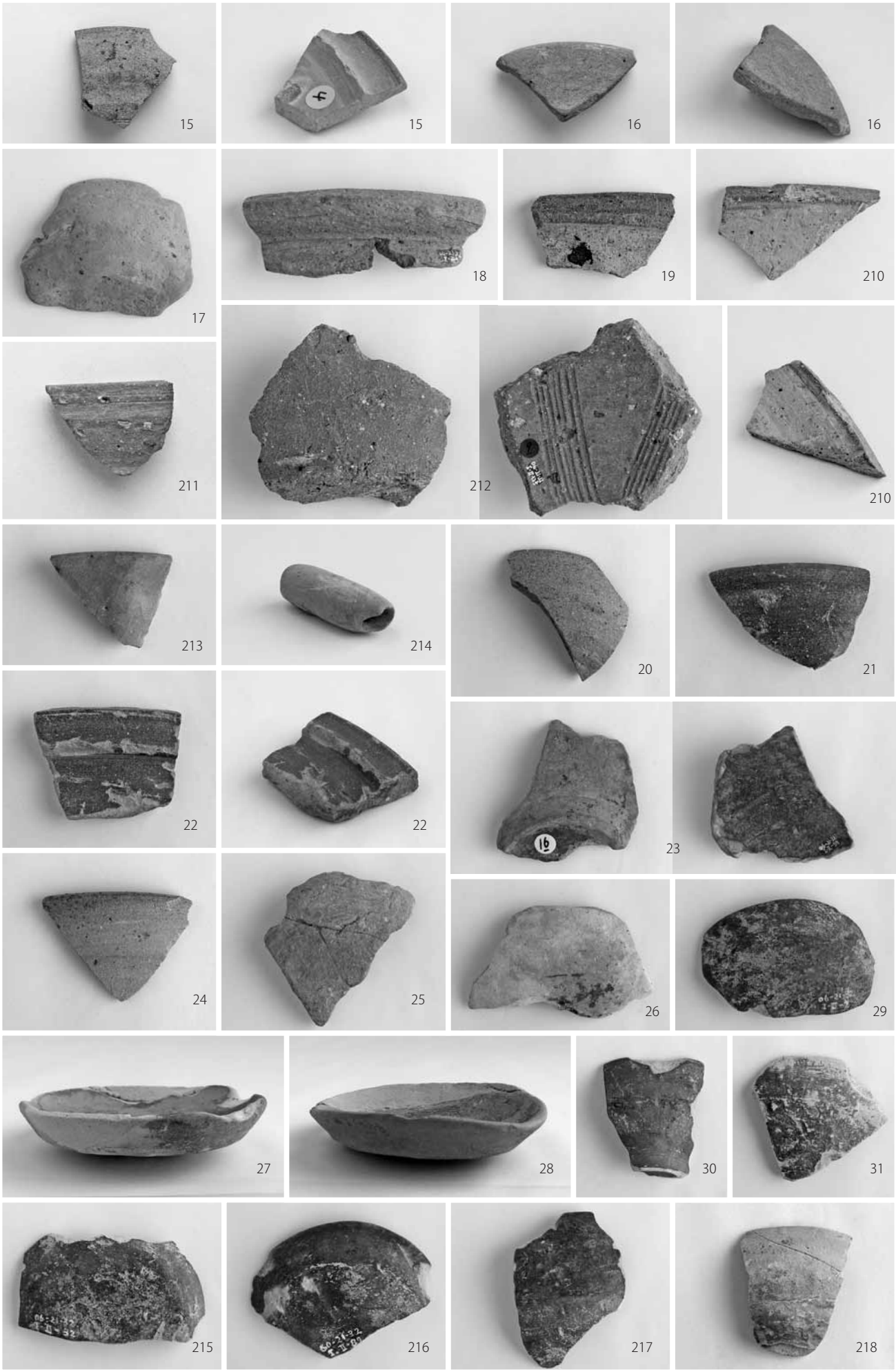


2　2008－Ⅶ区下位面C12－s・t4　補足調査B　調査区南壁断面土層（北北西から）



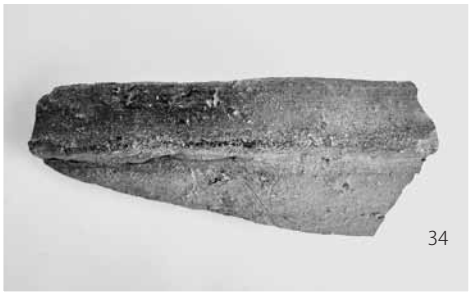
１・２・６:2006-Ⅰ区　基盤層直上踏み込み遺構、３～５・203:2006-Ⅰ区　51谷状落ちより上位層、７:2006-Ⅰ区　54土坑最上層、８:2006-Ⅰ区　第５層系一括、９・10・12・13・204・205:2006-Ⅰ区　51谷状落ち第7a層、11:2006-Ⅰ区　51谷状落ち第７ｃ層、14:2006-Ⅰ区　51谷状落ち第７ｂ層、201・202:2006-Ⅰ区　第５層系一括、206・207:2006-Ⅰ区　52石列状遺構第５層礫多量、208・209:2006-Ⅰ区　51谷状落ち第７a層～ｃ層一括

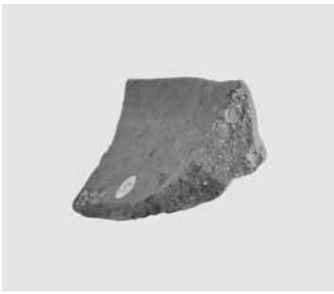
図46に対応

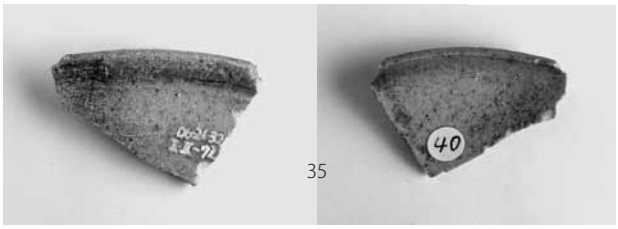


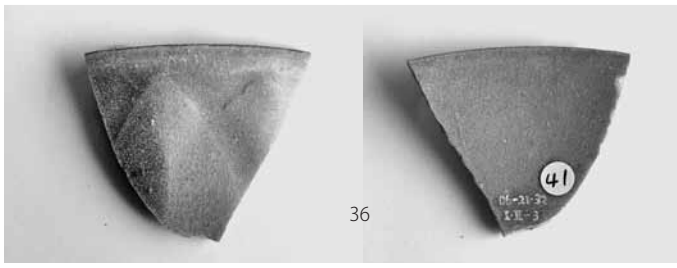
15～17・19・210～214:2006-Ⅱ区 第２層系・第３層系包含層一括、
18:2006-Ⅱ区 第２層系～第５層系一括、
20～31・215～218:2006-Ⅱ区 第３層系包含層一括

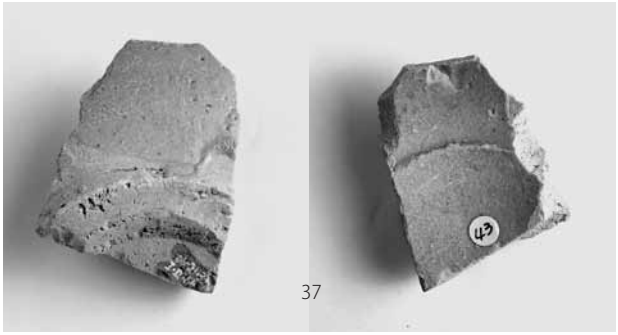
図46・47に対応

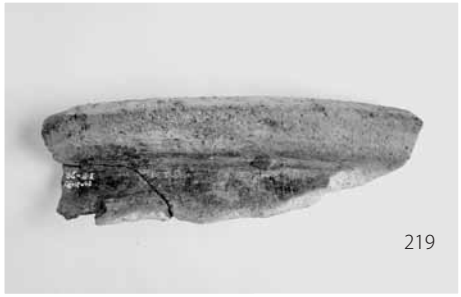


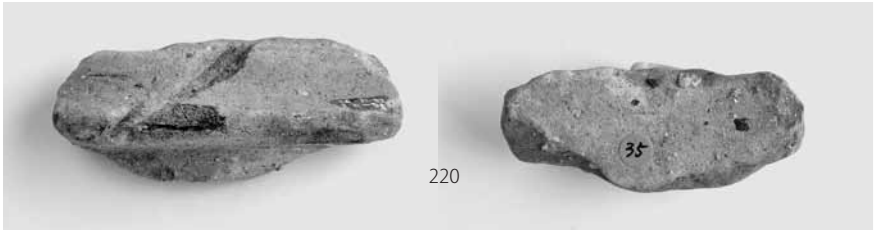


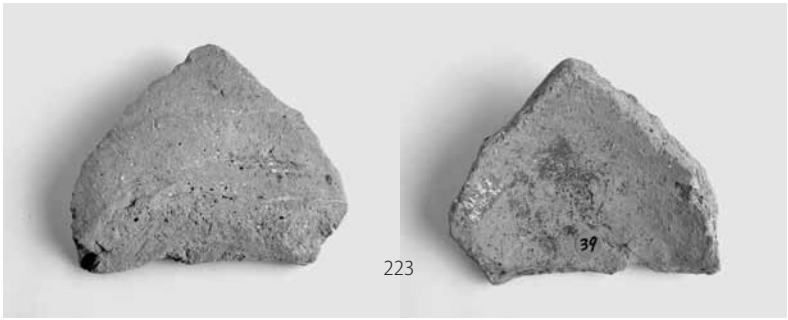


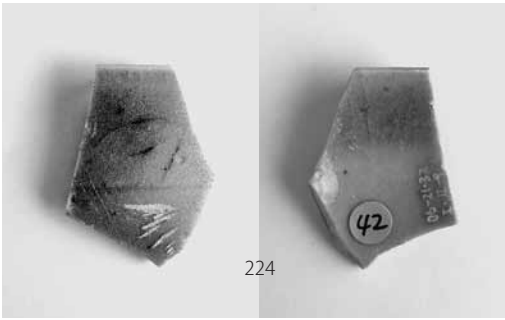


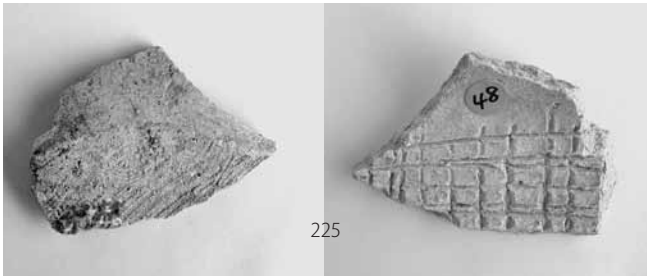


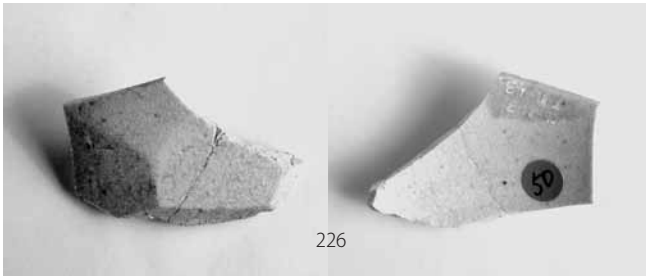












32～37・219～224:2006-Ⅱ区　第３層系包含層一括、
225:2006-Ⅱ区　第３層系包含層下部、226:2006-Ⅱ区　第３層系包含層上部

図47に対応

227

228

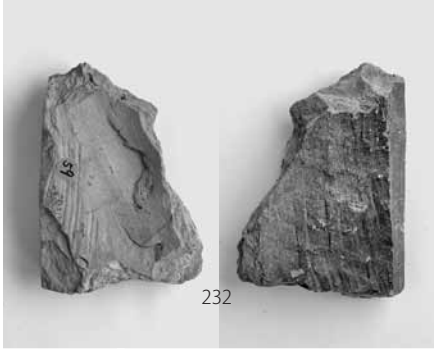
229

230

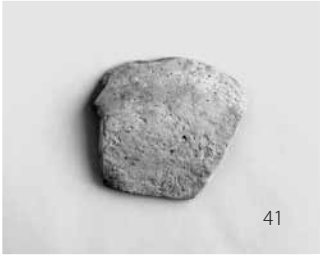
38

39

231


232

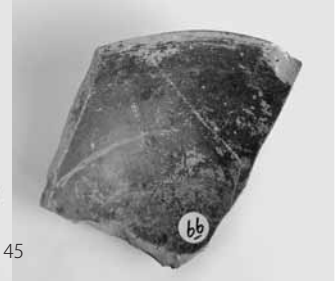
40


41

42

43

45



46

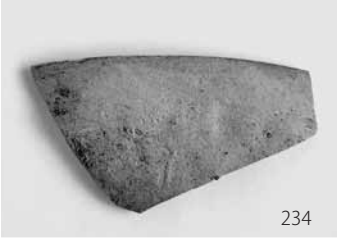
44

47

48

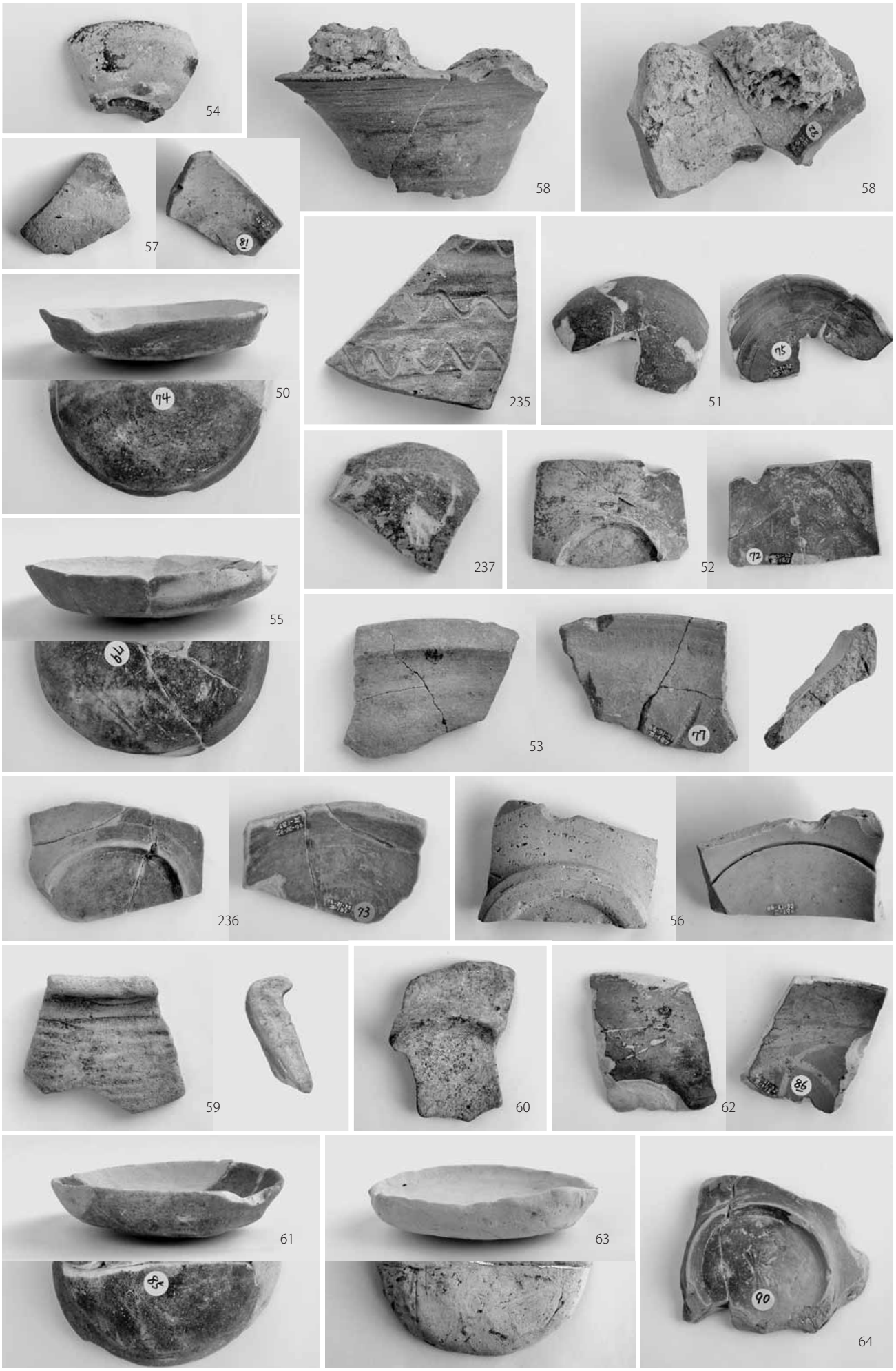
49

233


234

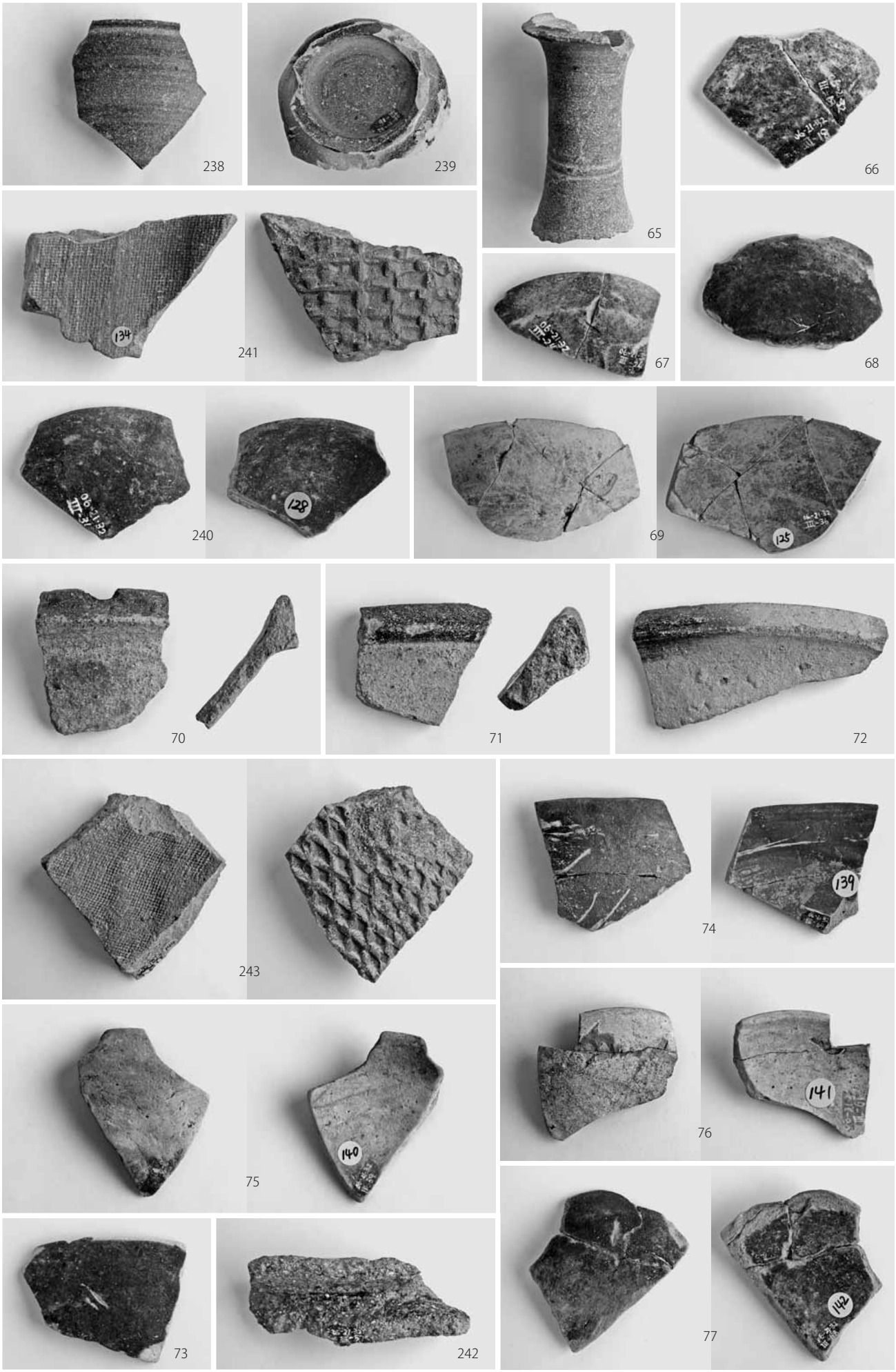
38～49・227～231・234:2006-Ⅱ区　１落ち第５層系一括・一部第３層系包含層含む、
232:2006-Ⅱ区　第５層除去面　踏み込み一括

図47に対応



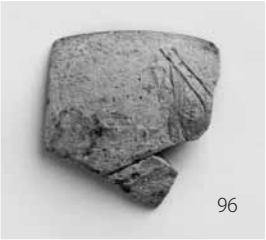
50～53・236・237:2006-Ⅱ区　１落ち第５層系・第６層含む、54～56:2006-Ⅱ区　１落ち第５層系・下部遺構含む、
57～59:2006-Ⅱ区　１落ち第５層系下部、60～62:2006-Ⅱ区　１落ち第６層系、63・64:2006-Ⅱ区　12土坑、
235:2006-Ⅱ区　１落ち第５層系・第３層系包含層下部含む

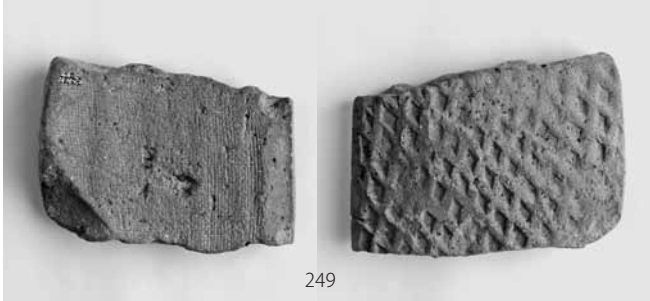
図48に対応

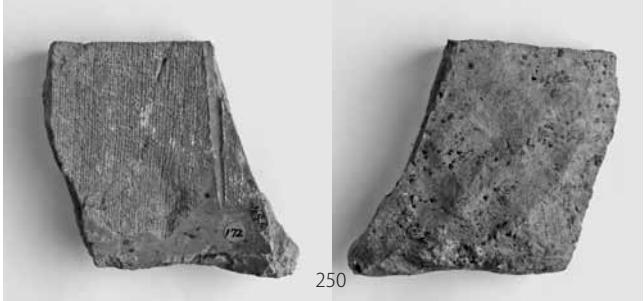


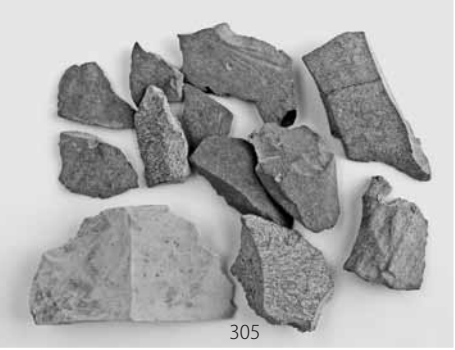
65～72・238～241：2006-Ⅲ区北半　第３層系包含層、73～77・242・243：2006-Ⅲ区南半　各小溝　　図48に対応

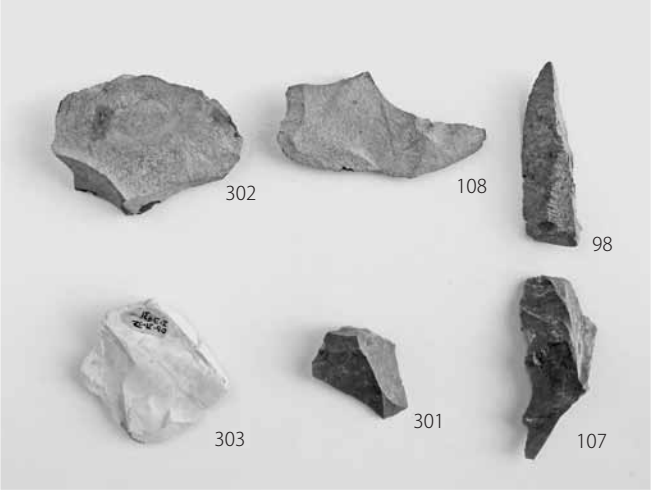
83・86:2007-Ⅲ区　１溝一括、84・85・244:2007-Ⅲ区　１溝上・中層、87:2007-Ⅲ区　１溝最上層、　図49に対応
88～92・245～247:2007-Ⅲ区　１溝中・下層

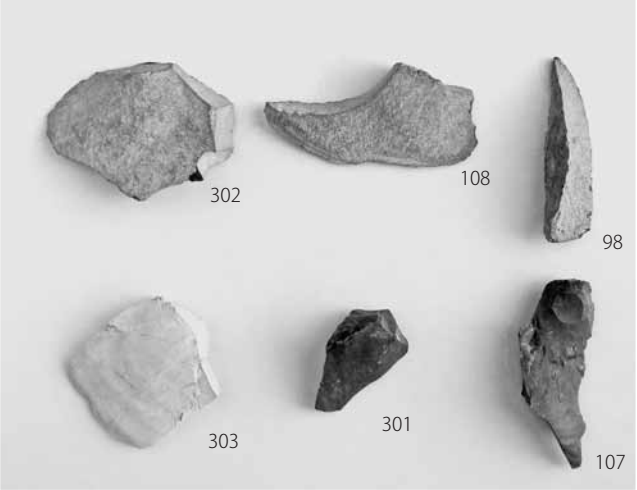


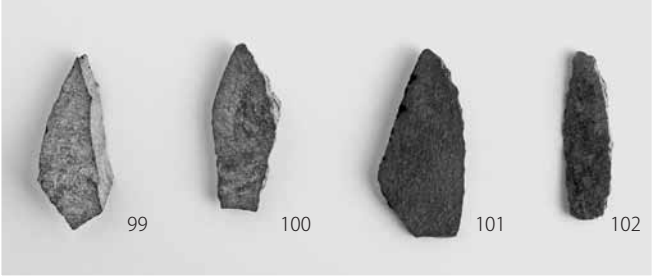


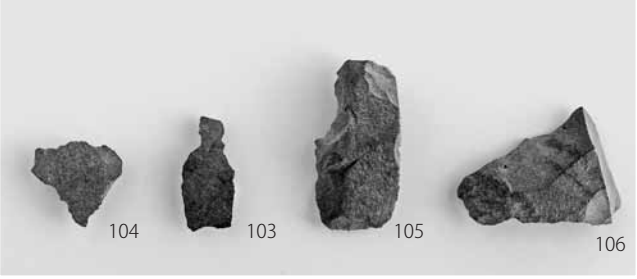












93～96・248～250:2007-Ⅲ区　１溝最下層、97:2008-Ⅱ区　包含層第３・４層、251:2008-Ⅰ区　第３層系包含層、　土器
98・107・108:2006-Ⅱ区　１落ち、99～106:2008-Ⅶ区下位面　粗砂細礫層、301～303:2006-Ⅱ区　第３層系包含層、　図49に対応
304:2008-Ⅲ区　30土坑、305:2008-Ⅲ区下位面　粗砂細礫層　旧石器
図50に対応

109:2006-Ⅱ区　1落ち、110:2006-Ⅱ区　第3層系包含層上部、111:2006-Ⅲ区　第3層系、112:2006-Ⅱ区　第3層系包含層下部、113・114・308・312～315:2006-Ⅱ区　第3層系包含層、115・309:2006-Ⅲ区　第3層系包含層下部、116:2006-Ⅲ区15土坑、117・316～318:2007-Ⅲ区　1溝、306:2008-Ⅱ区　第4層系踏み込み、307:2008-Ⅱ区　包含層第4層、310:2006-Ⅱ区第2層系・第3層系包含層上部、311:2006-Ⅰ区　51谷状落ち、319:2008-Ⅲ区　1粘土採掘坑

図51に対応

藤並地区遺跡

－県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2012 年 3 月 19 日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市湊 571- 1

印刷・製本：株式会社協和

和歌山県海南市赤坂 5-3